

愛を見つめる雑誌

SUN & MOON

SUN & MOON

⑤

縛絆特報ある夫婦プレイヤーからの挑戦



第5号

サン・アンド・ムーン

好評発売中!!

『SUN & MOON』別冊グラフ誌 第2集

《BEACON・ビーコン》

発売元 エドプロダクツ 定価1500円



} M化の馴致・飼育特集!! {

限定3000部・定価1200円

マニアによる『SUN&MOON』好評絶賛発売中
本格SM誌



【創刊一号】掲載内容
■グラビア・脾悦逆さ
吊り行・妊学美・若妻
M化馴致・女奴隷■座
談会「唯美人種のくら
しぶり」■妊婦緊縛■
好事三昧■妻との過去■
義姉とのSM二年■柱と
わたし達■マソ女性への
傾斜他



マニアだけが撮れ
る迫力あるSMフ
ォトの数々。



【二号】掲載内容
■グラビア・剃女逆さ吊り
ロウソク責め・愉悦のひと
とき・若妻緊縛行
■座談会「秘悦に耽ける夫
と妻の立場■妻の過去
■灼熱の間■初めてのSM
写真■マソ女自伝他



SUN & MOON 第1巻 第5号 発売元 エド・プロダクツ

昭和52年11月10日 発行

〒101 東京都千代田区西神田

編集・発行人 世田介一

1-4-13 新神田ビル

発行所 日月舎

☎ 03-293-0741

好評絶賛発売中!!

本格SM誌『SUN & MOON』誌が
贈るマニアによる別冊グラフ誌!!



『SUN & MOON』別冊グラフ誌!!
《マゾ牝虐艶集》
発売元・エドプロダクツ
限定三千部・定価千五百円



代理妻 佐野みさ子の被虐の痴態を暴く!!

SUN & MOON PET 私が三コよ…







雁のように北から来た夫人

——被虐願望の成就を求めて



○目次●

ある夫婦プレイヤーからの挑戦.....	浦戸 宏	9
サデイズム雑感.....	佐久間一章	31
私の嗜虐性を開眼させた女.....	志摩 紫光	35
雁のように北から来た夫人.....	世田 介一	46
愛縛日誌.....	一の瀬莊志	48
私のSMプレイテクニック②.....	ロマン派生	71
疑似分娩.....	睦月笛一郎	78
SM P 雑感.....	鈴井 是雄	81
女性会員のM化馴致.....	宇都宮恵寿夫	87
奴隷妻誕生.....	和田 鋭二	90
わが理想のパートナー.....	尾 河 隆	98
まちの中のエコー.....		104
オーロラ.....		116
変収興起.....		118

写真頁

私がミコよ.....		3
雁のように北から来た夫人.....		6
佐野みさ子代理妻.....		55
縛絆愛虐の記録.....	一の瀬莊志	57
葉村繁樹涉獵アルバム②.....		59
回想の縛女.....	大泉 和也	60
六本木薫緊縛作品集.....		62
奴隷妻誕生.....	和田 鋭二	63
西に棲むM女T PART・3.....		64
読者提供フォト集.....		66
私がミコよ PART・2.....		68



読者の方々へのお願い

本誌『サン・アンド・ムーン』は大人のための愛を見つめる雑誌としての編集方針を掲げておりますが、**公刊誌として現今の法の下における自覚と自粛も同時に要求されています**つきましては右の点を御理解の上、今後とも御支援の程をお願い申し上げます。

尚、本誌に寄稿されました玉稿・フォト等を掲載させていただく場合にも、右の主旨によりまして一部加筆、修正させていただく場合がございますので合せて御理解、御了承くださるようお願い申し上げます。

サン・アンド・ムーン

ある夫婦プレイヤーからの挑戦



縛絆特報

浦戸 宏

はじめに

九月×日、午後十時ごろ、私とカメラマンのS君はメルセデス・ベンツで国道二四六号を西に向かい、二子玉川近くまで来て車を止めた。

今夜の訪問先、玉木夫妻宅へ公衆電話をかけるためである。

「どうぞ、お待ちしております。近くまでお出になれば出迎えに参ります」

まだ玉木氏と私は面識がないけれども、本誌編集長・世田介一氏が事前に段取りや打ち合せしておいてくれるために、初めて受話器から耳にする玉木氏の声には親愛のひびきすら感じられるような思いがした。

多摩川を渡り、玉木氏から指定された近くまで来て、車を止めて待つことにした。

本来なら世田介一氏が直々に玉木夫妻の招待に参ずるところだったが、本誌サン・アンド・ムーンが号をおうごとに好評で月刊体制へとごぎつくれるべく多忙な折りに、不意の所用ができて都合つかず、その代役として私とS君が急拠、玉木夫妻の招待におもむくことになったのである。

ある夫婦

玉木哲男
玉木悦子

プレイヤーから

の挑戦

本誌に敢然と挑戦するかのように「わたし達のプレイを記録してほしい——」と現われたある夫婦プレイヤーのスクランブルである。



玉木氏が出迎えに現われるまで停車した車中で私は腕を組み、瞼を閉じたまま思いにふけていた。

玉木夫妻からの招待は、サン・アンド・ムーンに対する一つの挑戦ではないか、と受けとれる。それは本誌の信頼を問われていることでもある。

「私たちの夫婦プレイを記録してほしい」

これが今夜の玉木夫妻の招待である。もちろん最初は、本誌を手にした玉木氏から世田介一氏宛に封書が届いたのである。

それに返信を出した世田氏と玉木氏とが某所で最初に面談して、本誌の発刊主旨について玉木氏が改めて共感を示され、それでは——という運びに至ったのである。

玉木夫妻の今夜の招待が、サン・アンド・ムーンに対する一つの挑戦ではないか、と私が考えるのは、同好の士なぞという軽率な発想や話だけでは夫婦プレイの場に他者を招くことはできないだろうと思うからである。

招待される側よりも招待する側が、相手に対する信頼がなければできないことである。その玉木氏の信頼に応え得るこちらの心がまえが問われる。しかも現状では多くが人目をはばかってプレイしているのが普通である。

そこから一步踏み出そうとする玉木夫妻のプレイヤーとしての果敢な開拓精神は、言ってみればサン・アンド・ムーンに対する挑戦でもあると受けとれるのである。

サン・アンド・ムーンなら——と信頼と期待を寄せている玉木夫妻に対して、その期待を失望させず、その信頼を裏切らず、責任を果たさなければならぬ。

興味本意や冷かしであってはならない、先方の私生活を尊重しなくてはならない——これは今夜の招待を受けるについて世田介一氏と確認し合ったことでもあり、また今後こういうスクランブルに際しては、常にサン・アンド・ムーンとして心すべきことだと、当然のことながら世田氏と一致した意見である。

こうした思いにふけているうちに、出迎えの玉木氏が現われた。

夜間だからよくはわからないけれども、新興住宅地である。隣接する家とも都内のように建て込んではおらず、夫婦プレイヤーには四囲をそうはばかりずともよい環境のように見受ける。

新築して二年ほどになると言う。その玉木邸の玄関を入り、応接間に私とカメラマンのS君が案内された。

プレイヤー玉木夫妻

ここで先ず玉木夫妻について述べると、御主人の玉木哲男氏は三十二歳の某社に勤めるサラリーマンである。奥さんは二十八歳で家庭の主婦である。四歳、三歳、二人のお子さんがいる。

「子供は今のところ二人だけで——」
と言われる夫妻は、これから本当に人生を楽しもうとしているようである。

結婚して五年、結婚するまでの交際期間がほぼ五年だと言われるから、お二人が知り合ってもう十年の歳月になる。

応接間で自己紹介など終えて雑談している間に奥さんも玉木氏の横に腰かけた。陽気で愛想のいい人柄という第一印象を受ける。

世田介一氏から、予め耳にしていたけれども、プレイを記録させてもらう前に、私から念のために玉木夫妻に質問してみた。

「SMに関心を持たれたのはいつ頃から？」
「わたしは十七、八の頃です。やはり奇巧を見まして……」

と玉木氏は答える。

「奥さんは？」

「家内は、ごく最近ですよ」

「ごく最近と言われますと？」

「二番目の子供が生まれ、手がかからなくなつてからです。それまで、勿論、わたしが奇クやその他SM誌を買い、家で眺めたり読んだりしているのを知ってはいました。しかし、家内はその種の雑誌に対して嫌悪感を持っていたんです。だから、家内に対して、わたしはプレイを試みたくても、それを受け入れてくれそうな様子は全くありませんでした。それでも雑誌など家内の目につく所へそれとなく置いたりしていたんです」

と玉木氏はその間の事情を話してくれる。

「それが、どういうきっかけから……？」

と私は玉木氏と並んで応接間のソファに腰かけている奥さんの顔を見た。彼女は口もとに笑みをうかべ夫が話し始めるのをじっと耳にしているのである。

「わたしたちは、交際期間と結婚生活を合わせると十年來の仲です。普通のセックスにおいては家内を十分に堪能させているつもりです。それにわたしは家内以外の女と浮気をしたことはありません。家内の方でも、わたしを堪能させてくれますから……」

と率直に語る玉木哲男氏の言葉を私は素直



シェパード用の首輪と太い綱が
玉木夫妻のプレイを暗示する

に耳にできた。見たところ奥さんの方は豊満な肉体の持ち主であり、御主人の方は小柄だけれども筋肉質で逞しさを感ぜさせる。

結婚するまでに五年間も交際期間を持っていたという二人は、結ばれるべくして結ばれた仲だと思える。そして、夫婦生活が、きわめて円満に行われていることも素直に受け取れる。それでなくて、何で今夜のように私たちが、こうして招待されることがあろうか。「ところが、縛られるなんて、いやよ、と拒みつけていた家内に対して、わたしは普通のセックスの最中に、家内が燃え上がったところを見計って、おい、縛るぞ、と口に出してみたのです。彼女は夢中になっている状態で、そう言われたものだから、つい……」

と玉木氏は奥さんの顔を見るのであった。「なるほど、そういうきっかけでプレイの糸口を掴まれたわけですね」

と私は二人の顔を見比べた。

「ところで、奥さんの方は、なぜ御主人の希望を拒んでいたのですか？」

と今度は彼女に質問してみた。「だって……縛られるなんて、恥ずかしくて本当に、いやでしたわ」

と、初対面の私に対して恥ずかしげにやや

顔を伏せる奥さんに、

「しかし、結婚して五年、その前の交際期間を入れると更に長いお二人でしょう？」

と私が言うと、玉木氏が、

「ところがですね、プレイと言えば今、店頭を賑わしているその種の雑誌の口絵写真のうちに、ロープでギリギリに縛られる、そんなふうには家内は思っていたらしいです。これは商業SM誌の演出写真がもたらす弊害でもあると思いますよ。とりわけこれからプレイをと考えている初歩の人たちにとっては……」

と言う意見には私もうなずける。

「つまり家内はロープで縛られることによって肌を傷つけられるのを極度に恐れていたとも言えるでしょう。それと、もう一つ肝心なことは今でも、わたしがロープを持ち出して、さあ始めるぞ、と言いますと、縛られることにとても恥ずかしがる、羞恥を全身でしめすことがあるんですよ」

と説明してくれる。

本格的に夫婦プレイを始めて一年余、それ以前のプレイへの導入過程を入れると一年半以上になるといって玉木夫妻である。それなのに、未だに奥さんの悦子さんがロープに対して何故それほどまでに羞恥心を覚えるのか、

その時、話だけでは私にはよく呑みこめなかったけれども、後でプレイに入ってから、それにうなずけるシーンを見せられたような気がしたのである。

「ですから家内が、今でもわたしがロープを持ち出すと、それに恥ずかしそうな態度を見せるのはわたしにとって新鮮な刺激にもなります。一つの家の中で生活を共にしている夫婦ですから、何もかも慣れあいになってしまえば、やはりプレイの新鮮な刺激は失われていくのが普通ではないかと思いますが……」

と玉木氏は話すのである。

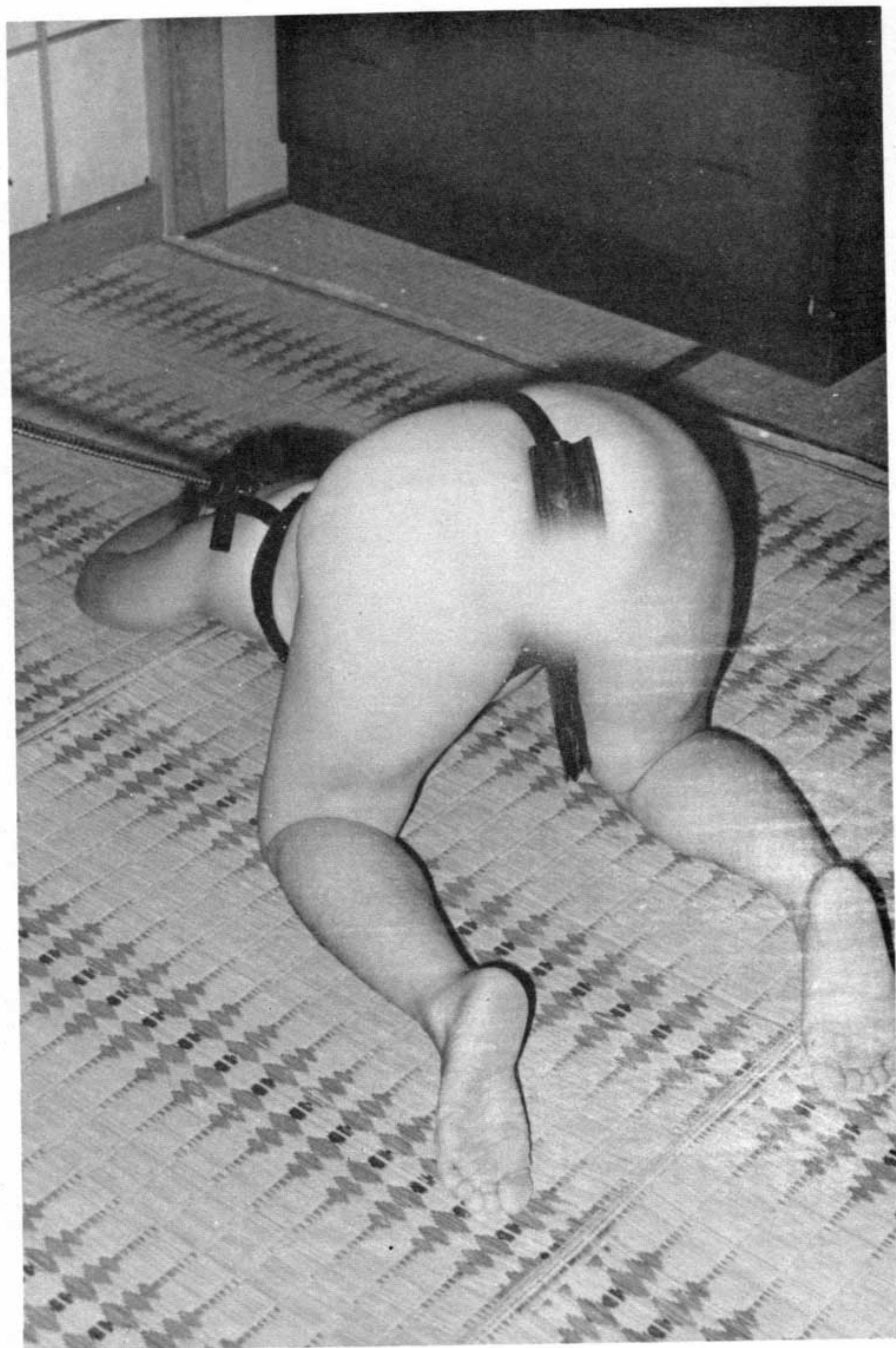
「すると、奥さんの方で今夜は縛られるのはいや……と、プレイを拒否されたりすることはありませんか？」

私は念のためにたずねた。

「あります。そういう時は、普通のセックスから入ることにしています。家内が燃えてきますと、そこで中断して縛りに入っていくわけです」

「なるほど……」

と私はうなずいた。玉木氏の話には無理がないし、自分たちのプレイを誇示しようという見栄もない。円満な夫婦生活の営みのなかで、巧みに奥さんをリードしながら、思いや



色白で見事な玉木夫人のヒップ

りを持ってプレイの濃度や密度が深められているように見受けられる。

プレイ開始

子供たちは二階に寝かせているということである。そしてプレイは階下の六畳の和室でということになっていた。

時計を見ると十一時近い。

「それでは、始めましょうか」

玉木氏が私にそう言い、横に腰かけている悦子さん（玉木夫人）を眼で促した。

応接間から私たちはその和室へと案内される。畳の上にゴザを敷き、そのかたわらには洗濯したばかりの白いシーツをつけた敷布団も用意されていた。

カメラマンのS君は、手軽で便利だからとオリンパスOM・2を二台用意しており、フィルムはすべてモノクロである。

「きみはプレイを連続的にポイントを押さえながら撮ってくれ。モデルを使つての撮影ではないから、ポーズに注文をつけたり、余計な口をきいたり、それら一切しないでくれ。狙いは夫婦プレイの臨場感だからね」

と私は予めS君に言い含めてあった。

「ロープだけではどうかと思うので、参考までにレザーを持って行つたほうがよいかもしれないよ」

と言う世田介一氏の案で、用意してきたレザーを取り出し、玉木氏にすすめると、

「初めにやってみましょう」

と即座に応じてくれた。

いつもは玉木夫妻二人だけのプレイであるため、私たち二人が臨場したことで、玉木氏も初めは緊張気味だったし、奥さんのほうが更に身を固くしているようにも見えた。

その玉木悦子さんの全裸を初めて眼に入れたとき、肌の白さ、なめらかさに、思わず眼をみはった。着衣の上から肌の白さを想像してはいたけれども、改めて美肌を眼に入れたとき、ロープで縛られるのを拒みつけてきた彼女の心情がわかるような気がする。このやわらかい白い肌では縄目の跡がつくと、すぐには元にもどらないかも知れないな、と私は眺めた。

「レザーは前にも一度使ってみたことがあるんですよ」

と玉木氏は私が持参したレザーを彼女に着装する。白い肌に黒いレザーをつけると、それまで玉木夫人であった彼女が、次第にM女

と変身していくように見えてくる。

二十八歳の玉木夫人は、二人の子供を持つ母親としては乳房のたるみがないし、若々しい。その乳房がレザーで拘束されると、ぎゅっと突き出して見事である。

胸と股間にレザーを着装し終わると、玉木氏は更にシェパード用の太い縄のついた首輪をはめる。こうしてM女へと変身する彼女を眺めつつ、

「玉木さん、あなたの思いつくままにプレイを進行してください」

と私は言い、口出しするのを一切控えることにした。

いつもと勝手がちがう、ということとはプレイする夫妻が一番感じているようだ。首輪をつけた彼女を、ゴザの上に犬のように四つんばいにさせて、玉木氏は足蹴にした。

首輪に取り付けている綱を引きつけながら彼の足が色白の豊かな臀部をぐいぐいと踏みつける。

「うっ」

と彼女はゴザの上に顔をもろに伏せたまま小さな呻きをもらすが、まだプレイに溶込んでいけないもどかしさがそばにいてわかる。

そんな彼女に対して上半身裸になっている

玉木氏は容赦なく足蹴にしたり、ゴザの上を這いずり廻わすように首枷についている綱を引っ張ったりして攻める。それをS君がシャッターを押そうとするので、もう少し待てと私は手で制した。

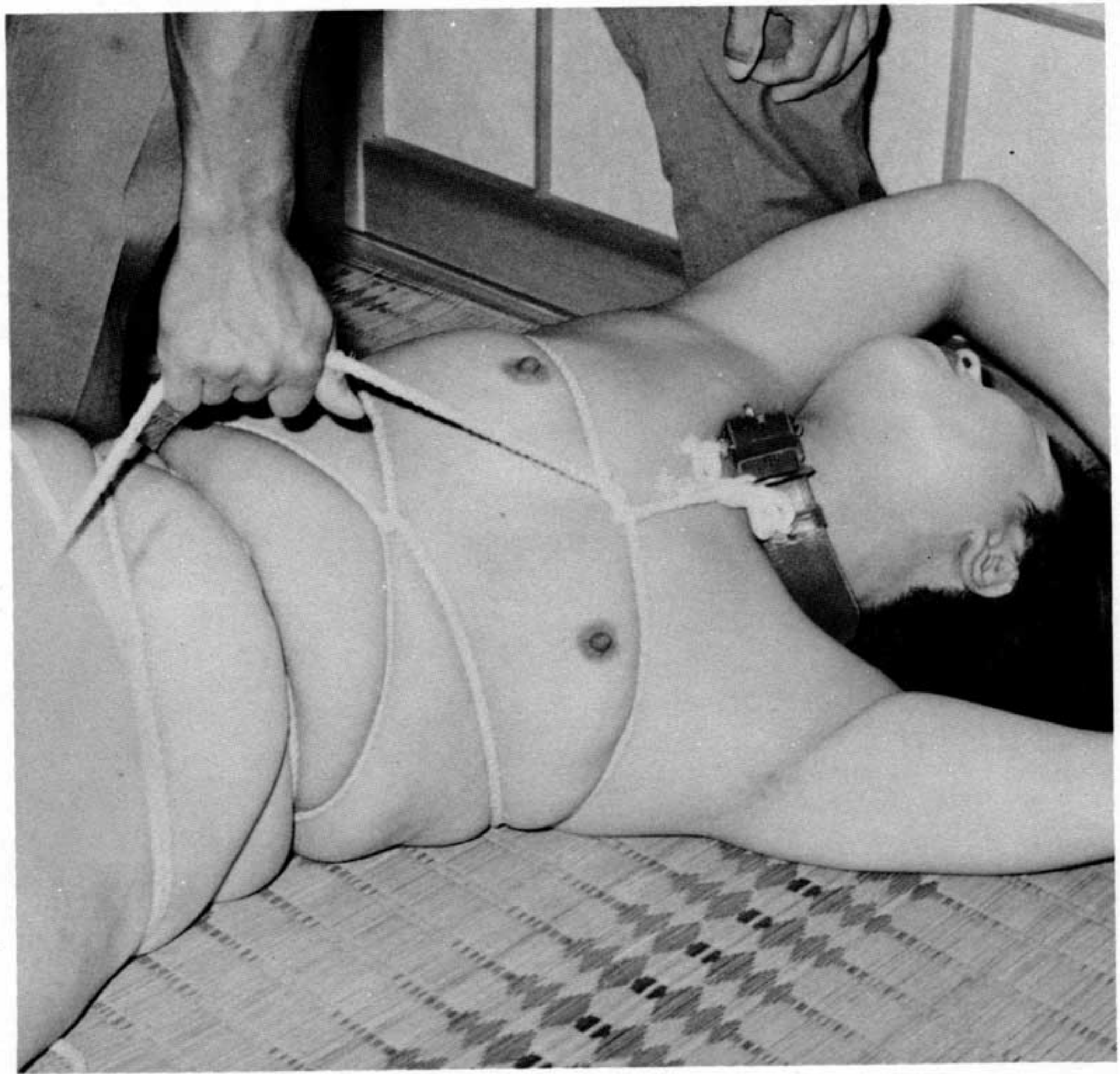
玉木氏自身も、招待した私たちを失望させないために、攻めながら彼女の気持を何とか早くプレイへと引き込む努力をしているのが、そばで見守っていてよくわかる。その彼の気持が伝わってくるのである。

それにもかかわらず、夫人がいつもよりもプレイに没入できないでいるのは、いくつか理由が上げられるだろう。

レザーを着装した彼女を痛めつけるようにして攻めても、そういう虐待に奥さん自身が即座にM的な反応をしめすまでには、まだ至っていないように感じられた。それは玉木夫妻のプレイが一年半余というキャリアのせいだとは決めつけられないだろう。

夫妻のプレイはSEXからの導入という前提と過程を辿ってきているのである。多くのプレイヤーたちがそうであるように、これは精神的にも性意識としても健康である左証であらう。

性感体への刺激を伴わずして、いきなり、



タテナワで股間を攻められる玉木夫人

虐待したり痛めつけたりしても、それは現時点での玉木夫人にとっては単なる苦痛にすぎない、そう言えるのではなからうか。

M女としての感受性をいかに秘めていようとも、通俗SM小説に登場するM女のごとく虐待されるだけで、はやヒーヒー反応をしめすということは現実のプレイ、殊に夫婦プレイヤーにおいてはそうあり得ない、ということとを改めて知る思いである。勿論、キャリア豊富なM女とか、例外ということはあり得ることだし、それは別の話である。

やがて首枷の綱を引っ張るようにして攻めつけていた玉木氏が、つと四つん這いになっている奥さん抱き起こすようにして、胸を締めつけたレザーから突起している両の乳房を攻め始めた。それを、いかに夫人が期待し求めていた攻めであったかは、すぐにその反応が私の眼や耳に入ってきた。

色白の顔を紅潮させ、両眼を閉じている表情がひどく燃えているように見え、呼吸の乱れと共に口から自然な声がもれてくるのである。

乳房だけではなく同時にレザーに拘束されている股間にも玉木氏の愛撫の手がのびていたとき、ゴザの上で足蹴にされたり首枷に

付いた綱で引きずり廻されたときには見られなかった玉木夫人のM女としての反応を私は見たのである。

二度のアルコール浣腸

「次はやはりロープにしましょうか？」

レザーで拘束した玉木夫人の乳房と股間とをひとしきり愛撫して、彼女の緊張をほぐしてしまった玉木氏は、愛撫を中断して私を振り向いた。

「いいですよ、御自由にやってください」

私も夫妻のプレイに最初から口ばしを入れる考えはなかった。二人のありのまま、それがたとえ第三者の前で初めてプレイする緊張感のために不十分なものに終わろうとも、それはそれでかまわない、ありのままを見せてもらい記録させてもらえばいい、そう考えていたのである。

「レザーは以前にも使ったことがありましたけれど、なじみが薄いのですよ」

玉木氏がそう言いながら、着装していたレザーを取りはずすと、

「ロープを使うの、いやだわ……」

と玉木夫人がふともらした。私は夫妻を黙

って見守っていた。

ロープを彼女が拒むというのは先にも述べたように、SM商業誌の演出写真に対する一種のアレルギー反応でもあろうかと考えられる。首枷だけを着けてレザーを取りはずした彼女の美肌に、玉木氏は細目の綿ロープを取り出して胸から縛り始めた。二人とも両膝をついた姿勢で向かい合い、ロープを扱く玉木氏の肩に両手をかけて彼女は縛られていた。細いロープが豊かな胸を引き締める。

縛りについても玉木氏自身が考案し、自分なりに好きなようにプレイするための縛りであると言う。それでいいのだ、と私は思う。

胸を締めつけた細いロープは腹部からウエストへと下に向かって締めつけていく。豊満な肉体に細目のロープが食い込んでいくのを眺めながら彼女の横顔に眼を移すと、次第にロープの反応が表情に表われてくるような気がした。

「ロープは、いやだわ……」

という玉木夫人の本音を私が察したのは、その細目のロープがヒップから股間をくぐって玉木氏の手で強く絞られたときである。

「あっ……」

彼女は彼の肩に両手をのせ、両膝をついた

姿勢で顔を伏せるようにして、ひどく官能的な呻きを白い歯の間からもらした。

細目のロープで股間をぎゅっと引き締められる、その性感帯に生じる刺激が玉木悦子の全身に異常な興奮をもたらす、それを彼女自身が休で十分に承知しているだけに、

「ロープは、いやだわ……」

と、反証として口にするのであろう。

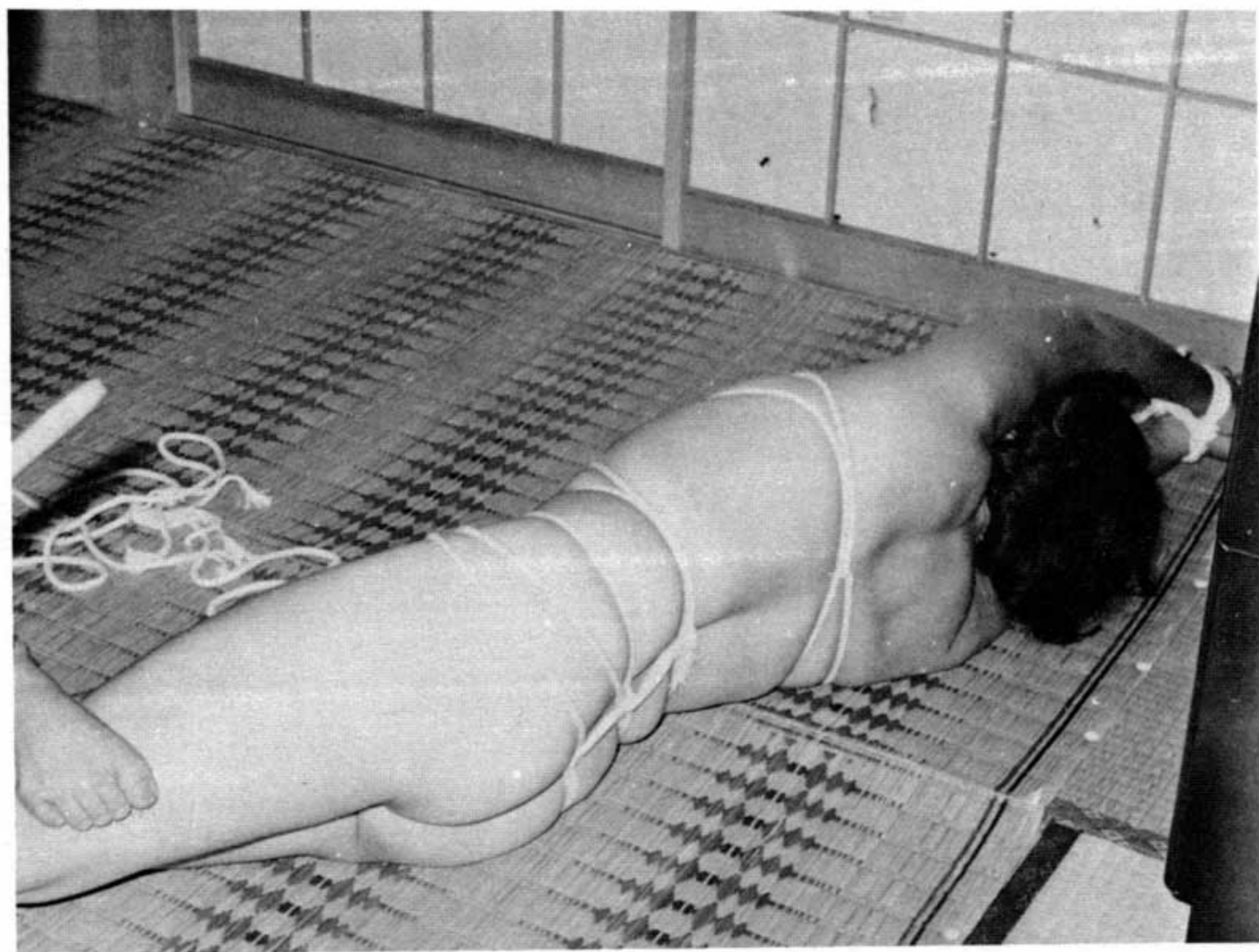
胸から腹部、更には股間にかけて決め縄をしっかりと結んだ玉木氏は、別のロープを手にした。その間に彼女はコザの上に顔を伏せるようにして両膝をつき、ヒップを突き出すポーズを取っていた。

股縄を決めこまれた彼女は、もうそれだけで濡れてきているような風情が、私の眼にうつってくる。

普通なら両腕は高手小手に決めこむとか、あるいは両手首を後ろに廻して縛るのだが、玉木氏はそうはしなかった。

胸から腹部、さらに股間にかけて細いロープで緊縛されてヒップを突き立て顔をコザの上に伏せている夫人の両手を一つにのばすお手首だけを別の細引きで縛るのであった。

これはプレイ中、夫人が転がされている場合が多いためだと私は考えた。だから高手小



白い柔肌にベルトによるムチ打ちが容赦なく……

手や後ろ手に縛ると夫人自身の体重で両腕に負担がかかる、その負担を無くすために両手をのばして一つに縛るのである。

こうして細目のロープで縛り上げた夫人のうつ伏せになっている豊満な臀部を玉木氏は見下ろしながら、

「気分を盛り上げるために、浣腸を試みましょう」

「浣腸を？」

と私は、玉木氏の言葉を一瞬、排泄に結びつけてしまった。

ところが彼は百CCの浣腸器と一升瓶、それに井を持ち出してくると、ゴザの上でうつ伏せになっている彼女の臀部のそばにあぐらをかいた。

「それは？」

と私がたずねると、

「日本酒ですよ」

玉木氏はそう答え井に特級酒を入れる。

「口から飲むのも、肛門から飲ませるのも、

同じことです」

「なるほど……」

玉木氏の言う浣腸の意味がわかってきた。

「ときどき、その浣腸をプレイとしてやるんですか？」

「ええ、やりますよ。家内はアルコールが体内に入ると燃えてくるって言うのです。口から飲むのも好きな方でしてね」

井に入れた特級酒を浣腸器に吸い込ませながら玉木氏は言った。私は排泄を強制するための浣腸ではないことに正直なところほっとした。実は数年前に、あるM女（世田氏も彼女を御存知だ）とい最近耳にしたのだが）に浣腸攻めをこころみたことがある。そのとき、浣腸後の排泄と異臭には、いささか閉口した体験を持っているので、それだけに攻めの手段としての浣腸というプレイはうなずけるとしても、目前で異臭を——ということになると、嗜好として排泄にまつわる浣腸攻めは私の好みではない。

百CCの浣腸器に特級酒をたっぷり吸い込ませると、玉木氏はゴザの上に顔を伏せて豊かな白い臀を突き立てている悦子夫人のアヌスに当て込んだ。

「うっ」

と一瞬彼女がうつ伏せの顔を上げ呻きをもたす。玉木氏はかまわず右手に浣腸器を持ち、左の手のひらでぐいぐいと押す。両膝をつき、両の腿を開いて臀部を突き立てている彼女のアヌスに百CCの日本酒は、こうして完全に

注入された。

「少し時間を置くと、肌が色づいてきます。時にはもう一本やる必要がありますよ」

と玉木氏は言う。日本酒なら排泄を促すことはあるまい。その代り飲酒したと同じ効果が生じるのであれば、この浣腸は夫婦プレイとしては出色であると思い、再びゴザの上に顔を伏せて陶酔にひたる玉木夫人の様子をじっと私は見守った。

細いロープが豊満な柔肌に深く食い込んである。その胴から臀部を眺めているうち、玉木氏は別の細引きを手にして、彼女の足もとに身を屈めると、そこで両足首を一つにして、しっかりと縛った。

アルコールを浣腸されたということで彼女自身は、自然に陶酔できるムードが生じてきたようである。あるいはアヌスから注入されたアルコールが体内を逆流するのをじっと味わっているのかも知れない。彼女の全身が重くなっているように感じられた。

その夫人の体を玉木氏は仰向きにした。

両手首を一つに縛られた腕を頭上にのばし、今また縛られたばかりの両足をやや屈めるようにして夫人は仰向けにのびている。その胸に玉木氏が片足をのせた。



ロープで縛られるのは今でも恥ずかしい
……という玉木夫人

「う……」

彼女が白い齒の間から鈍い呻きをもらす。

玉木氏は胸を踏みつけている足の指の間に乳首をはさみいたぶり始める。胸を足で踏みつけられて圧迫されるのと同時に、足の指で乳首を強くはさみつけていた玉木氏の攻めに対して、夫人は、M女としての愉悦にのめりながら声を上げて悶え始めたのである。

この夫人の反応で玉木氏も連鎖的に興奮して、私がそばにいて、カメラマンのS君が写真を撮っているのも、もう眼中にはなくなつたようにプレイに乗ってきた。

玉木氏が次にベルトをはずして鞭代りに振り上げ、仰向けになつて愉悦している夫人の胸に「ピシッ」と叩きつけたとき「ヒイッ」という擬声語で言い表わすよりは、何か獣の吠えるような「ウォーッ」とか「ギョーッ」という声が夫人の口をついて出たのである。こうした夫人の愉悦の呻き声（決して悲鳴ではない）は、そばにいる私をも完全にプレイに引きずりこみ視姦の悦樂をもたらすものであった。またベルトを鞭代りに用いるところが、いかにも夫婦プレイらしく自然である。

玉木氏のベルトは仰向けになつてもろに打撃を受ける夫人の胸だけではなく、細引きで

くびれた腹部から股間にかけて、続けざまに打ち下ろされ、叩きつけられる。そのたびに「ウォーッ、ギョーッ」と四囲をはばからず叫び、喚き、緊縛された豊満な肉体をゴザの上でのた打ち、狂うM女玉木夫人の姿を、プレイがここまで進行して初めて私は眼にすることができたのである。

白い美肌が傷つくことを極度に恐れて拒みつけていた夫人を、こうして馴致させたのは御主人の愛情と根気と、そしてプレイへの根強い願望によるものだろう。同時に玉木夫人の方も夫の手によって開眼されたSMプレイに馴致していくM女としての変身、つまり夫唱婦随の絆に二人は固く結ばれている。

ベルトの鞭打ちを受けて愉悦の声を上げていた夫人が、ぐったりとゴザの上にのびているのを見守っているうち再び玉木氏は二本目のアルコール浣腸をおこなうべく準備にとりかかった。

それを見て、彼女の肉体をもっと燃え上がらせ、濃厚なプレイを見せようとする玉木氏の計らいが、二本目のアルコール浣腸だったかも知れないと私は思った。

しかし、すでに百CCのアルコールがアヌスから注入されている。その上に更に百CC

のアルコールを注入するのを見て、私は玉木夫妻のプレイが、私たちに対するサービスであるばかりではなく、そこまで高じているのだと考えざるを得なかった。

「体調さえ普通であれば、二百CCまでの注入は家内には可能なんです」

と右手に浣腸器を持ち、左手を夫人の臀にかけると、それが合図でもあるかのように玉木夫人はうつ伏せになり、今度は両足首を縛られたままの臀を突き立てて浣腸のポーズを静かにとった。

繰り返して述べるようだが、口から胃の中にアルコールを流し込むのではない。肛門から腸の中にアルコールを注入するのである。

その量が二百CCである。排泄を促す浣腸液であるなら、いざとなれば排便によって気分が爽快にもなろう。だがそれがアルコールであるとき、口からの飲酒と同じ現象が生じるのである。腸という器官に注入されたアルコールがどういう作用をもたらしているのか、傍観者としての私には具体的に掴みがたいことである。

「もし、持ちこたえられないときにはトイレに行くことにしています」

と二度目のアルコール浣腸を終えた玉木氏

は言う。

最初の百CCの浣腸について、こうして二度目の浣腸を受けた玉木夫人の白い肌は、先ほどのベルト打ちによって血液の循環がいつそう活発に作用しているらしく桜色に全身が色づいてくるのであった。

黒い蠟涙で最高潮へ

こうして特級酒二百CCの浣腸をした後、玉木氏はうつ伏せになっている夫人に手をかけて今度は、洗濯したばかりの敷布をかけている敷布団の上に仰向けに寝かせると、胸から股間に食いこんでいる細いタテ縄を両手で掴み、夫人の体を持ち上げるように扱いた。そうすることで豊満な夫人の体は持ち上がらないけれども、股間に食いこんでいるタテ縄がいつそう食いこみ、そこを扱くのである。

夫人は悶えるように呻きつつ、その刺激を甘受しているようであった。さらには玉木氏の手がそこを愛撫するに至って、夫人は今にも果ててしまうような音を上げる。

こうして細いタテ縄による股間攻めと手によるまさぐり攻めを加えた後、玉木氏は両手首を縛っている夫人の腕を背中へ折り曲げる



特級酒100CCの浣腸が二度も、燃える夫人の体内に……

ようにして、縄止めを固く結んだ。

次がローソク攻めである。

玉木氏は二本のローソクに火を点じた。

その二本を先ず布団の上に仰向けにさせた夫人の股間に深く立てた。余り長くないローソクであるために、ジリジリと股間に立てられたローソクからたれる蠟涙が、伝いおちるたびに、夫人は甘く呻きながら臀部を右に左にひねるのである。

頃合いを見て、そのうちの一本を手にする、蠟涙を胸にたらせ始める。玉木氏は手にしたローソクを横に傾げるだけだったが、それでも夫人は一瞬、ヒッーと悲鳴を發した。

このローソク攻めをおこなう場合、横に傾げるだけでは蠟涙の熱さがいくらか薄らぐので、逆さに持ち、黒い蠟煙と共にたらすと、もっと効果的である。

それに夫人の肌が色白であるために、せっかくのローソク攻めも写真に撮る場合、白く蠟が固まってしまうと見た眼に効果が薄い。そこで、

「ローソクを逆さにしてみなさい」

と助言してみたのである。

逆さに持った玉木氏の手から、ポタポタと黒い蠟涙がたちまちのうちに夫人の桜色に色

づいた柔肌に、ひっきりなしにしたたり落ちた。

夫人の口から悲鳴とも呻きとも判然としない声がほとばしる。それが見守っている私は勿論、ローソクを手をしている玉木氏を刺激するのである。黒い蠟煙と共にしたたり落ちる蠟涙が、たちまち、よりいっそう夫人に苦痛を伴った刺激をもたらせるようであった。

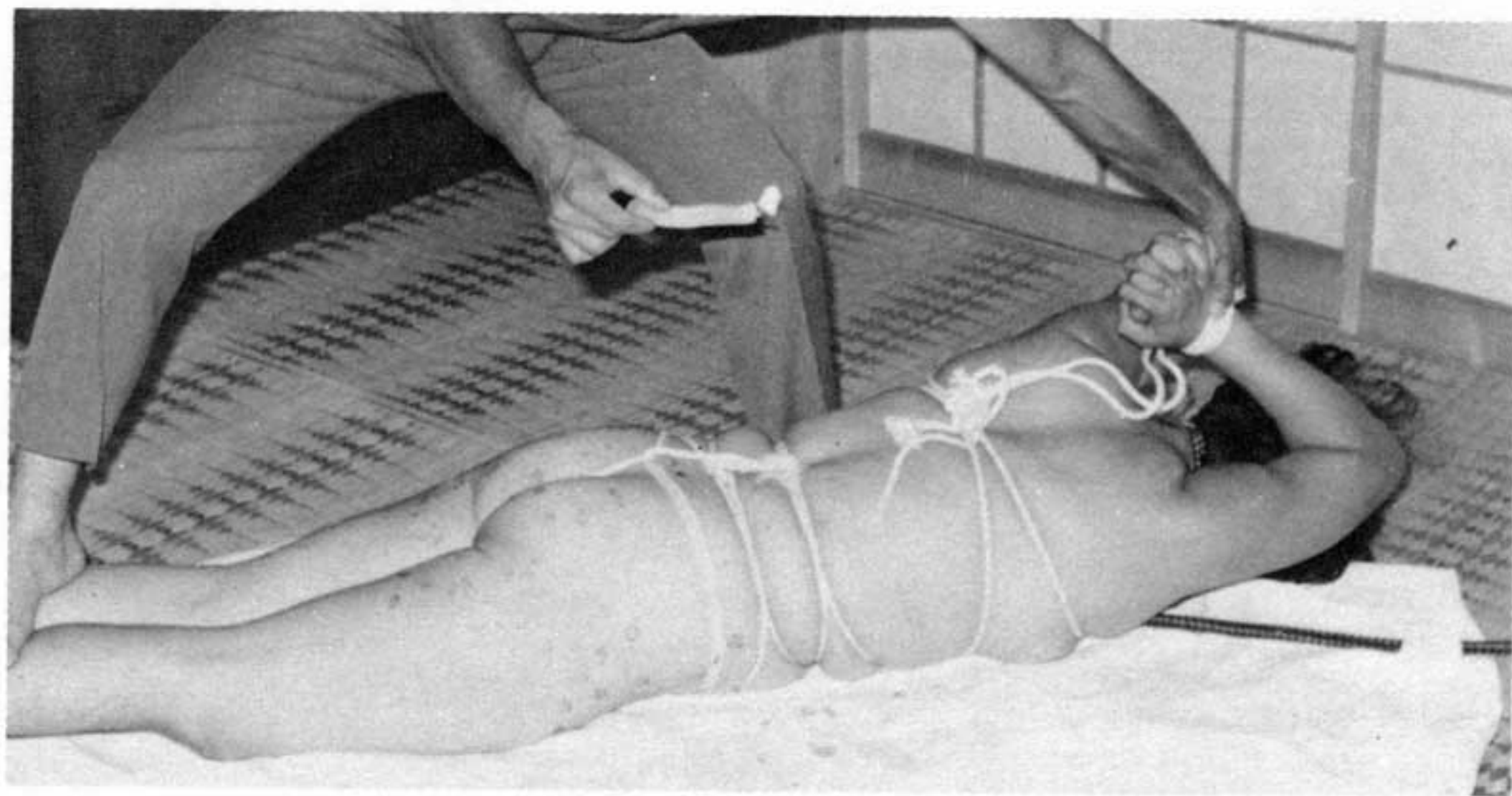
一方、股間のローソクもジリジリと燃えついて、それはそれで蠟涙とは別の角度から夫人の肉体を攻めていた。

「もう、やめて、いやー」

それは、夫人が夢中で叫んだ言葉である。が、本当にこのローソク攻めを拒む言葉だったかどうか、激しく悶えている彼女の気持は判らない。

玉木氏はローソク攻めのクライマックスとして、股間に当てていたローソクを抜きとると、二本を同時に逆さに持ち、胸から更に腿に向かって黒い蠟涙をしたたらせるのである。

先にも述べたようにローソクを横に傾げるだけでは感じられない、もっと熱を持った蠟涙が逆さにすることで効果的に柔肌を攻めることになるのだから、二本のローソクで攻められる夫人の悶えぶりと、その呻き声は、も



し、カセットで録音しておけば、玉木夫妻にとっても、よりいっそう刺激的なプレイの記録になったであろうと、あとで私も気がついたほど、クライマックスに達したときのローソク攻めに狂い悶える玉木夫人の声は見事であった。

このローソク攻めは仰臥のポーズで胸や下

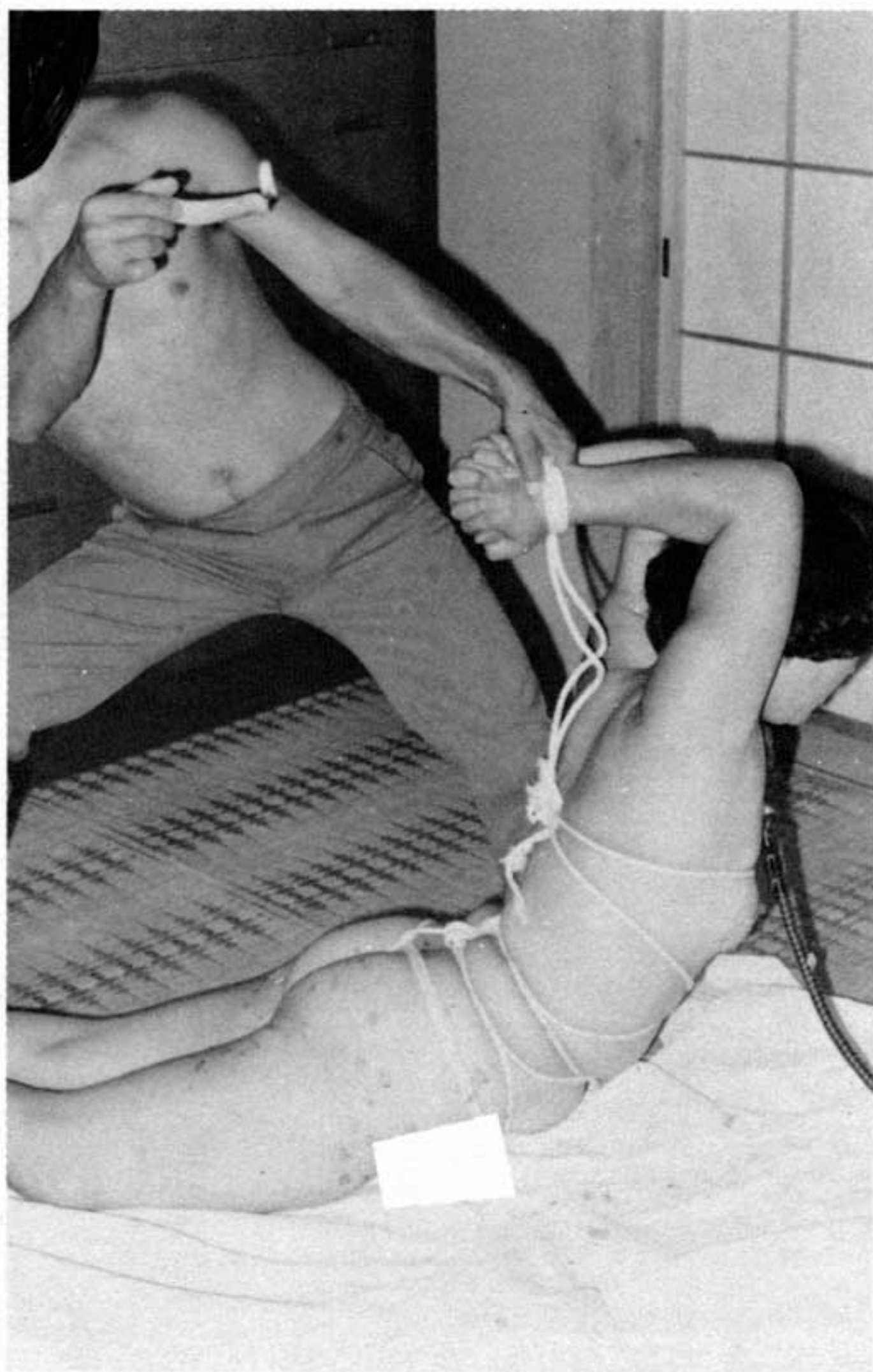
半身を攻めるだけではなく、例のシェパードに付ける首輪とそれについている太い綱を手にした玉木氏は、夫人をうつ伏せにして、今度は背中や臀部、さらには脾腹にも容赦なく黒い蠟涙をしたたらせ、夫人が今にも呼吸を詰まらせて失神しそうになるところまで攻めの手をゆるめようとしな

それはもう私たちにプレイを記録してもらうためのプレイではなく、二人だけのプレイに転じているように見えた。だからもし記録係りである私やカメラマンのS君がこの場に居合せなければ、おそらく玉木氏自身も全裸となつて、夫妻のSMプレイのクライマックスである一心同体のポーズまで突入してしまつていたであろう。

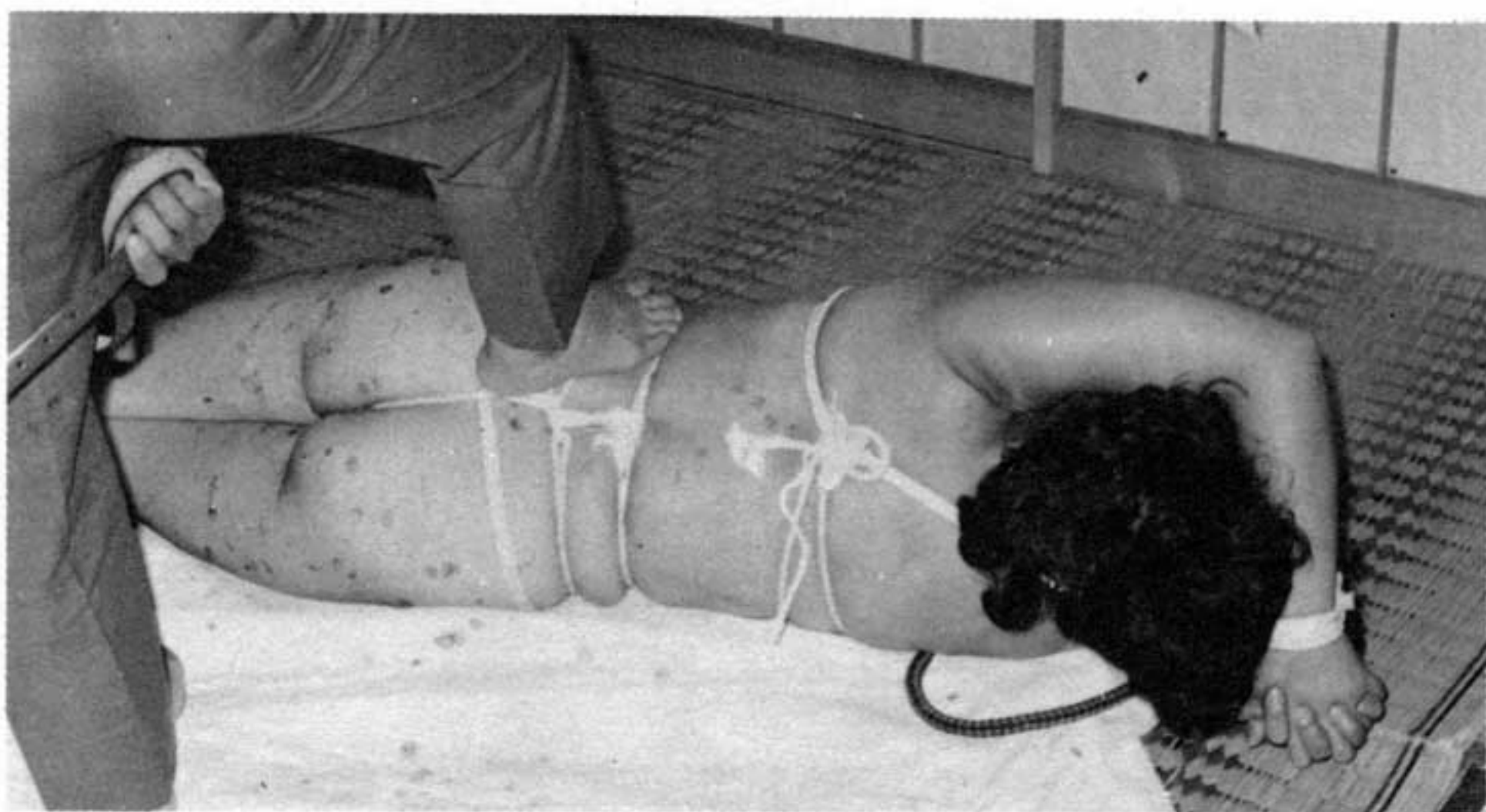
夫人はアルコール浣腸を百CCずつ二度に渡つて注入されている上に、このローソクを逆さにしてしたり落ちるもつとも効果的な攻めを受けたために、普段のプレイ以上の息つくひまのない苦痛に、ひたすら悶え狂っているのであつた。

両足首を縛られている下肢をのばしたり、ちぢめたり、声を上げて狂う玉木夫人の首輪についた太い綱を引き絞るようにしてローソク攻めをつづけていた玉木氏が、再びベルトでムチ打ちを始めたとき、夫人の一きわひどい呻きと共に全身を痙攣させるのを見て、私は思わずハツとした。一瞬、失神したように見受けたのである。

玉木氏はベルトを傍に置いて身を屈めると夫人の額や頬に右手を当てて、そつと様子をうかがいながら、しかも左手は股間の方をや



ローソクプレイに燃える玉木夫妻



ローソク攻めから再び
ベルトによるムチ打ち

さしく愛撫していたのである。

それを見て、二人のプレイがここで普段なら当然クライマックスとしてのSEXに至るのである、ということを私は改めて見るような思いがした。

先にも述べたように、夫婦プレイを始めて一年余の玉木夫妻は、プレイのジ・エンドとして常にファックを伴っているというのであるから、今夜の場合は例外と言え例外でもあったわけである。

しかし私たちにかまわず、プレイの仕上げとして遠慮なく、どうぞやりなさい、という言葉には出せない気持を私は持つと同時に、そこまで見せていたただかなくても（夫妻が記録としておこないたい、という気持を少しでも胸の中に秘めていたとすれば別であるけれど）おおよそ二人のプレイについては、その現状を把握でき、管見できたように思うのである。

初対面のサン・アンド・ムーンに対して、招待状（初めに述べたようにある意味では挑戦状）をくれた果敢な玉木夫妻のプレイは、私たちを失望させるどころか、ある面で非常に爽かさと親愛の念をもたらせるプレイであったと痛感するのである。

プレイの終りに来て、一時的に夫人の全身に痙攣現象が生じたのは、体調が少し崩れかかっていたところへ、百CCずつ二度にわたるアルコール浣腸のせいであったと、後日、玉木氏から耳にしたのであるが、もし体調にそのような変調をきたさなかったとすれば、あるいは夫妻は記録のためか、ご本人たち自身の欲求か、勿論わからないけれどもプレイの仕上げにまで、私たちの目前で突入したかも知れない、とも思うのである。

結 び

玉木夫妻のプレイは約一時間半にわたっておこなわれた。

その間に撮影したフィルムはモノクロ、三十六枚撮りで四本、約百三十余コマである。それらのフィルムは本誌編集長・世田介一氏自らの手で現像、すべて手札判にして写真は一枚のこらず玉木夫妻の手に渡されたのである。

これは玉木氏と最初に交した約束を世田氏が忠実に守ったのである。このようにプレイを記録したフィルムの現像、焼き付けた写真および現像したフィルム全部を玉木氏夫妻の

手元へ渡す約束以外には夫妻と本誌との間には何らの金銭の授受はない、まことに爽かな記録でもあった。

この『縛絆特報』を書くについても、勿論玉木夫妻の了解のもとにである。そして文中に掲載した写真は、一度夫妻の手に渡った紙焼きの写真のうちから、夫妻の手で選ばれた二十余点を本誌で一時借用して収録するものである。

これは夫妻のプレイを記録した全百三十余コマの五分の一にも満たない写真、しかも、この文中に収録する写真よりも、はるかに素晴らしく、またプレイの臨場感に溢れるものがあつたと思うけれど、それらの写真は恐らく玉木夫妻にすれば最初に他者によって記録されたものとして大切に、今は門外不出とされているのではあるまいか、と私は自分の筆力の及ばぬところを夫妻の手元にある記録フोटで読者に訴え、かつ伝えられないことを残念に思うのである。

しかし初めにも述べたように本誌は商業SM誌にはあきたりない読者に、少しでも応えようという雑誌作りの姿勢を維持していくことと同時に、玉木夫妻のような果敢なプレイヤーが名乗り出てくれたことを、最もよろこ

び、心強さを覚えるのである。そして玉木夫妻のように記録してほしい、アドバイスをほしい、という読者の声には可能な限り応じたい気持である。

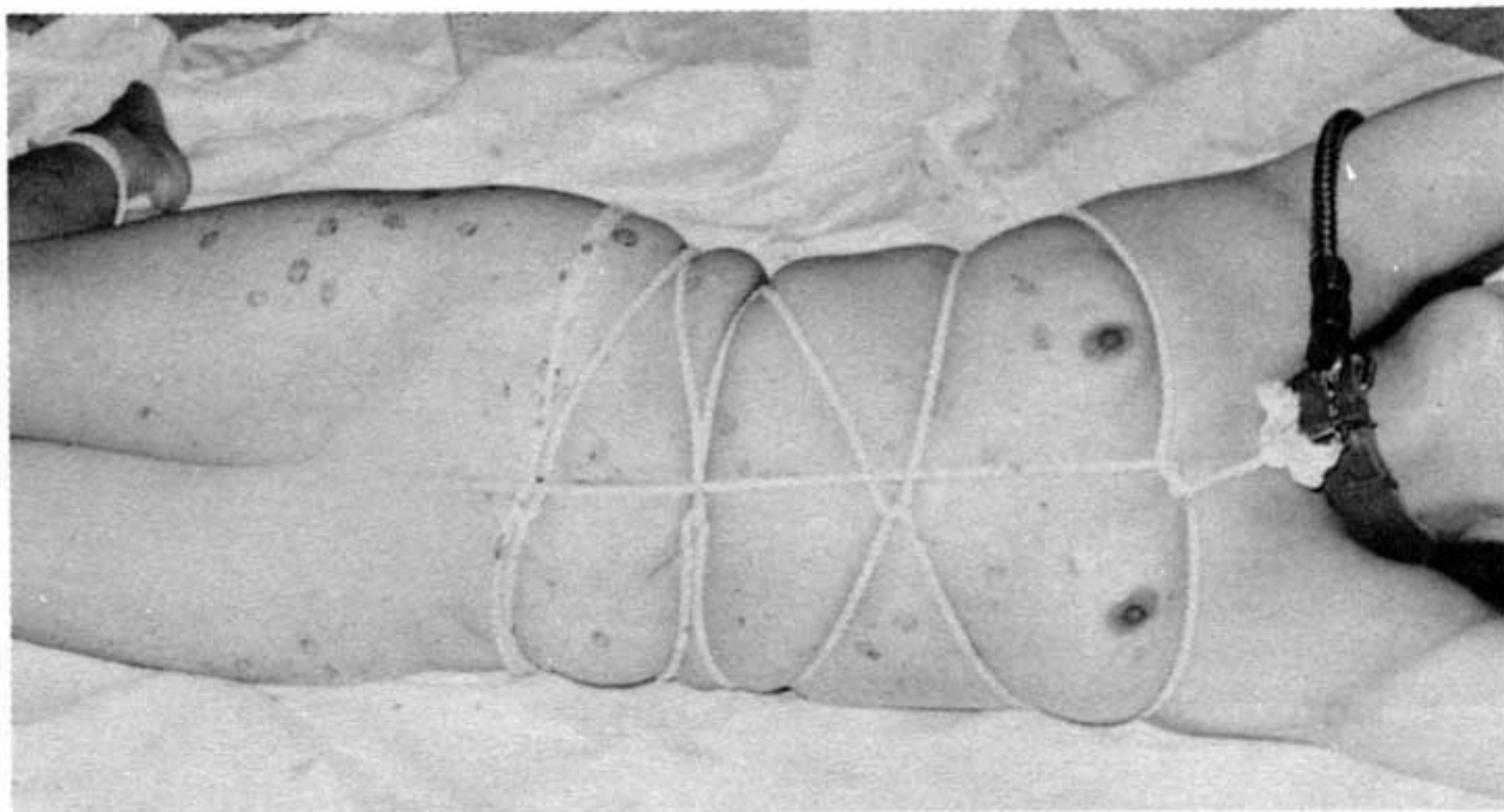
だからと言って、そうしたプレイヤーの私生活をおびやかしたり、名誉を傷つけたりすることは毛頭考えてはおらず、仮に玉木夫妻のように果敢な記録をという機会に恵まれても、その後において本誌にスクランブルとして掲載するかどうかは、あくまでも御本人の意志に従い、それに反するような行為は一切しない大人としての、真の遊びの精神に徹しているつもりである。しかもこの大人としての遊びの精神がなければ、本誌サン・アンド・ムーンの存在価値も失われるものだと、心しているのである。

※

さて、最後に一つ、この『縛絆特報』として本誌に挑戦した玉木哲男・玉木悦子夫妻は後日、次のような希望を直接、世田介一氏と筆者に対して述べられた。

「わたしたちは、自分の年令と余り隔りのない、夫婦プレイヤー、あるいは見せかけや冷やかしてはなく真の伴侶を持つプレイヤーと

玉木夫人ついに失神……





激しいプレイの後に夫人をいたわる
玉木氏……そして二人の間に他者の
入る余地はなかった……

の交流を望んでいます。サン・アンド・ムー
ンに声をかけたのも、一つはそういうプレイ
ヤーとの交流を願ってのことです。

そして将来、わたしたちと年令に差のない
夫婦プレイヤーがペアで何組も集まり、親睦
の会を一流ホテルで開催したい、そんなバラ
色のユメさえも胸にえがいているのですよ」

これは玉木夫妻の率直な願望であり、ユメ
であるということだ。

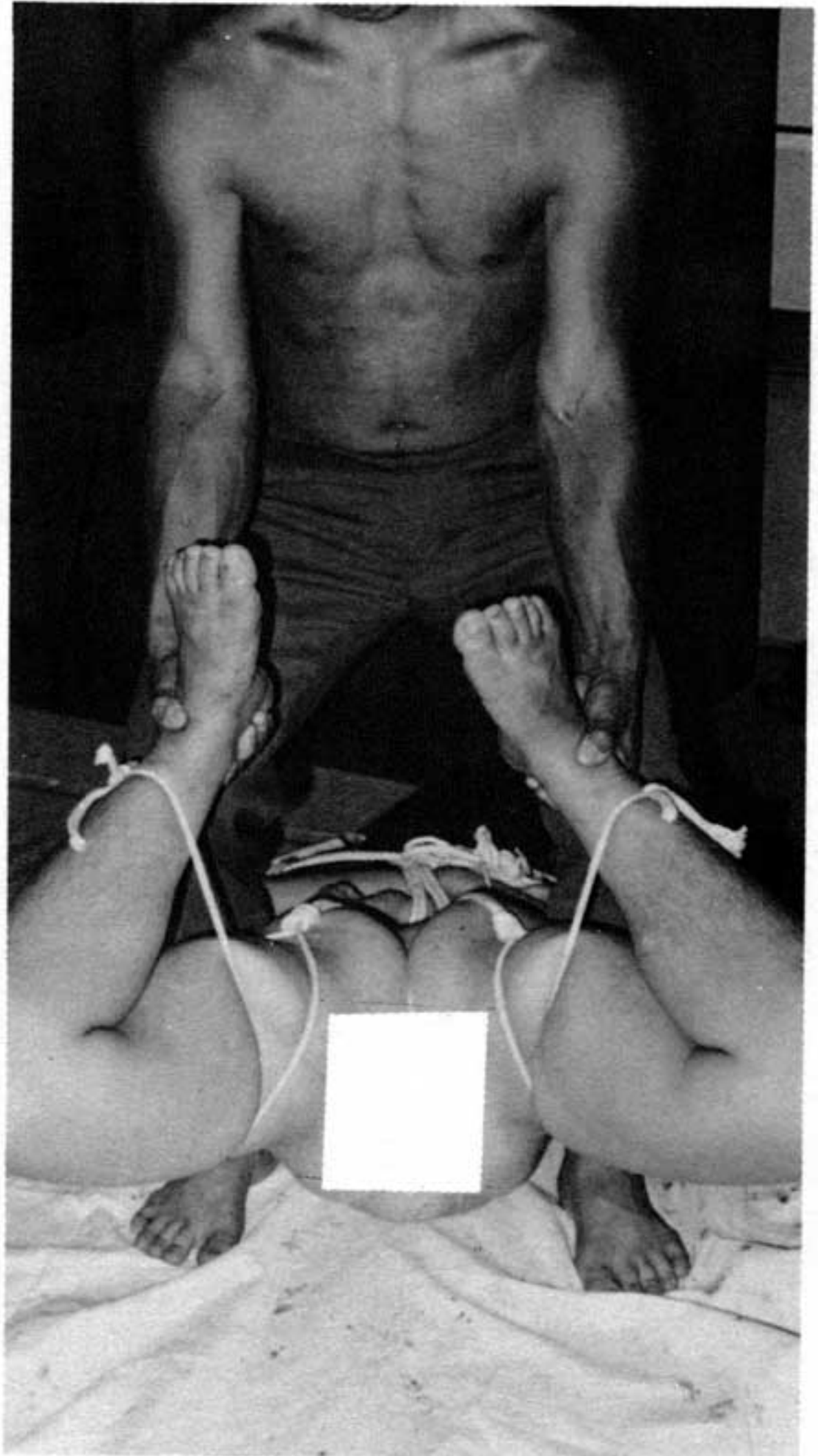
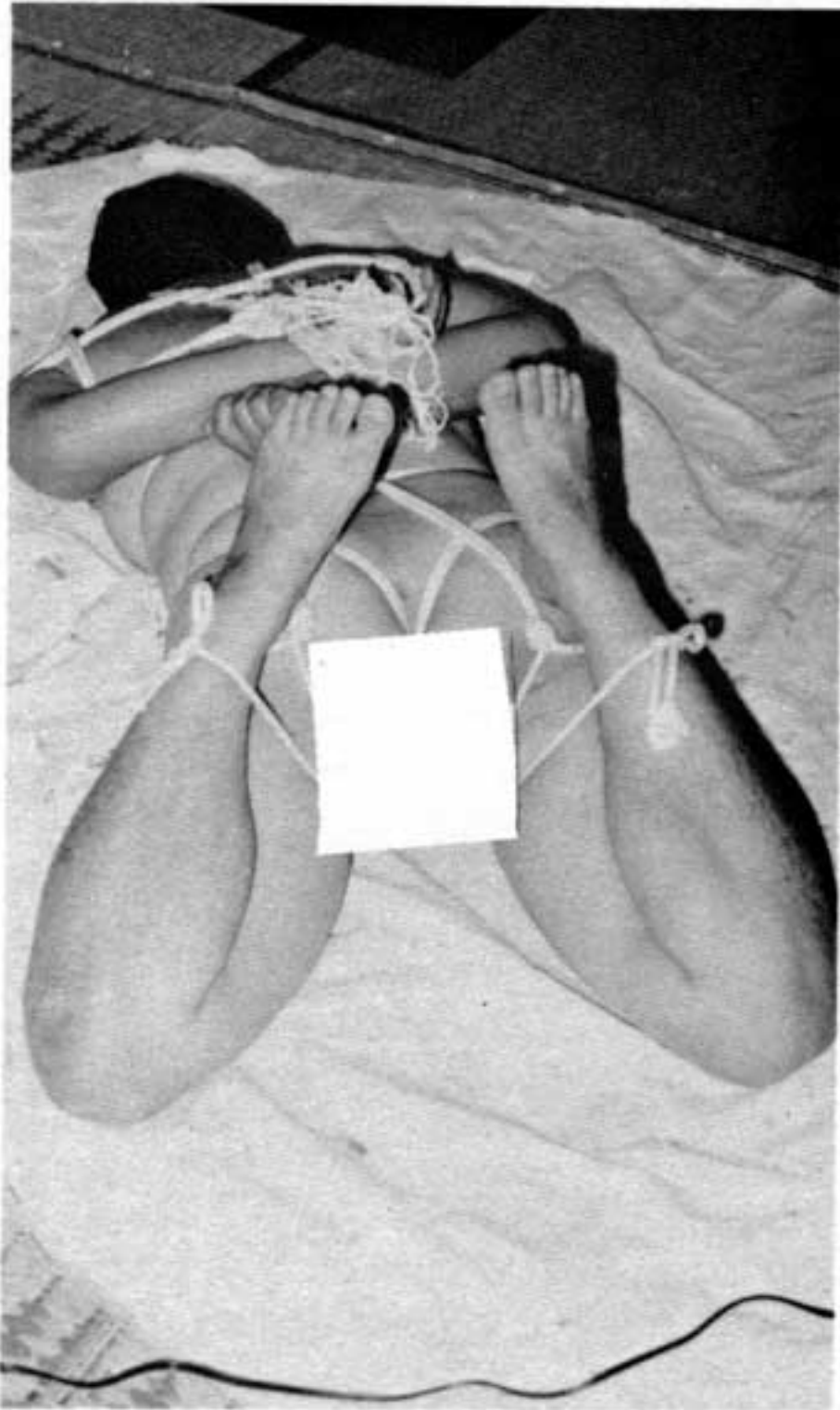
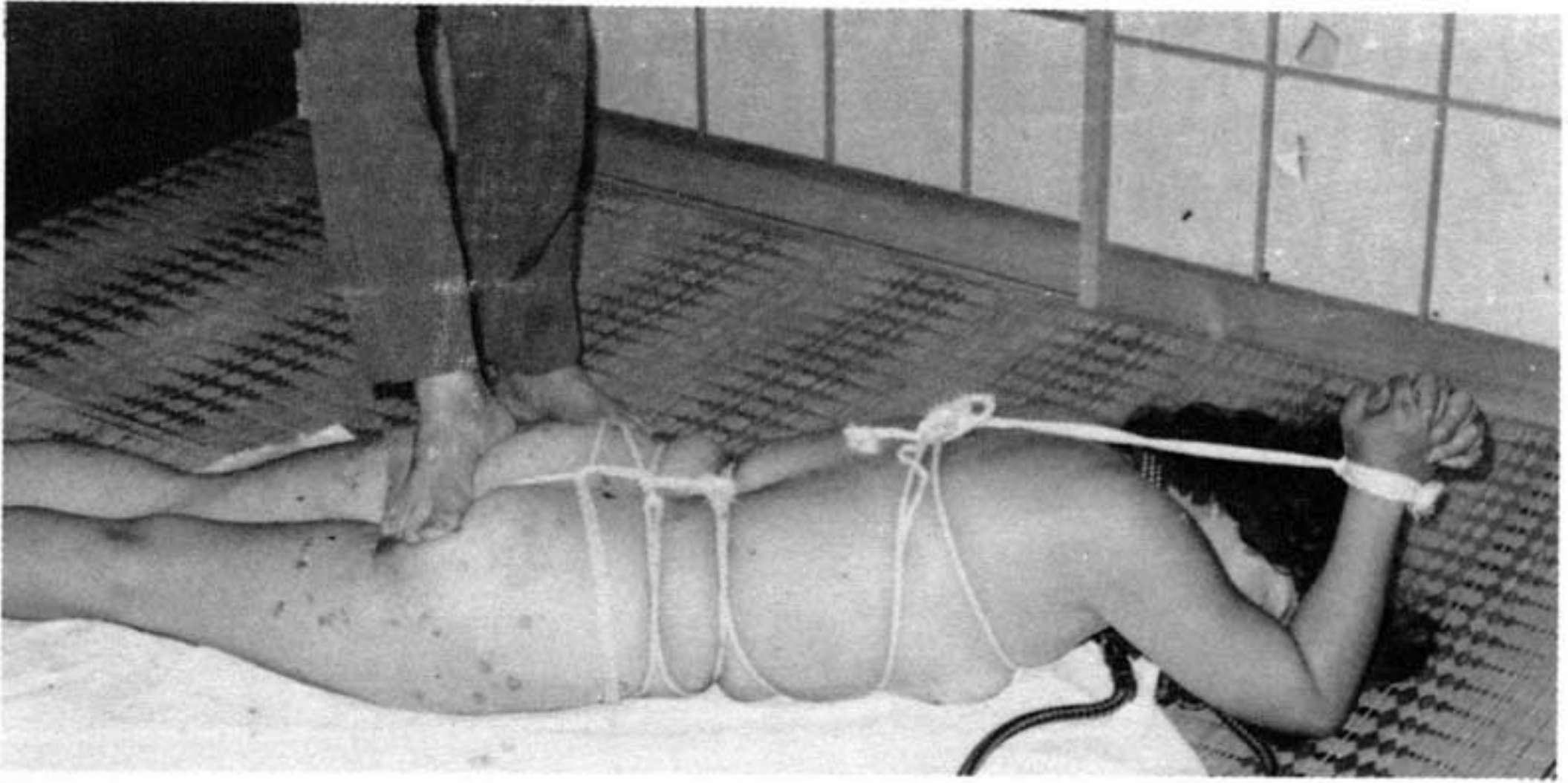
因みに、玉木夫妻は先述のように御主人が
三十二歳、悦子夫人が二十八歳であるという。
この玉木夫妻の呼びかけに応じようという
真の夫婦プレイヤー（キャリアは問わず）が
いるならば、本誌から玉木氏へ文通などの労

はいとわれないが、単なる冷やかしゃ好奇心で
は受けつけてくれるような玉木夫妻ではない
ので、御希望の筋は、御自身（夫婦）の記録
フォトに、戸籍抄本を同封するぐらいの気構
が必要であることも、念のために申し上げて
おこう。

☆以下二頁にわたり『玉木夫妻プレイフォ
ト集』として、文中に挿入できなかつたも
のを並べてみよう。これらの写真と合せて
当夜の玉木夫妻のプレイを思いうかべてい
ただければ幸である。

玉木夫妻
プレイフォト集





サデイズム雑観

佐久間一韋



今をさか登ること十数年前、私はある古本屋で雑誌を見つけました。その雑誌がかの有名な「奇ク」です。その時の感激は言葉では現わせないようなものでした。それと言うのも私の頭の中で考えて常に空想していた内容のものが私の目前に雑誌として、活字として存在しているのです。

それ以来色々な雑誌を買い漁り、読み耽けりました。そして色々なこと、内容、実践的なプレー等を行っていることを知りましたが、自分自身の気の弱さか、臆病なせいかわ、実際にプレーを行うまでは、五六年掛りました。そしてある人の紹介で初めてのプレーを新宿の歌舞伎町裏のホテルで行った時は興奮の方が先で何か夢中になって縛っていた記憶がございます。

そんなことを五回六回と重ねていくうちに、ある未経験の三十才位の人妻と出合いました。この人とのプレーは年何回かではあるが現在も続いております。

最初は何もかも初めてで、小説の「O嬢の物語」を読んで自分も経験してみたくなったとのこと。私とて、素人に毛の生えたところなのでとまどいがちでしたが勇気を振り絞り、アタックしました。初めは、まず本を見せ他

にもこういう人のいることから教えはじめ、2度目に会った時は、戸惑いがちな彼女を強引にホテルへつれ込みました。

入ってしまったば度胸をつけ彼女は洋服を脱ぎ全裸になり、色々な縛り方をやってみてのこと。私も腕によりをかけ念入り縛り上げ、たしか五六種類を行った時、スパンキングをしてくれと言い出しました。その時持参したムチはM社製五本ムチ、最初はゆるく、だんだんきつくしましたら、もっと強く、もっと強くと言いはじめました。これはM性もかなり強いと思ひ力まかせに叩きました。それ以後のプレーの時もスパンク中心に変化していきしました。

そうして一年位すぎ、だんだん隷属化を試みましたが仲々うまくいきません。私のやり方がいけないのか、飼育の方法を色々の方々からお教え願ひ今日までやってまいりましたが、前とあまり変っていないようなのです。その内に私自身の中に於けるサディズムの変化が起こり始めました。今までのように唯単に肉体的加虐のみを追求していた自分自身が、大変惨めで、何か空しいものに思えて来たのです。

そういうことを考え始めるとプレーを行っ



ても何か白気ぎみで前の様に熱中しなくなりました。その為かここ一、二年の間はあまりプレーを行っておりません。と言うより、あまり気が乗らないと言った方が正しいでしょう。それではその原因はなんであるのか、なぜその様になってしまったか、どうすれば自分自身満足のゆく事が出来るのかと申しますと、人間を飼育する場合、まず内面的苦痛、つまり、精神的な苦痛より始め、自分自身の一番好みに合った女性、つまり隷女、性奴、

色々な表現をされていますが、全て何事も意のままに動く女性として、飼育、調教してみたいと思うのです。

皆様方の中には、妻を、そして他の女性をそのように飼育なさっている方はたくさんいらっしゃるのではないのでしょうか。最初に精神的にと申しましたが、その意味は大変難しいことで、最終的には、その女性の持つて生まれた性格すら変えようと思っっているのです。唯単に隷属化するのではなく、どこへだして



も辱かしくない様な品位を持つハイクラスの女性でなくてはなりません。最初から知性と教養を保持した女性を飼育するか、飼育しながら知性、教養を身につけさせるかどちらかで、将来、私の元を去って行っても自活できるなにかを備えていて、私が呼べばすぐ飛んで来るような女性でなくてはなりません。まず最初に、その様なことの出来る女性を探すことは大変難しいことかもしれません。でも

何とかやって見たいと思って居ります。その様な女性が居りましたら、マンションの一室を借り与え、完全に自由を奪い、着衣はもちろん、二十四時間拘束で素直になるまで飼育、調教、をはじめます。まず飼育に対して一番効果的なこと、それは、兵糧責めにする事です。人間空腹を憶えると、みな通常の人は素直になるはずで。檻の中に入れて責めるとより効果的ではないでしょうか。

そして次に考えているのは、頭髮、陰毛の除去、女性はこれにより逃亡出来ないと思います。精神的に従順でおとなしくなるのでしょうか。そして、鼻輪の装着、これは、何も緊縛しなくても自由を奪い、家畜化への第一歩で女性にとって最大の屈辱となり、鼻輪自体ははずしてしまえば外からは見えないもので、孔をあける場所さえまちがいなければ大変安全で効果的なものになるのではなからうか。

このように第一段階に成功すればあとは大変簡単にゆくのではないのでしょうか。後は一日の日課、しつけ等をよく守らせ、従順に生活を営ませることによって、より自分の好みに合った女性を作り上げることが出来るのではないのでしょうか。私自身、日本国民として、人権を無視したこのようなことが出来るか出来ないかと言うことを考えてみますと、かなり難かしいような気がいたし、この様に空想していても仲々実行まではゆかないでしょう。私を全面的に信頼し、全面的に協力して心から賛成をしてくださる女性がいたら幸ではあります。……。

私の体内に流れているサディズムはこのように馬鹿げた空想だけに終らせるものであるかもしれません。がしかし、その反面私の一

生の中でこのような女性が現われなくともそれに近い状態でのゲーム的なことが出来、完全に調教できたら本望です。今後私の考え方に賛成してくれる方を望みます。今までのように、唯一的に、羞恥責め、緊縛、ムチなどの責めを行うよりよりも終始一貫して、責めることが出来ればこんな楽しいことはありません。その場だけの快樂一時的な満足感より、一個の独立した奴隷を完成させることの方がより効果的で満足のすることではないでしょうか。

今まで私はここ数年間、色々なマニヤの方を見てまいりましたが、この世界に住む人は、非常に気が小さく、臆病者の方が大変多い。それは、それらの方々の社会的地位、外面的なものによるのかもしれませんが、しかしある時は、突込み、ある時は、石橋を叩いて渡るのが如く慎重でなくてはならない。多くの人は、猪突猛進の時期を逸してしまっている。そしてあとで後悔している。それでは何ものもない。私もあまり気持ちの大きい方ではないが、そのタイミングだけは考えて行動し、相手を信用できると猪突猛進に変更している。この場合、相手を信用するだけでなく相手にも信用してもらうことが大切であります。

このようにとりとめもないことを長々と書いてまいりましたが、それでは、サディズムとはいったいなんでしょうか。広辞苑を調べますと「フランスの貴族サドに由来するもので、相手を虐げることによって性的満足を得る異常性欲。色情加害性、虐待淫乱症。また一般的には残酷への傾向をいう」となっており、私はこの最後の「残酷への傾向」を上げて解いている。

確かに、女性を虐待することによって興奮し性的に満足しているのかもしれない。がしかし、私は実際に行う場合、ほとんどセックス抜きである。最後にセックスをしないとどうしてもおさまらないと言う方もいらっしゃいますし、夫妻プレーの場合は必然的にそうなるのであろうが、私は皆無に等しい。一つには、セックスを行うことにより、空しさ、虚脱感を憶える為でもあるが、相手の女性がそれを欲していても行なわない方がよりサディズムとして最後まで完成されたものとして映っているのである。そこでも加虐的でありたいという願望があるためである。女性が欲求不満になった時の表情程私自身は満足感があるのである。よくセックスの前戯という考え方があるが、私は否定したい。夫妻間だけ

の遊びであるならば縛るだけで、ただ単なる遊びで、倦怠を解消するだけのものであるならば良い。しかし私の行いたいことは、サディズムのプレイではなく、サディズムのゲームである。ゲームである以上、単なる遊びではなく、接続性のあるものでなくてはならない。ゲームであるならば、プレーと違い、中途半端な内容のものでなく、もっと突込んだ真剣なものでなくてはならないであろう。それ故、昔のように遊び半分のプレーなどは段段出来なくなつて来ている。だから、たまにしても面白くないのである。

私は今後増々何事にも真剣に取り組み、真剣にゲームとしてサディズムを考えてゆくであります。そして私の考えに賛成し、ご意見等をお寄せ下さる様、お願い申し上げます。又女性方もどんどんお便り下さい。お便りは日月舎を通じてお書き下さい。お待ちしております。

本文中挿入の写真は筆者の手馴れた緊縛を示すものです。モデルは創刊一号誌上（M女掌編告白）を綴った婦人です。

私の嗜虐性を 開眼させた女

志摩紫光

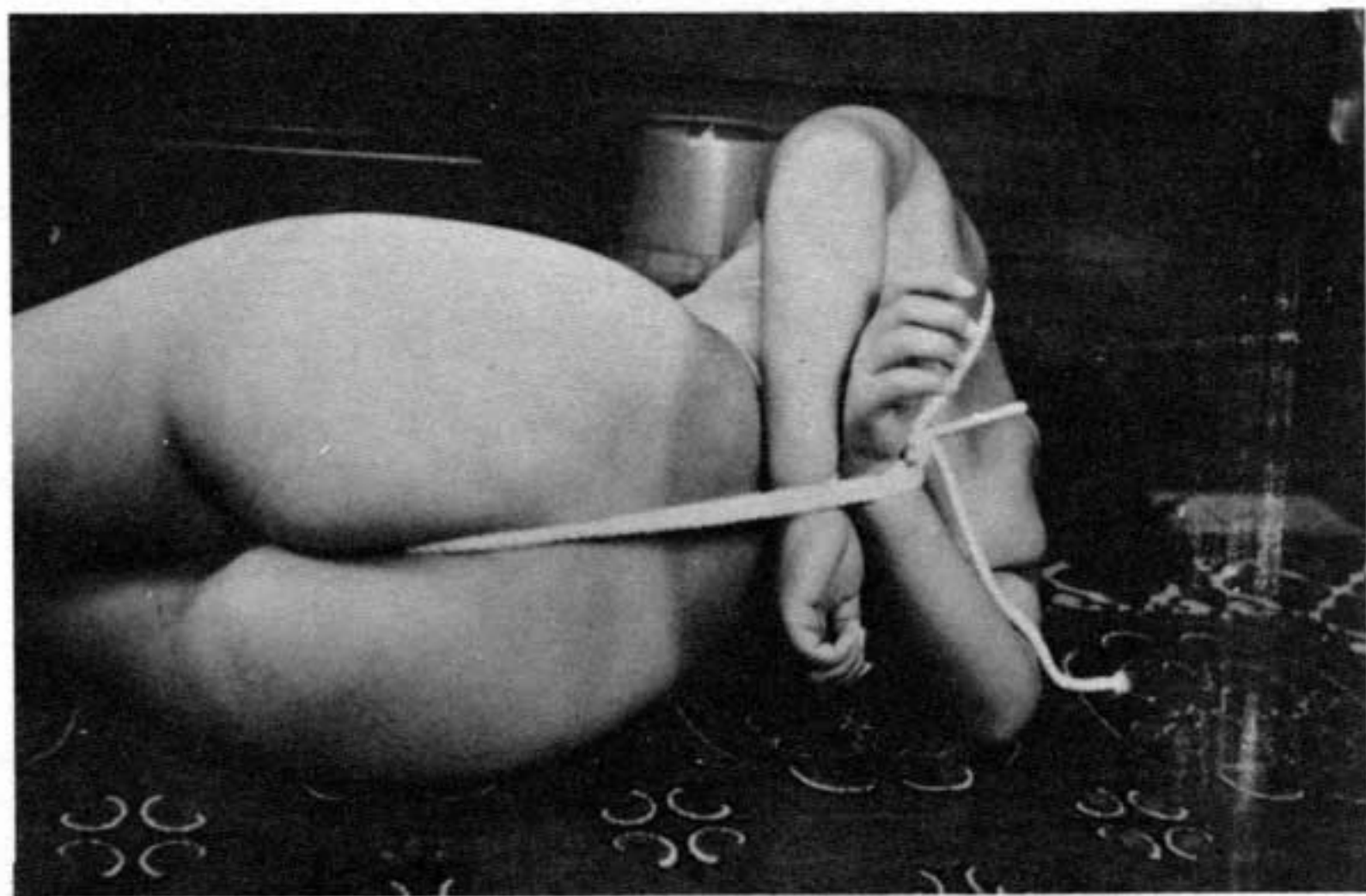
私のかつてのプレイメイトの一人、千津子は、私と知り合う以前に次のような「過去」を持っていたのである。

彼女は、三人姉妹の長女で家は小さな大衆食堂をしていたことから高校を卒業しても、他のクラスメートの様に就職の心配をする必要はなかった。そんな千津子に対してクラスメートは「良いなあ千津子は就職の試験で悩むことはないし、就職先を探す必要もないんだし、後は永久就職の口さえ見つけられればいいんだもんネ」と冗談交じりに冷やかしたりしたようである。

大衆食堂「丸屋」の前は高速道路の工事が行なわれており、昼食時を中心に夕食時迄、

そこに働く工事人夫が交代交代で丸屋のノレンをくぐって出入りをしていた。しかも、道路の補修工事と違い、三日や一週間で終えることができる工事内容ではない。掘削、コンクリート打ち、桁工事の為の鉄骨組みと、分担された工事人夫は交代していくものの、工事責任者や監督者をはじめ、それに準ずる上の者は長い間変わることはなかった。

昔と違い、工事機械化や近代工法を用いられるようになり、仕事は楽になってきたとはいえ、力仕事があることには変わらない。飯場や宿舎は寝るだけの空間しかなく、妻子ある者も無い者もそこでは平等の独身者であり、性の発散はトルコ等に勤める商売女に依るところが多い彼等の多くはうっ積するハケ



口を酒や卑猥な話で気をまぎらわせるのである。そんな話しの中に登場してくる女は過去において自分が経験した女であり、「こんな女優とやりたい」というような性交願望の女である。とはいえ、女優と交じわることは不



可能に近い上、本人達も本当にできるとは思っていない。が、そういう願望があってもふしぎではない。

丸屋を手伝っていた千津子は女優の誰れに似ているというわけではないが、笑顔に魅力のあって、長い艶やかな髪と小柄な体ながら健康的に発育した乳房や腰に「女」を感じさせたらしく店に足を繁く通わせ、話しをする

キツカケを作ろうという人夫や、気を引こうとしてわざわざ値の張る料理ばかりを注文する現場責任者などもいたようである。中でも飯塚という現場責任者は、千津子の若さと小柄ながら良く発育した肉体に眼をつけて、「俺は人夫を使っている責任者なんだ。ただの人夫とは違うんだ」という大きな態度で、

「近藤、おまえの受け持っているところは今

どの位進んでいるんだ」「吉田、最近の仕事ぶりは何んだ、やる気がないんなら誰れかと交代しろ」と店に現われるたびに声を上げて千津子の気を惹きながら、色目を使っていたようである。

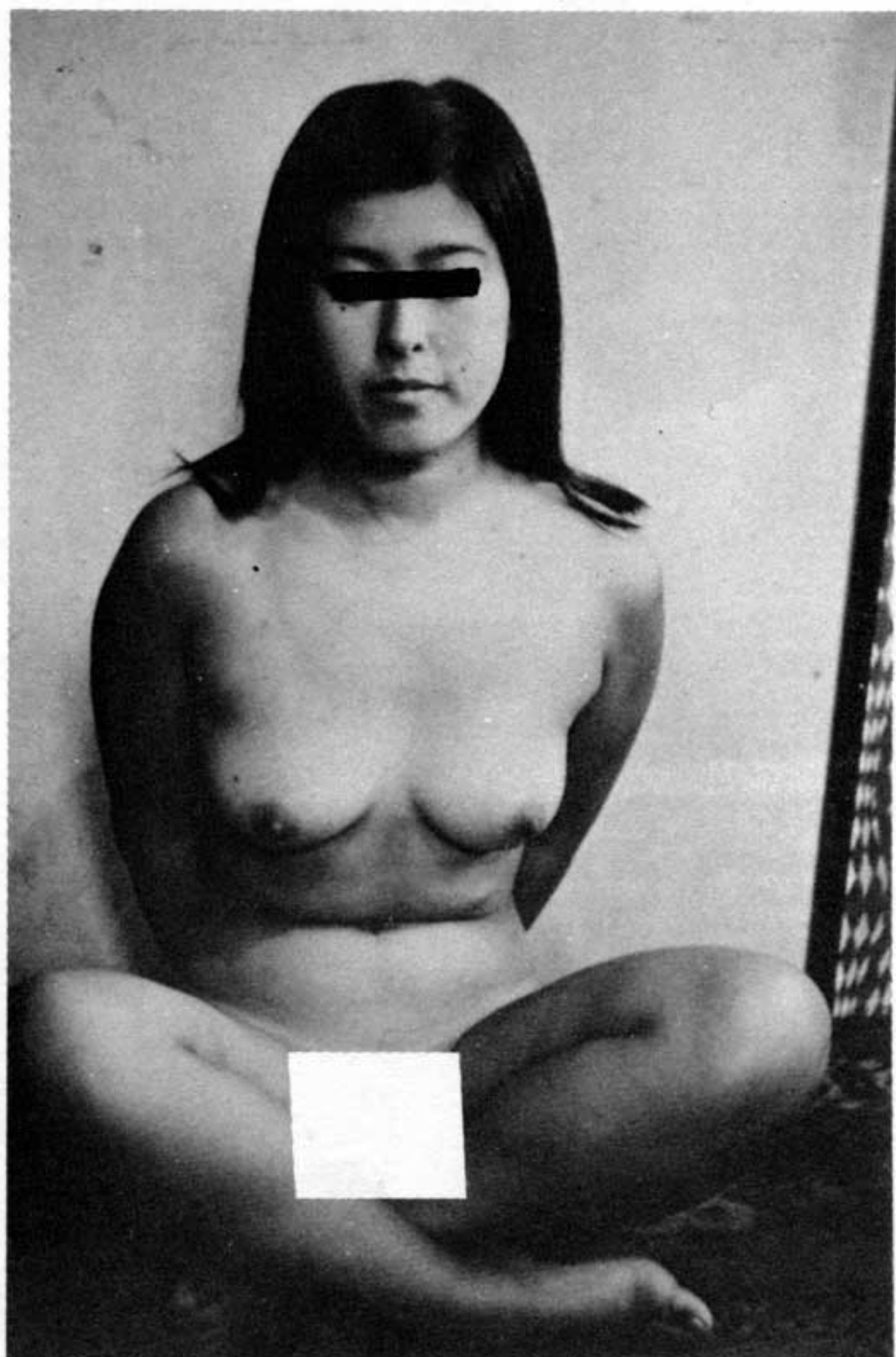
飯塚は四十歳位で、人夫の責任者らしく筋肉は隆々としていて凄味も兼ね備えた男だったらしいが、店では悪戯をするわけにもいかず、事あるごとに隙を狙っていたらしい。

丸屋も休みの日曜日の夕方、彼女はクラスメートの家から帰る途中、車に乗っている彼に偶然に出会ったのである。

「千津ちゃんじゃないか、これからどこへいくんだい。家へ帰るんなら送ってやるよ」と愛想笑いを浮かべながら、飯塚は運転していた車から降りて半ば強引に彼女の肩に手をかけて助手席に乗せたという。

そのとき、千津子は一瞬「乗ってはいけない。なにかされそう」と直感的に感じたらしいが、ドアを手で開けて降りようとしても体の動きがそれに伴わず、躊躇している間に飯塚が運転席に座り、エンジンをかけて走り出してしまったのである。

もちろん彼女は不安になったけれども「変な態度をとって飯塚を怒らせるのが、さらに



こわかったし、それにもしかしたら、ほんとうに送ってくれるだけかもしれないし」と自問自答しながら、じっと助手席に坐っているしかなかったようである。

そんな千津子を知ってか知らずか、しばらくは黙ったままで飯塚は夕闇の迫った街中を走らせながら、

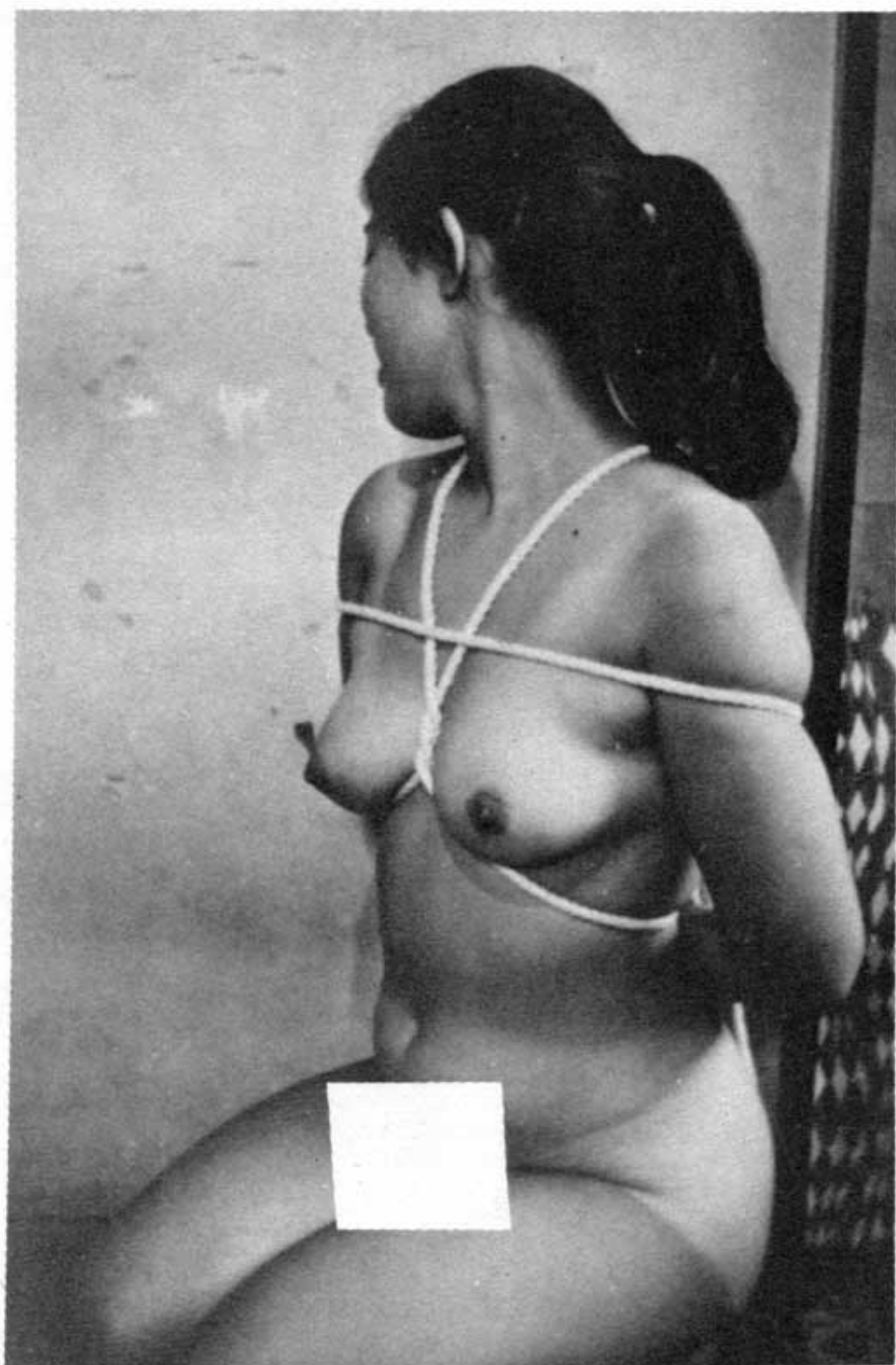
「飯場の人間は荒っぽいが根は良い人間だよ。だが、世間のヤツは暴力団の人間を見るような眼つきで見てるんだ、まったく頭にくるぜ。そうした眼で見られている人間同志というのは、そこらの人間よりも互いにかばい合っただけ、助け合うのは当たり前だと思っただけ、兄弟のようなもんさ、ヤクザでいえば義兄

弟の盃を交わしたのと同じだよ。わかるかい千津ちゃんよう」

と言う彼の方を見ないようにして、千津子はフロントガラスを見つめたまま、一刻も早く家に着くことを祈るだけで、その間、車がどこを走りどこへ向かっているのかを見る余裕も知る気持ちもなく、ハンドバッグの柄を両手で握っているのが精一杯だったようである。

やがて彼女は、車が不意に左へ曲がり、右へ続いて曲がって建物の中へ入り、ブレーキの音高く止まったとき、「俺のいう通りにするんだ」という飯塚のドスのきいた声に一瞬、我に返ったものの、腕を把まれたまま車から降ろされ、エレベーターである部屋に連れこまれた。薄赤い照明に枕が二つ並んだフトンが襖の奥に見え、寝巻きが置いてある寝室の壁は鏡張りになっていたらしい。

部屋の錠を降ろした飯塚はいきなり、千津子の頬に平手打ちを食わせ、着ていたワンピースの背中のファースナーを一気に降ろし、シュミーズ一枚の姿にし、そのシュミーズとブラジャーを一緒に脱がせ、反射的に乳房を覆い隠した両手の動きを計算していたかのようには無防備になった下半身に着いているパンティーストッキングとショーツを足元まで引き



った、というのである。

こういう過去を持つ千津子と私が知り合ったのは、友人を介してである。

高校を卒業して両親の店を経営する大衆食堂を手伝っている千津子は必然的に友人の数も減り、恋人も欲しい時期になってはいたが、会社勤めとは違い、同僚もいないし、訪れる客層も千津子にはふさわしい男がいなかったのである。

もちろん私にS的要素があることは、千津子を紹介してくれた友人も千津子も知る由はなかった。数回のデートを重ねるうち、直感的に「自分の思い通りになる女！」の印象を強めた私は、先に述べたような過去があったとはまだ知らずに、自室でムードミュージックをかけながらモーションを起こし、こちらのペースへ引き込んでいった。

本来ならば、千津子を襲った飯塚のごとく強引に持っていくのが本当のSという方も居られると思うが、まかり間違えば強姦罪にもなり兼ねない上、順次調教していつてこそ自分好みのM女がつくれると考える私はオーソドックスな方法で千津子に迫った。

口づけから入り、ペッティングへと移行し

降ろすという早わざ、その手ぎわのよさは彼女に抵抗する余裕さえ与えなかったらしい。

そして、乳房と股間を隠してふるえている彼女に向かって彼は、

「おい、こっちを向け、どうだ俺の体はまだまだ若い者には負けんぞ」

と、服を脱ぎ捨てると、露出した肉体を見

せつけながら千津子を敷布団の上に押しつけ襲いかかってきたという。

八十キロ近い体重の飯塚にのしかかれて、必死に抵抗しようとした千津子は更に平手打ちをかまされると同時に、飯塚の「死にたいか」の声を耳にした途端、もう何もかも観念して、彼の欲望のままに翻弄されるしかなか

ていったとき「お願い、ちょっと待って」と言い、前述のような過去を私に打ち明けたのである。

話し終わって泣きながら「ご免なさい、ご免なさい」を繰り返す千津子を見ながら「わかった。お前の過去はわかった。といつてもその過去は許されるものじゃないことは千津

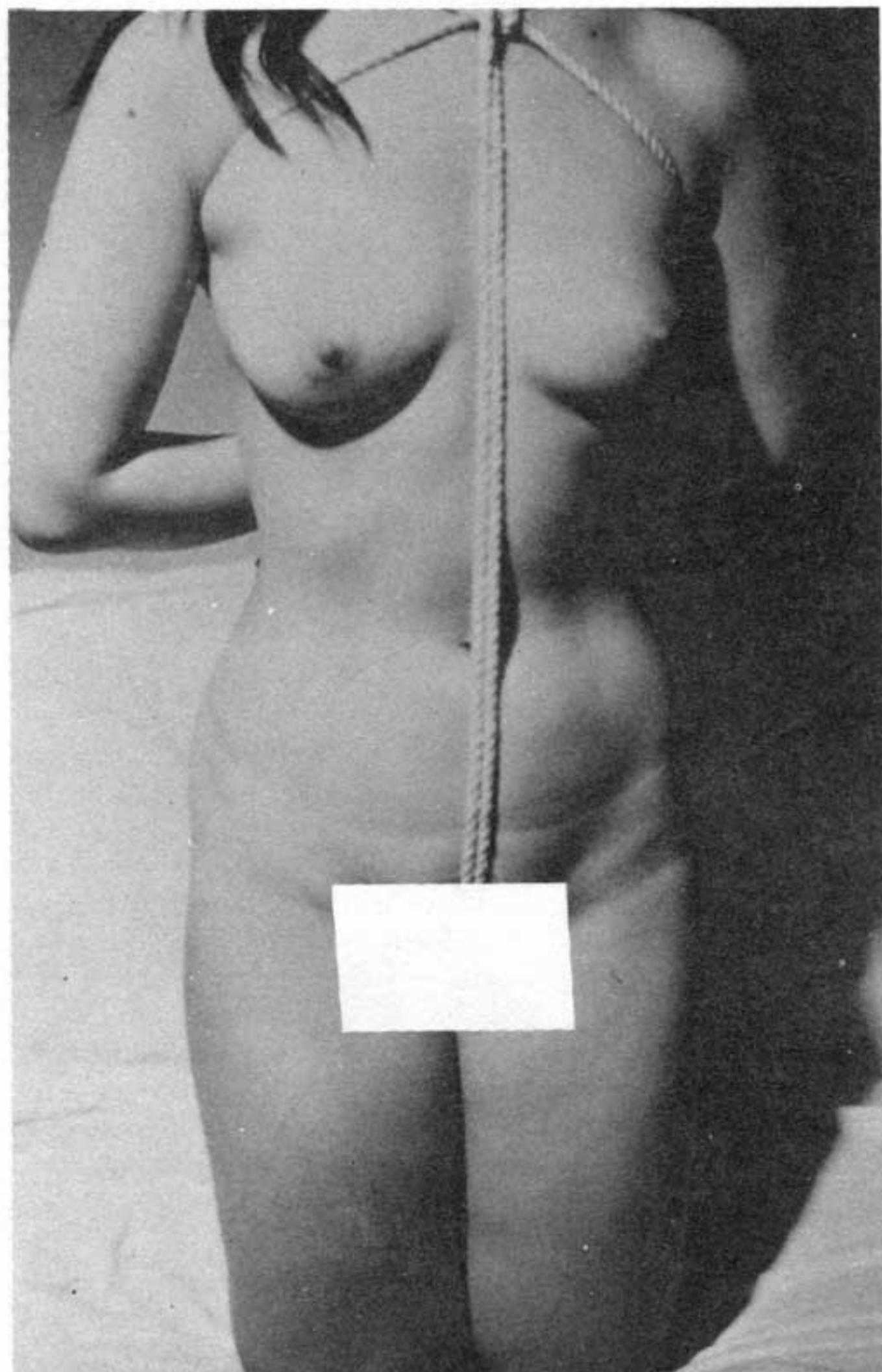
子も良くわかるはずだ。これから一年間千津子は俺の言う通りになるんだ、それができればお前の過去は許そう。どうだ一年間やれるか」の問いに「ハイ」と答える千津子に対し、「よし、まずお前は今日、今から俺の奴隷になるんだ。俺のいうことは何んでも聞き逆らってもいいかん、どんな無理でも聞くことがま

ず第一だ」と千津子を服従させることに成功した。

「まず第一に、俺と会うときは全て前開きの服を着ること。第二にパンティは履かぬこと。第三に俺と二人きりのときは衣服を一切つけぬ事」の三つを告げた。その三つを守らせることを誓わせた私は千津子の衣服をすべて脱がせ、充分愛撫をした上で千津子が奴隷になった証拠にと、カメラを取り出し、千津子の全裸を撮り、さまざまなポーズをさせ、恥部も含めて千津子のすべてを撮り納めた。

これほど従順になれるかと思うほど従順な千津子だった。私の部屋から出るまで全裸のままの千津子に対し「パンティ位は付けさせてやろうか」と愛用の綿の縄を取り出し、足を開かせたまま立たせ、腹にまず縄を巻き、千津子のヘソの部分から縄を縦にしヘヤーの上を通してから恥部を押さえて、その中心へ縄が通るようにし、肛門の上を通して背中のところまで縄を返し、肛門の上を通し、恥部を通り、そしてヘソの上へ戻した。その後、腹へ縄をまわし、尻の上に通っている縦縄を締める意味でくぐらせ、次に腰骨のところを横にまわして見た。

つまり、腹のところにかかっている縄と、





恥部の中間に縄をまわしたことになる。これにより、縦縄が固定されるだけでなく下腹部全体が締められる効果も生み縄のパンティとしてのイメージが強く出る。更に両足のつけ根に縄をまわしてみると、より効果的になるのがわかる。この格好で部屋の中を歩かせたり、開股をさせたり、まったく思いのままに

視覚を満足させたものの、両手、乳房がそのままというのは飼育にならないと考え、縄のパンティを解き、縛り直してみた。

大抵の場合、性交の為に裸になるのは自然の成りゆきから見ても恥じらいは大きくないものの、それ以外で裸にされた上、縄で縛り上げられ、開股を強制され、恥部を晒すなど

は女性にとって耐え難いはずである。にもかかわらず、私のなすがままに恥態を演ずることにさして抵抗するでもなく、従順に縛り上げられていく千津子の態度はいまひとつ、腑に落ちなかった。

しかも強制的に操を奪われてから長い月日が経過しているわけでもないのかかわらずこれほど素直になれるものだろうか？ 更に、縄で縛り上げられるという、おそらく初体験であるにもかかわらず、股間縛りを兼ねた縄のパンティを施されても嫌がる風でもない千津子の姿態は経験を積み、場慣れしているようにすら私の目に映った。

縄のパンティを解き、縛り直そうとしている束の間ではあったが、直感的にそう感じた私は「まだ何か経験をしているはず、隠しているはず」と思うのも同時だった。

そう思った私は千津子に対する縛りに手加減をする必要も、刺激を与えずに少しずつ少しずつ縄に慣れさせていこうとも考えなかった。

千津子の両手首を背中中で重ねて縛り、両ひじまで縄で巻きながら縛り上げた。それだけでも両肩が後ろに反り、二つの乳房は大きく晒されるように左右に引っ張られる。続いて

両ひじのところから二本の縄を首の両側にか
け、その縄を乳房の前まで縊りながら持つて
きて両乳房の下で左右に縄をわけ、背中とひ
じの上を通し、再び乳房の下をわたした縄を
背中を通して、今度は乳房の上を通して更に
背中へ回し、もう一度乳房の上へ持つてきて
そこで二本の縄を交差させ、乳房の下で縄と

乳房の上の縄を締め上げた。乳房が変形し、
飛び出したような乳房の上で、乳首が固くな
って、小さな突起が乳首の周囲に並んでいる
のがわかる。

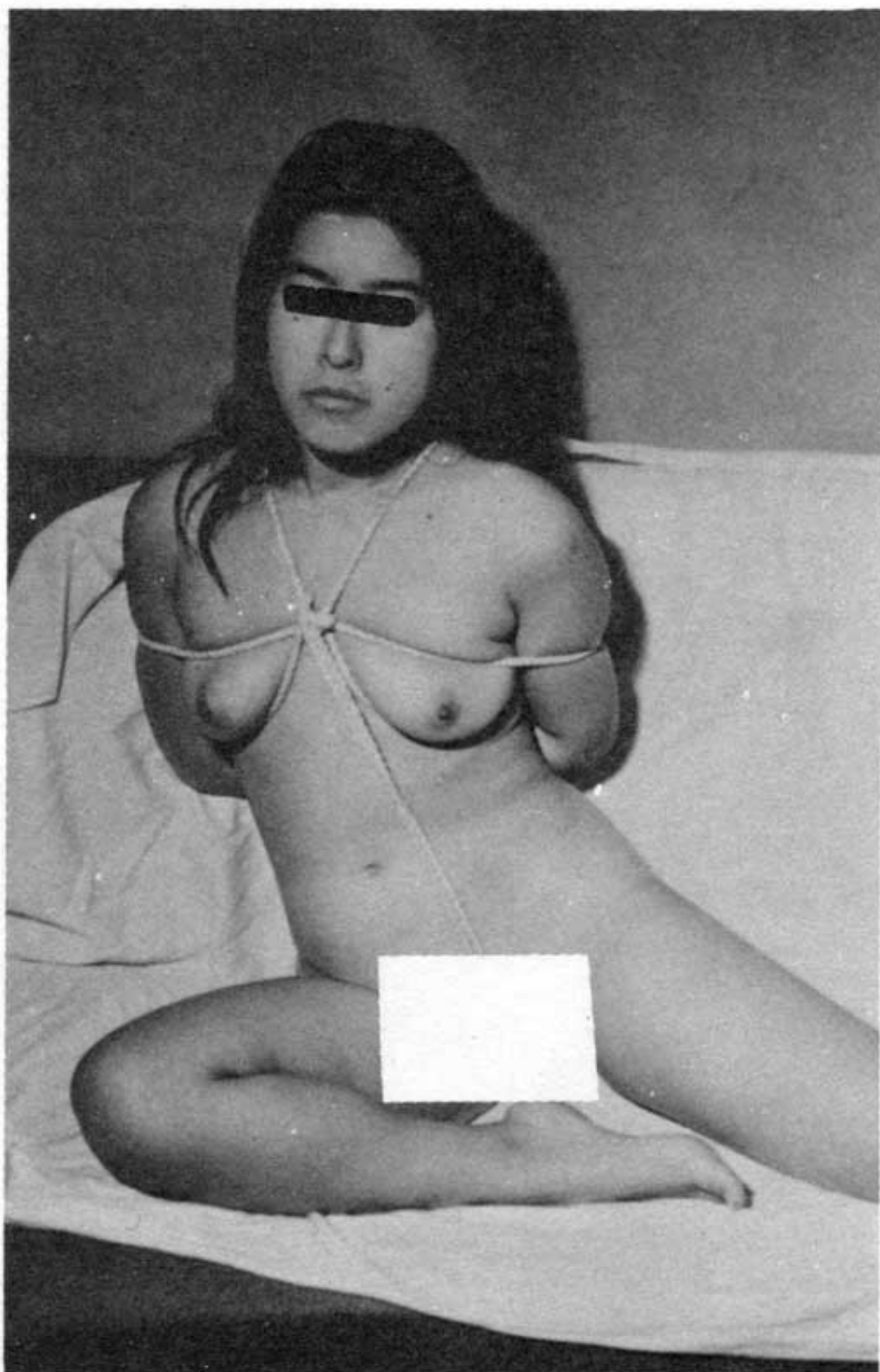
今度は別の縄を持ち出して「トイレでする
ようにしやがめ」と命令、ヨロヨロとしやが
もうとするのを「さっさとするんだ」と強引

にしやがませ、左右の足を別々にしやがんだ
ままの姿で縛り上げ、その縄を千津子の首に
まわしてから前にもつてきて、乳房を縛った
縄に結んだ。この縛りは非常にキツイ縛り方
の中にはいる。両手を手首からひじまで後手
に縛られ、胸が反るようになっているところ
へ両足を膝から折り、縛れば上半身は前に屈
もうとなるのだから、縛りというよりも縛り
を利用した責めになる。しかも恥部は隠しよ
うもなく、晒されるだけで何をされようと拒
否もできないのだ。

こうした姿に縛り上げた後で、不意に千津
子の恥部を責めつけてみた。

「アウツ、ウツ」と言ったまま唇を噛む千津
子に「正直に言ってみろ、お前の体を知って
いるのは飯塚だけではないはずだ。まだ他に
誰れがいるんだ、言えっ、言うんだ」の激し
い詰問と同時に責める。逃れようと体を動か
せば縄が喰いこむ責めは十分、二十分と続い
た。この責めで二十分続けば持ちこたえた方
だろう。それでも言おうとしない千津子が濡
れているのをたしかめ、本責めにかかりなが
ら、空いた両の手で千津子の乳房と乳首を責
めてみた。乳房を思いきり掴みあげてみたり、
乳首を左右にひねっては引っ張り回す度に千





津子のそこにグーッと力がこもって強く包んでくるのがわかる。

自分でも何で、そんなことを感じ、問い詰めているのかはわからなかったが、直感的に感じたことだけに間違いはないと思つての責めは千津子にとってキツイものだったに違いない。

今、している行為は憎しみもはいつているものの、根底は千津子に対する愛情が完全に芽生え、成長していることを知っているからにほかならないと私は感じていた、と書けば難しいように見えるが、単的に言えば、自分のモノになった女が自分だけの占有ではないことへ対するジェラシーである。

憎さと愛しさは背中合わせ——という言葉聞いたことがあるが、確かにその通りだと思ふ。

理論はともかく、詰問に答えない千津子の姿は次第に苛立たしさを増すだけで、意地でもまだ隠しているであろう過去を白状させた気持ちをつのらせることにほかならない。

両足を膝から折り、胸乳へ付けるように縛られたままで仰向けにされた千津子の姿は全てを晒けただけで、顔は赤味を帯び、後手首は完全に血の気が失せていた。

それでも縄を解こうとはしなかった。自分の過去の一部は告白したものの、後は言おうとしない千津子への気持ちは本心から惚れただけに許せるものではなかった。

私は何となく残忍な気持ちへと転化していった。

名前は知らないがラジオやアンプのコードをつなぐのに一時的に使用する洗濯バサミの形状をした柄が黒と赤の二種類の色があり、ハサむ部分がサメの歯のようなギザギザのあるものを持ち出してきて、千津子の前へ持つていき、眼の前でハサむ仕草を繰り返して、「これでハサまれたら痛いぞ、どうだ、素直に全部話してしまえば、このハサミは使わな

い。話さなければ千津子の乳房をハサむが、
どうだ。素直に言ってみろ！」と迫った。

千津子は言いたい、でも言わない方が、
というような表情をして、口を動かしただけ
で、声となつては出てこなかった。

それが何となく、あわれを誘うような気が
したが、「好きだから、愛しているから、何で

も話して欲しい。嘘や隠しごとはダメだ」と
いう気持ち、あわれさを押さえ、実行に移
した。自分の指にはさんだだけでも鋭くとが
った歯は指の腹にくいこみ、ものの三十秒も
そのままにしておけば、疼痛なんていう生易
しい痛さではない皮膚を食い、骨に食いこん
でくるような痛さを覚える位なのだから、柔

らかな乳首でもはさもうものならば、下手を
すれば切れてしまふかもしれない感じさえす
るものだ。

ハサミの柄の方を持ち、ハサミの歯を見せ
ながら乳首に置いた瞬間に千津子は眼をつぶ
り、長時間縛られているために血が通わな
くなり、体を動かして、縄の痛みから逃れよう
としていた動きも止めた。

観念した！ そんな表情の千津子に異様な
ものを感じながらもはさんでみた。といつて
も柄の方を持つ指先には力が入っており、完
全にハサミのバネが効いてはいなかったが、
鋭く上がった歯が乳首の周囲に食いこんでい
くのがわかるほどにしたのだから痛みは激し
いはずだ。確かに指の力を徐々に抜き、バネ
の力が効いてくると、千津子は歯をくいしば
り「ツーツ」という声も挙げ出した。

ギザギザの歯が乳首にくいこんでしまふと
さすがに耐えられない。

「言う、言う、いいます。だから早く、早く
とつて」と体をよじる。

「さあ、いってみろ。俺は千津子を完全に自
分だけのものにしたい、だから千津子の体の
すみからすみまで、千津子の過去も、千津子
の心も全部自分だけのものにしたいから聞く



んだ、憎いからじゃない、逆に愛しいからこそ、こんなことまでするんだ」

と話すのを聞いた千津子は

「実は、私のクラスメートの一人とつき合っているんです。好きな方ではないけど、向こうから積極的にくるものだから、拒みきれなくて、それで……でも、もうつき合わない、本当、本当よ」

「どこまでつき合ってたんだ。千津子の全部をそいつは知っているのか、どうなんだ？」

「えっ……ええ」

「何回位したんだ。どこでしたんだ」

「彼の家で……」

「何回だ」

「そんなにしてないわ、本当です」

「何回だって聞いているんだ」

「三回」

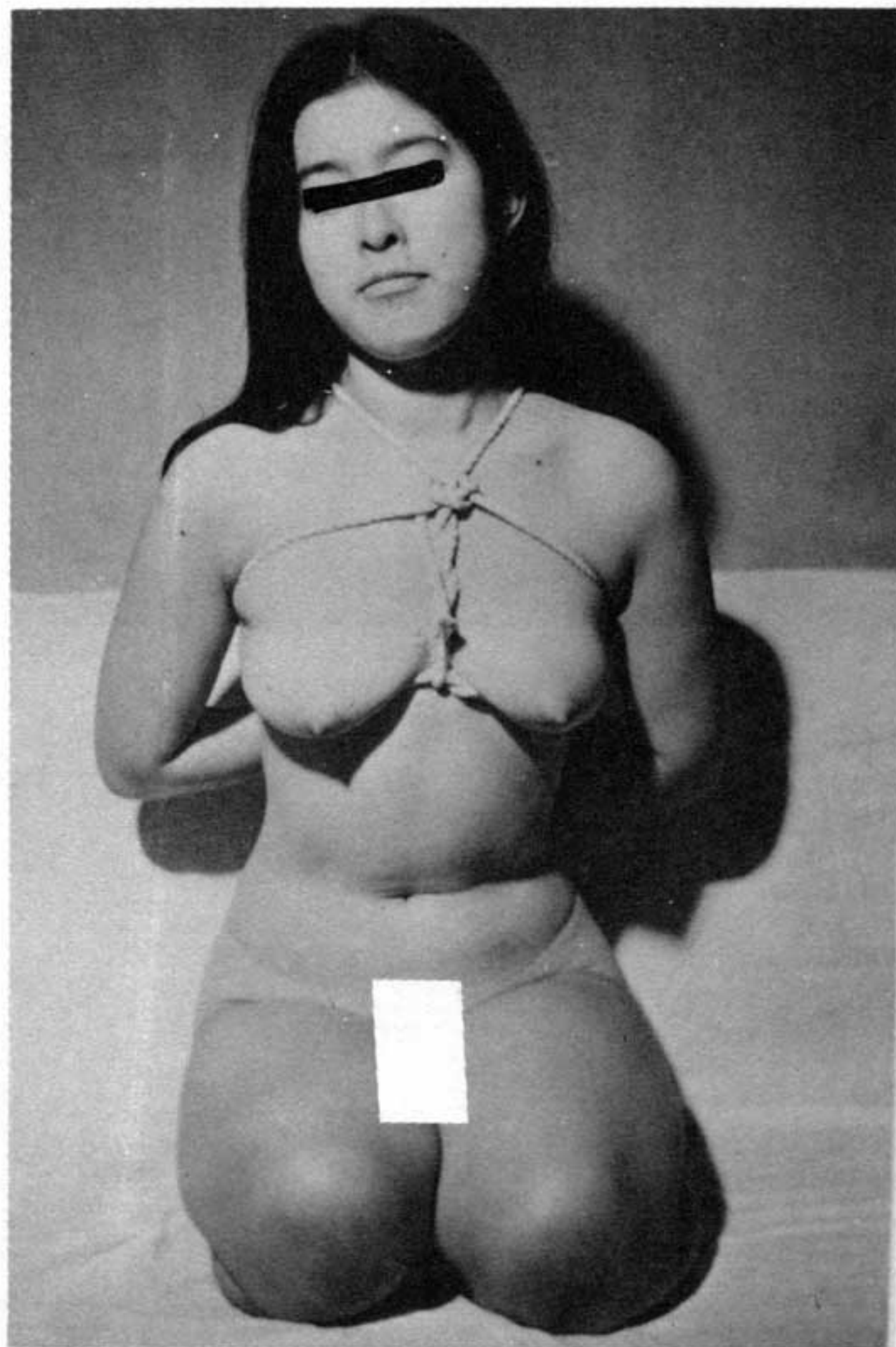
「うそだ、もっと多いはずだ、はっきり、正直に言ってみろ」

「本当に三回です。うそじゃありません」

「わかった。信用しよう。もう今から、たった今から俺以外の男とは付き合うことは許さん。いいな」

「……ハイ」

「千津子は何で、飯塚とのことは俺に話しな



がら、そのことは話さなかったんだ」

「そこまで話して、嫌われるのが恐かったの。ごめんなさい」

後でわかったことだが、千津子は私と交渉を持った時に「男をすでに知っていることを知られ、非処女であることによって、嫌われ、去られるのがたまらなく恐かったし、飯塚と

のことは予期しなかった出来事とはいえ、そこで処女を奪われたようにすれば、まだ救われると思ったから」と告白した。ずっと後のことだが女の気持ち、女の計算を私は知った思いだった。

話しは戻るが、そのときに私は千津子に対し、

「千津子が俺に対して嘘をいつていたことは許されることではない。その罰に、千津子は俺の奴隷として過ごすんだ。俺が良いというまでだ。わかったか」

「……ハイ」



そこではじめて、縄を解き、責めから解放したわけである。

以来、千津子は本当に良く私の命ずるままに、何でもした。縄のパンティのまま、二日間を過ごさせたり、乳房の周囲のみを支えるブラジャーのままでブラウスを着せて街中を歩かせてみたり、今でこそ、シースルーやノーブラも流行して、人目に触れることも少なくないが、その頃はまず目にしたことはなかった。それだけに、街中では多くの人間が、「オッ」「へエーッ」「透けてるぜ」といろいろな言葉が聞けた。そうしたことですら、言われるままに、命じられるままにする千津子は私にとっては大切な愛奴であった。

私が削毛をしたのも千津子が最初で、セツケンをつけ、丁字カミソリで、思いつくままに周囲の恥毛から刈り、トランプのハート型に削り、きれいにハート型に刈れたなと思いつつ湯をかけ、セツケンを落とし、乾くとハート型か何かわからなくなったこともあった。

そんなとき「周囲を刈るだけでなく、毛の長さを短かくすれば、毛が横や斜めになつて型がくずれることもないんじゃない」とアドバイスするほどの愛奴ぶり、たしかに、ハサミで短かく刈ると、ハート型は生きてき

ていた。それを鏡に写しては「千津子はご主人様の奴隷です」と言い、私のいうままに振る舞う姿は満足できるものだった。

好事魔多しの例えではないが、半月ほど、会うのに間が空いたとき、千津子の所へ、クラスメートの男性が現れ「復縁したい」と迫り、その強引さに負けて、復縁となってしまい、結納までする運びとなったのである。

これには、さすがの私もショックであった。とはいえ、そこまではすんだ話しを壊してもと手を引いた次第である。

苦い経験ではあったが、千津子とのつき合った二年余りの歳月は思い出しても大胆な月日だったと今更にして感じる次第である。

そのうちに、調教中の出来事を思い出し描いてみたいと思う。

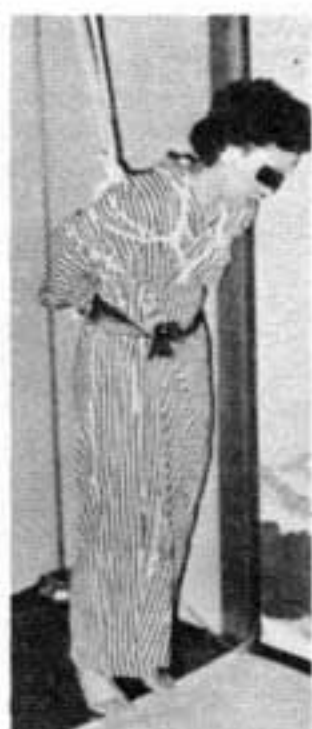


雁のように北から来た夫人

「縁は異なもの……」といいますが、その後の「味なもの」とまでいつてしまいますと、さも私だけが一人得意がっているか、に受けとられそうな危惧も感じられます。それほどタエコ夫人との出会いは予期外のことでした。「サン・アンド・ムーン」誌



が初めて女性読者を獲得したことも「ビッグ・ニュース」なら、「自分も縛られてみたい」と申



し出られた初めてのの方でもあったのです。

出迎えに旗を振って「熱烈歓



迎”したいような、”ホントかな”と疑いが晴れないような日が過ぎて、事実温暖の地を求めて飛来する渡り鳥のように、一人の



淑やかな夫人が陽だまりの中に佇んだのでした。

「前略 昨日S市に出てふと御誌をみつけ入手致しました。なんとなく表紙にひかれたのです。これまでSM誌も色々読みましたが余りにもてらいすぎる所があり、私には時として嫌悪感をいだく時もありました。私はプ



レーの経験ありませんが何時の頃よりか、緊縛され責められているフォトを見ると体がもえるようになりマンネリ化した性生活ではあきたらなく、欲求不満のはけぐちに、自分も縛られてみたいという願望を、もてあましていました。自分の縛られているフォトがほしいと思っ

ているのですけど、お願いをとりあげて下さいますなら私の方から上京致しますので、くわしく日時場所等御指定下さいませ。何か一味ちがう貴誌故に思いきってお便り致しました」

の返書は四号編集集中のことであ
って約二週間経って発送された
のですが、どうやらご機嫌損じ
にもならず九月二十七日に計画
が実現したのです。

「プレイしてみたいという気持



ちが、丁度今が最高潮になって
いた時です。はっきりした周
期ではありませんけど、たびた
び繰り返されていますの……」
平静さを失わないで話されて
行く夫人から、俎上の鯉の感じ
もあって、私は

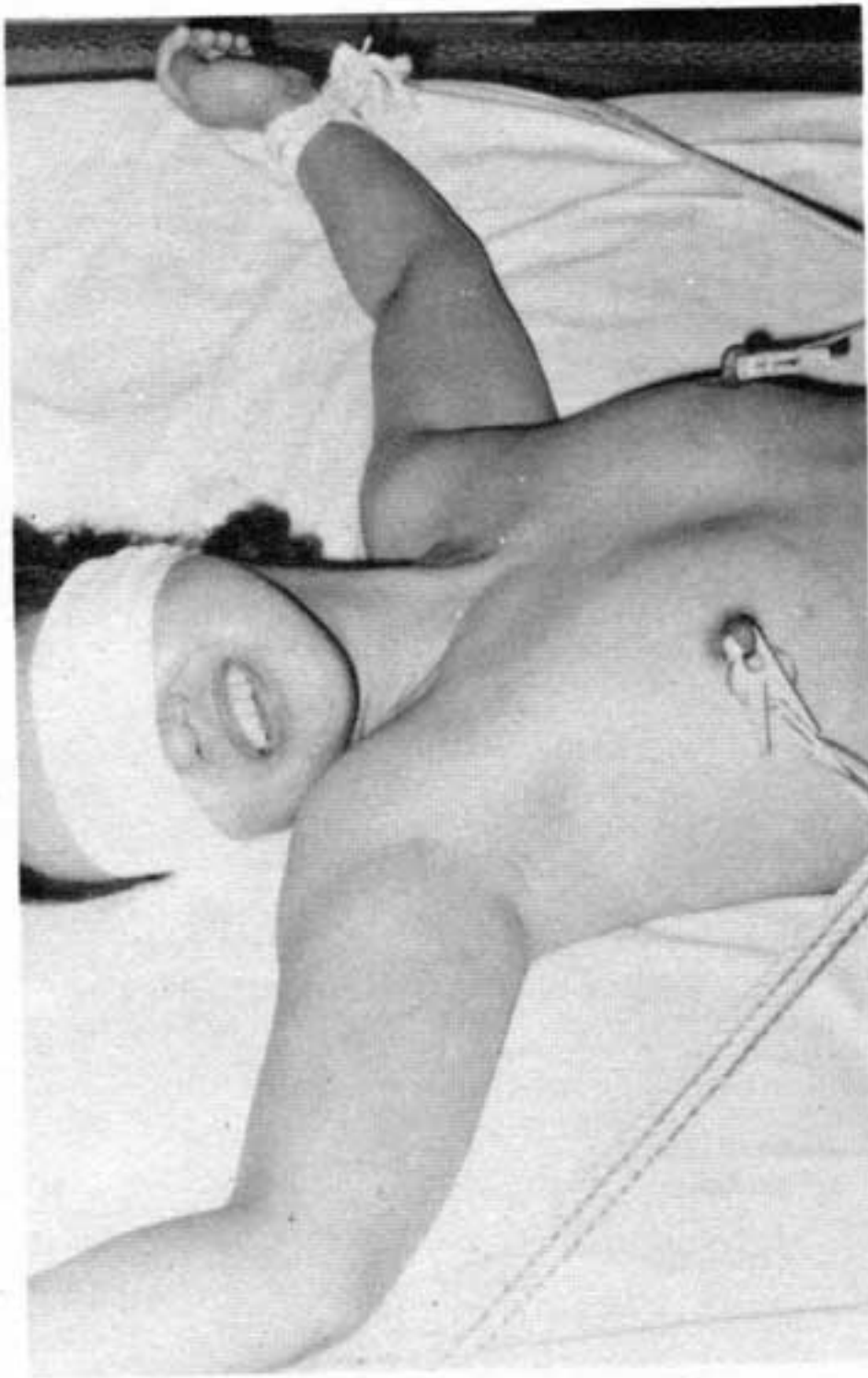
「緊縛写真」を撮るだけで終

らず、プレイ経験をされて帰ら
れてはいかがです。また、その
方がカメラマンとして私が様々
な記録を作って差し上げられる
ことにもなりますが」

と、斬り込んでみました。

「おまかせします」

ものおじない返答が間髪を入
れずあって、私は「助っ人を頼
むこともあるかもしれないから
待機を」と、かねて事前予告し
ておいた邑内氏に連絡をとった
のです。



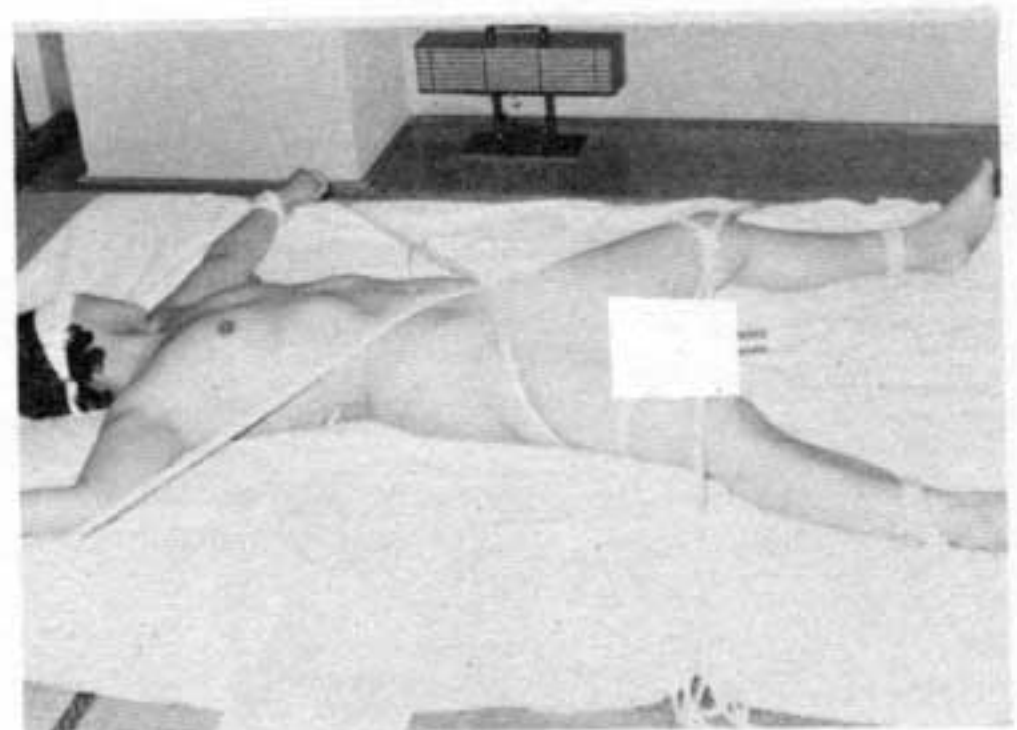
雑誌作りを始めてから、私の

頭には様々な想念が入り混って
一つひとつの実現を果して行き
たい願望がつのるばかりになっ
ていました。邑内氏起用もその
一部分のものです。

「初だめし……素敵じゃないで
すか」

馴致経験豊富という邑内氏は
大乗り気で、渋滞の道を忍耐強
く慎重に車を運転して馳せ参じ
てくれました。

以上の経緯で読者は大方察し
がつかれたことと思います。タ



エコ夫人の「プレイ・レポ」は
次号が本編で、ここでは「予告
編」を、写真頁のプレイ光景と
併せてご披露したわけです。

タエコ夫人が実体験でどう思
われたか、私は別れ際にも訊ね
ませんでした。夕焼け空に代っ
てネオンが一際輝き出した空に
突然遣らずの雨が降り出して
くれたらと思いつつ後姿を見送っ
たのです。

世田記

愛縛日誌

一の瀬莊志

私のわがままを聞き早速「奴隷市場」のカタログを御送り下さりありがとうございます。又、ご惠贈下さいました皮製品使用による責めフォトを楽しく見せてもらいました。この女性の責めに使用された「貞操帯」十月中にでも世田さんを訪ねられた時には、購入したいと思います。

先日勤務先よりの長電話、申しわけありませんでした。私はこのように書くことは全くダメ!!電話では何だかうまく話せない……やっぱり逢って話すのが一番だ! そんな気持ちです。でもその時の長電話により又、一つのヒントを世田さんより教わりました。先日少々酔ったのをいいことにし、妻にバイクで迎えに来るようにTELをし(近くの小学校校庭に)呼び出し、股縄をかけ、バイクにまたがせ、私は後ろより乳房と、デルタに手を入れ、校庭を二周ほど廻させました。誰れも居ないのをいいことに縄を強く引き上げたり、乳首を強くつぶしますと、バイクを運転しながら一生けんめい耐えるうちに、股縄はすっかり濡れてヌルヌルしており、バイクの座席を両足でグツとはさみつける姿は、なんともエロチックでありました。

そんなことをやり、ハッスルした私は、そ



の夜ざっそくローソクを使った責めを行いましたが、妻はどうしても熱さに弱くあまりパツとしませんでした。それと同時に写真を取ったのですがカメラ（自動カメラ）の電池の無いカメラで写してしまいました。四本送りますうちの一本がそのはずです。

九月××日、午後十一時

真由美と二人でフトンの中……。細い縄の束を真由美の股に当てて、やさしくこすりな

がら私は聞く――

「どうだ？ 縄が好きか？」

「……」

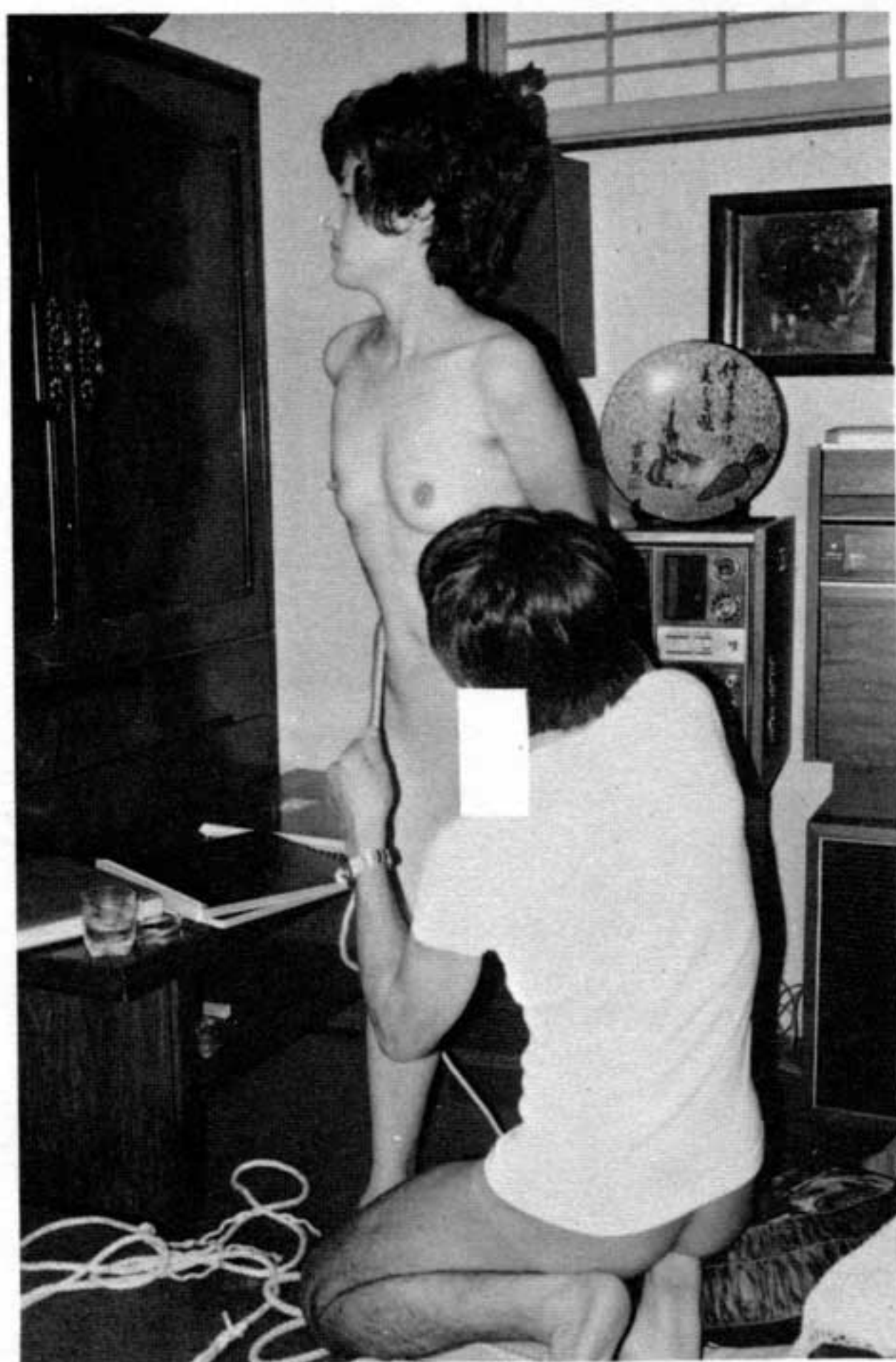
首でこっくり返事をする。

「縛られている時はどんな気持ちだ！」

「こわい……」

「どうして？」

「次に何をされるか分からない……それに、パパは縛ってしまうと、私に恥かしいことをさせたり……他人に見られそうな所につれ出



自動シャッターで……プレイ開始



したりするから……」
「そうすると真由美のここが濡れてきて、パパがほしいほしいって言うくせに！」
そんな会話をしながら乳首に口をつけるともう固くなっていました……



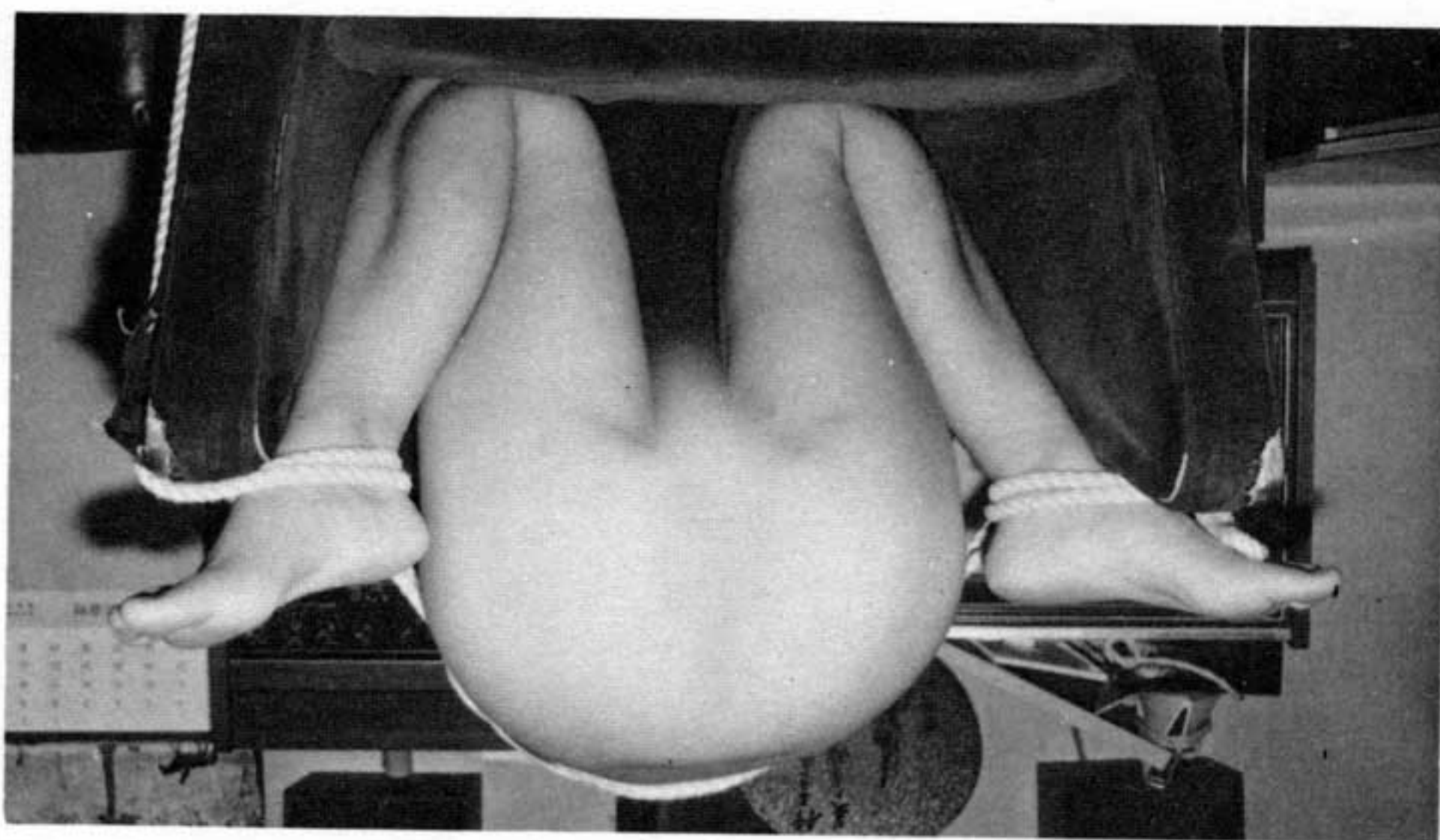
「おい——写真を撮るぞ!! 裸になれ!!」パ
ツとフトンをはねる。細い縄をしっかりとさ
んだ股……何かつまらない。「おい! 普段
の服を着ろ!」

その時——世田さんの声が聞こえるんです
ね……ロボットカメラマン!!

そうなんです。今夜の私は真由美を縛り、
そして犯してしまいたんです……メチャク
チャに……そんなフォトを残したい!! でも
今は無理……やむなく三脚に頼ります……
残念——

やはりただ裸を縛るより、いつも台所にい
る妻を後ろからおそい縛り上げる! そんな
気持ちよくなるからなんです。

でもやはり写真に取ろう……そう思うとや
はりぶつんぶつんと動きが切れ、又、感情も
男はとぎれてしまい何かその中に飛び込みき
れない時もあります。でも「女」とは変なも
のですね……カメラこのもう一つの「目」に
すごく興奮もするんですね!! 私の手が股の
間に動くよりも、縄をくい込ませた股間にカ
メラの「目」を向けると真由美の太腿が捻れ
動き、その中に濡れた縄を見る事が出来るん
です。そんな一夜を写したフィルムが二本で
す。うまく書けませんので、フィルムで私ど



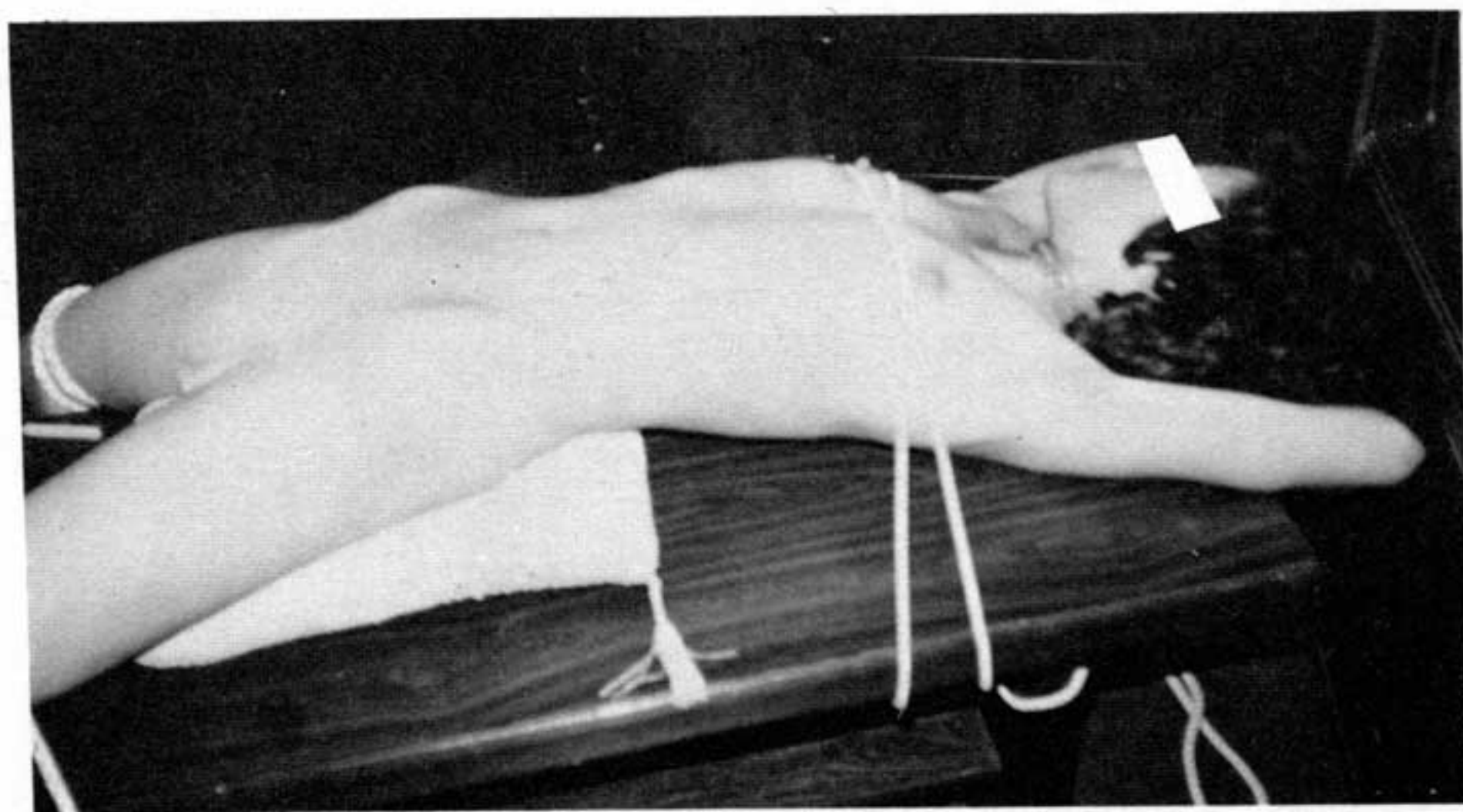
も二人の夜を見て下さい。(ピンボケ? でしょうか、又しても二人は……)

九月××日

巨人優勝!! もうジャイアンツのファンになって二十五年!! ジャイアンツの選手と同じにビールを飲みあかし、今までの雑誌の整理にかかりました。今の時刻は午後十一時――

約百冊ほどのセレクト、コレクター、ファン等の中からグラビアのみスクラップし、後は焼却処分にする事にしました。そしてまずはセレクト等より「多貫欣」の名前をさがしてかたっぱしからスクラップです。

「調教交換」(野上良江)「小語・奇想館」、買ったところは何げなく読んでいた。そして何となく知っていたエロ・ストレーター・多貫欣の





名前……今はすごく身近な人に感じ、読めば読むほどその男に会いたい……私を知ってくれるその男に……。

「作家の泣き」 “消えた掌中十字” これを読んだ時、今まで思っていた男……世界一、これが続けて世界一の男にカンパイしたくなりました。

「夜の町の刑場」 K. Tanuki PLAYAIDA

タヌキンのアイデア・シリーズ等、やっぱり沢山あるものですね。

又、六本木氏も世田さんの友人である知り、その名前のある雑誌をもう一度読み返しダンボール箱へと積み込みました。それが終わったのが夜中の二時でした……。

九月××日 本日です……

先日の電話で世田さんより今夜あたり “あ

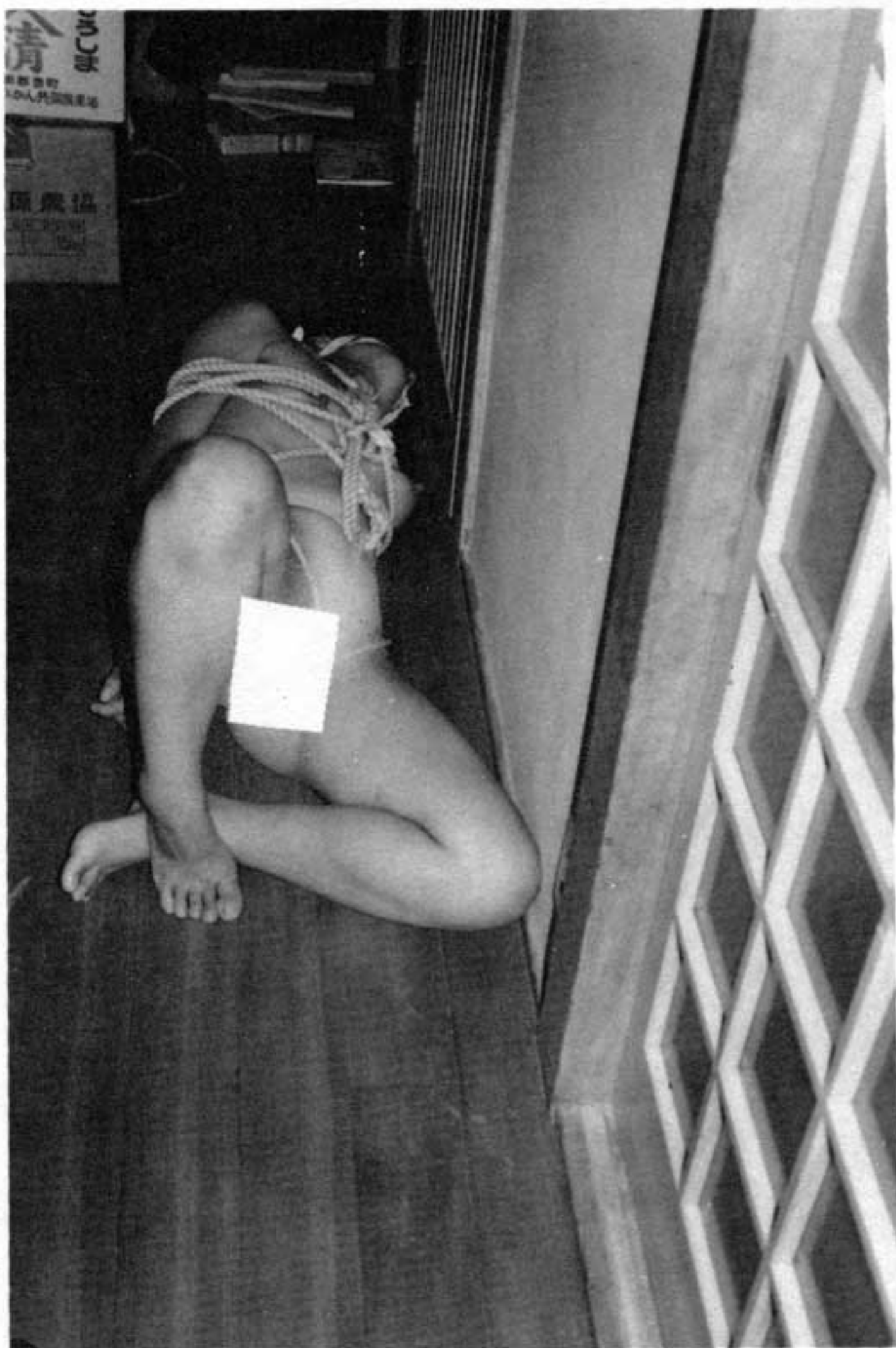
る夫婦” のプレイフォートのスクランブルがありそうだと聞き、何となく落ちつかず、そばにいる妻を縛り上げ、又、ある誌に書かれていた。世田さんは、フツンの上とか、タタミの上の縛りはきらいで、やはり板の間がいい!! そんな事も頭にうかび、裸にし縛り上げた真由美を廊下にくろがしパチリ、すごくいい感じだ。正座（縛られて）した姿は何とも言えないものですね。ドレイ? を引きすえた感じ。又、真由美も板の間の冷たさに——それて縄が板におされてくい込む痛さに耐えているようで、それが又感じるようでじっと動き回れず残念でした。でも世田さんを知った私達夫婦は、毎日毎日何かを教わり——考え——サン・アンド・ムーンの一員に少しずつ近づいていくような気がします。末長い教えをお願い致します。

今、私の足元に、ガムテープで口をふさがれ、縛り上げられた真由美がころがり、私の足元でかまわれております。

今の時間午前〇時四十分、もう夫婦プレイのフォートを撮っているのかな? 真由美が汗ばんでいる……そろそろ……

“文”等でのお手伝いは出きそうにありませんが、写真は、誌上発表に御利用できるものがあればお手伝いしたいと思っています。

第四号の発表を楽しみに夫婦で待っています。信州の秋の写真等も次回には送りたいと思います。



購読のご案内

◎本誌購読料(三号は品切れ)

定価千二百円 送料百円

◎別冊グラフ(二号まで刊行)

定価千五百円 送料不要

◎御送金は必ず現金書留で

◎注文先

〒101東京都千代田区西神田

一―四―一三 新神田ビル

エド・プロダクツ宛

◎投稿・通信

日月舎(世田介)宛

〒101東京都千代田区西神田

一―四―一三 新神田ビル

エド・プロダクツ気付

本誌は特定書店での販売のほかに下記の
《大人の玩具店》にも常備してあります。

- アップルイン (574)1477
港区新橋・第一ホテル前
- アラジン (580)8479
港区新橋2-6-10
- エンジェル北欧堂 (35)1120
立川市若葉町(虹ヶ丘バス停前)
- エンジェル (52)0588
川口市西川口陸橋そば
- エンジェル (23)0538
所沢市東住吉町11-9
- エンジェル (32)0615
長野県松本市博労町バス停前
- 黒猫館 (352)2566
新宿駅南口三越駐車場前
- 黒猫館 (842)4568
台東区上野駅浅草口左
- クライマックス (200)8680
新宿東宝プロムナード
- 新宿パラダイス (369)8117
西新宿(緑屋前入ル)
- セルフの店 (341)0921
新宿駅南口
- セルフの店 (208)7044
高田馬場(原田ビル)
- ファッションドリーム (461)4270
渋谷区宇田川町26(東京本店通り)
- ラブブティック (200)2696
西武新宿駅前
- ダゲール (831)7828
台東区台東1丁目(秋葉原駅前)
- ダゲール赤坂店 (434)0044
港区芝荻手町(地下鉄神谷町)
- 東京名品ショールーム (764)8383
品川区大井駅踏切近く
- やまと民芸 (714)0603
品川区武蔵小山駅前
- プレゼントコーナー (24)7486
川越市元町1-8-1
- 東京記念品 (387)9215
中野ブロードウェイ1F
- 娯楽用品城西店 (313)2544
杉並区梅里(新高円寺駅横)
- 娯楽用品環八店 (331)3484
杉並区高井戸東(高井戸駅横)
- 娯楽用品城南店 (764)0349
大田区大森西2-32(平和島前)
- 娯楽用品大原店 (321)0959
世田谷区松原1-55(大原交差点そば)
- 娯楽用品環七店 (994)0865
練馬区豊玉北(豊玉陸橋下)
- 娯楽用品藤沢店 (25)7329
藤沢市本町2(バイパス下)
- 娯楽用品柏店 (67)1953
柏市あけぼの町3(柏駅前)

◎上記取扱総代理店
東京記念品 ☎03(387)9215
新規販売申込みは当店へどうぞ



佐野みさ子・代理妻

カメラレポート・ピックアップフォト
M女に期待する読者の要望にこたえて

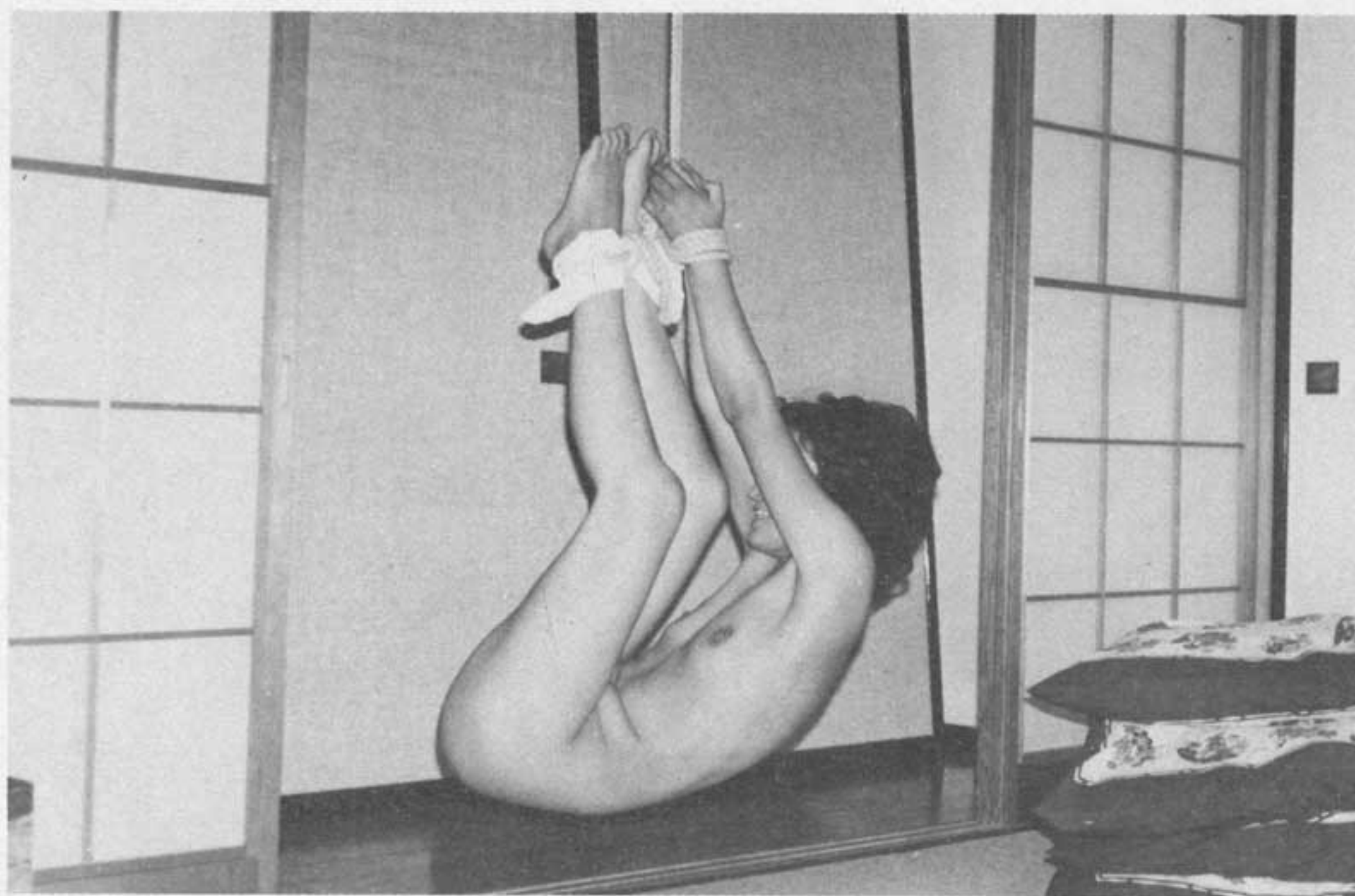


のどもとにローソクの炎が……



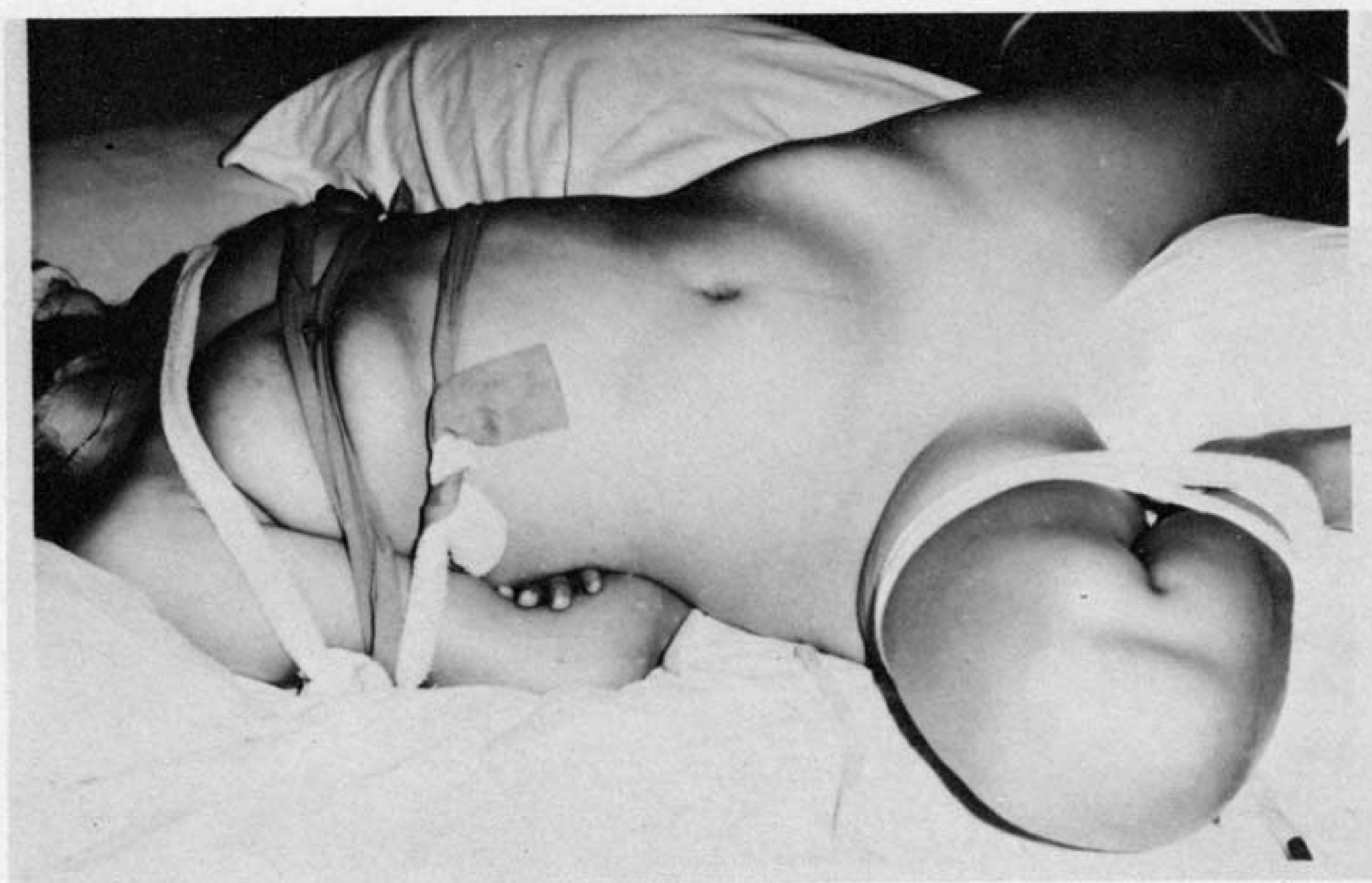
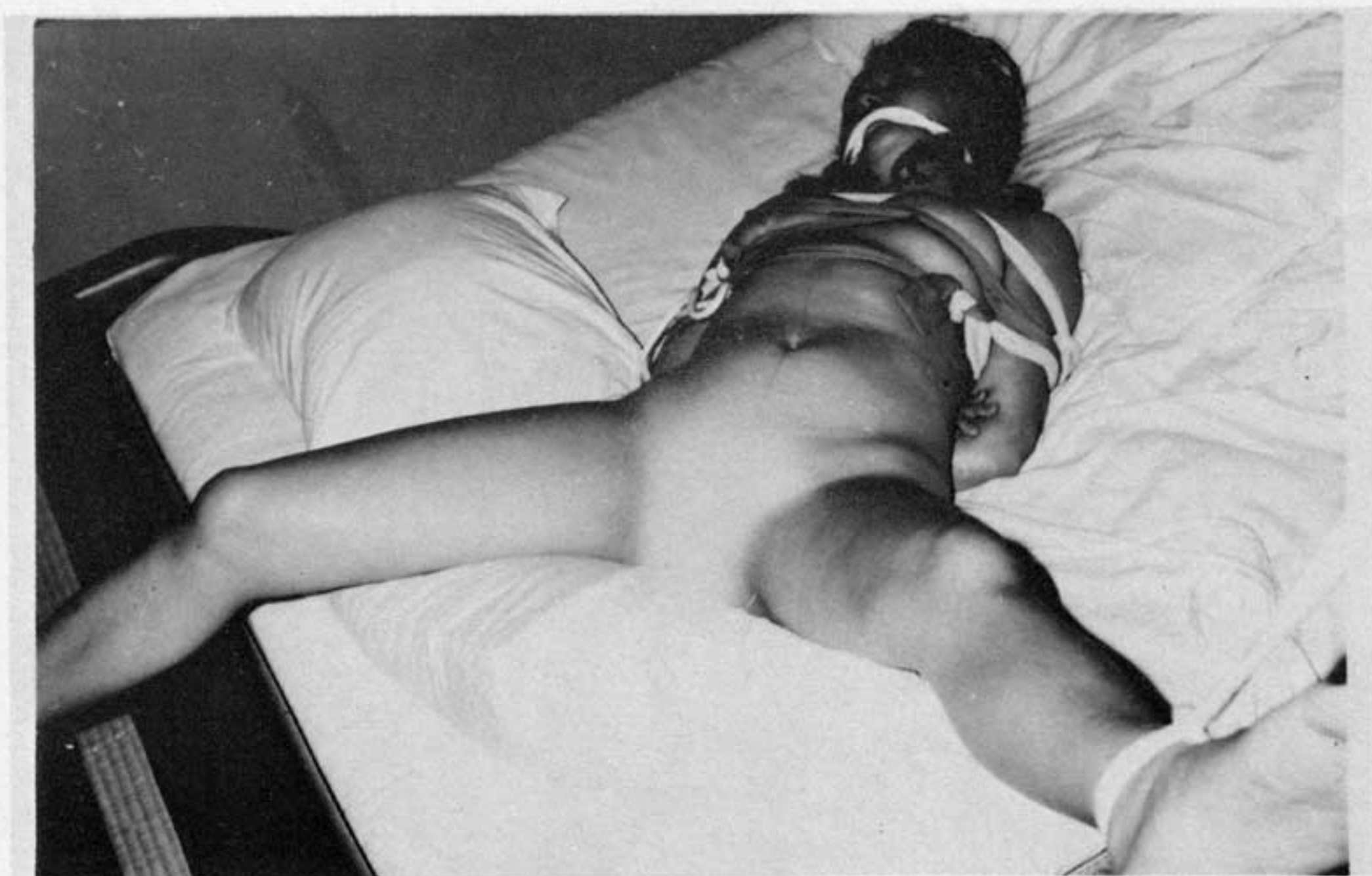
縛絆愛虐の記録

一の瀬莊志 提供





葉村繁樹 渉猟アルバム ②



回想の縛女

北海道

大泉和也

提供





六本木薫

緊縛作品集

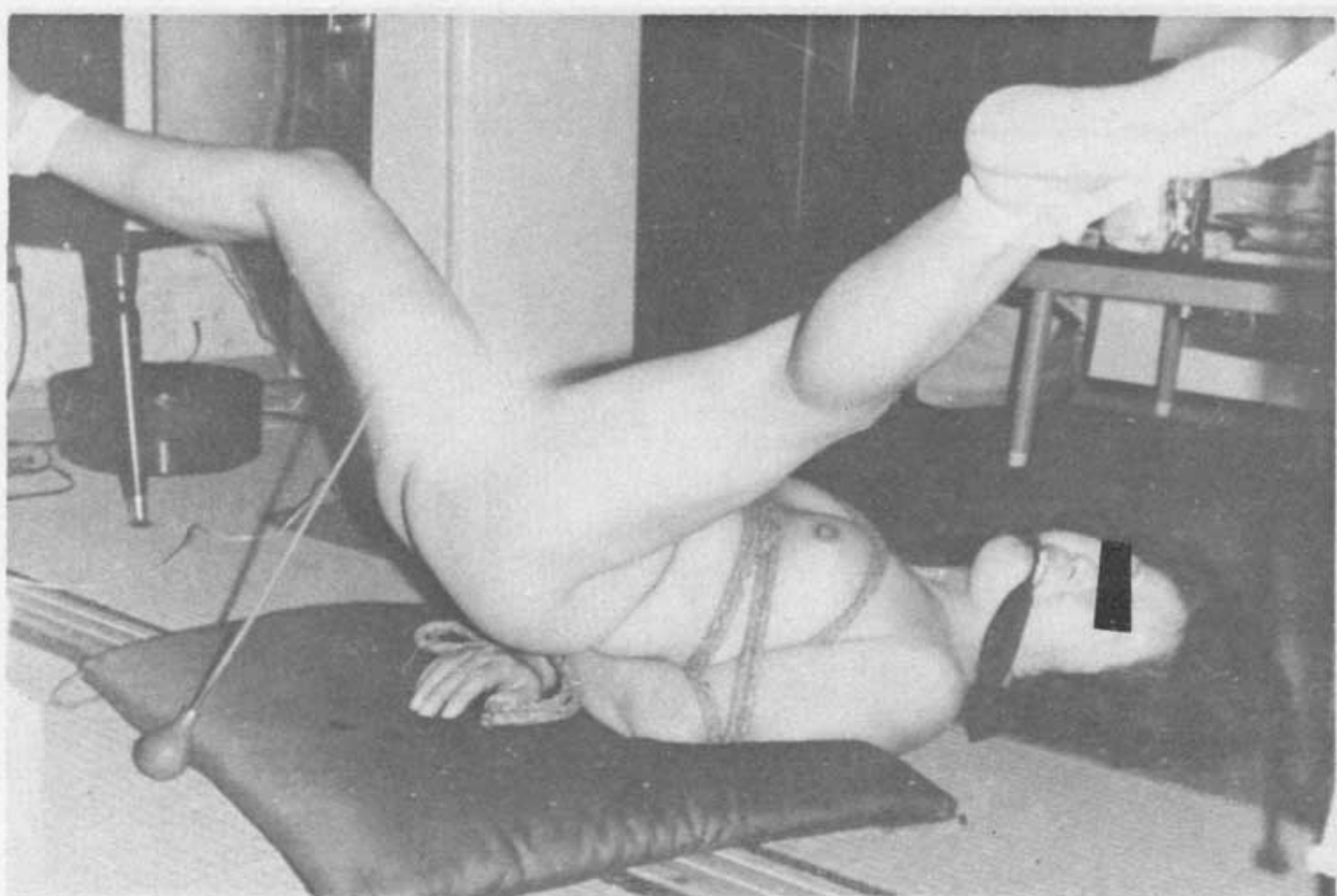
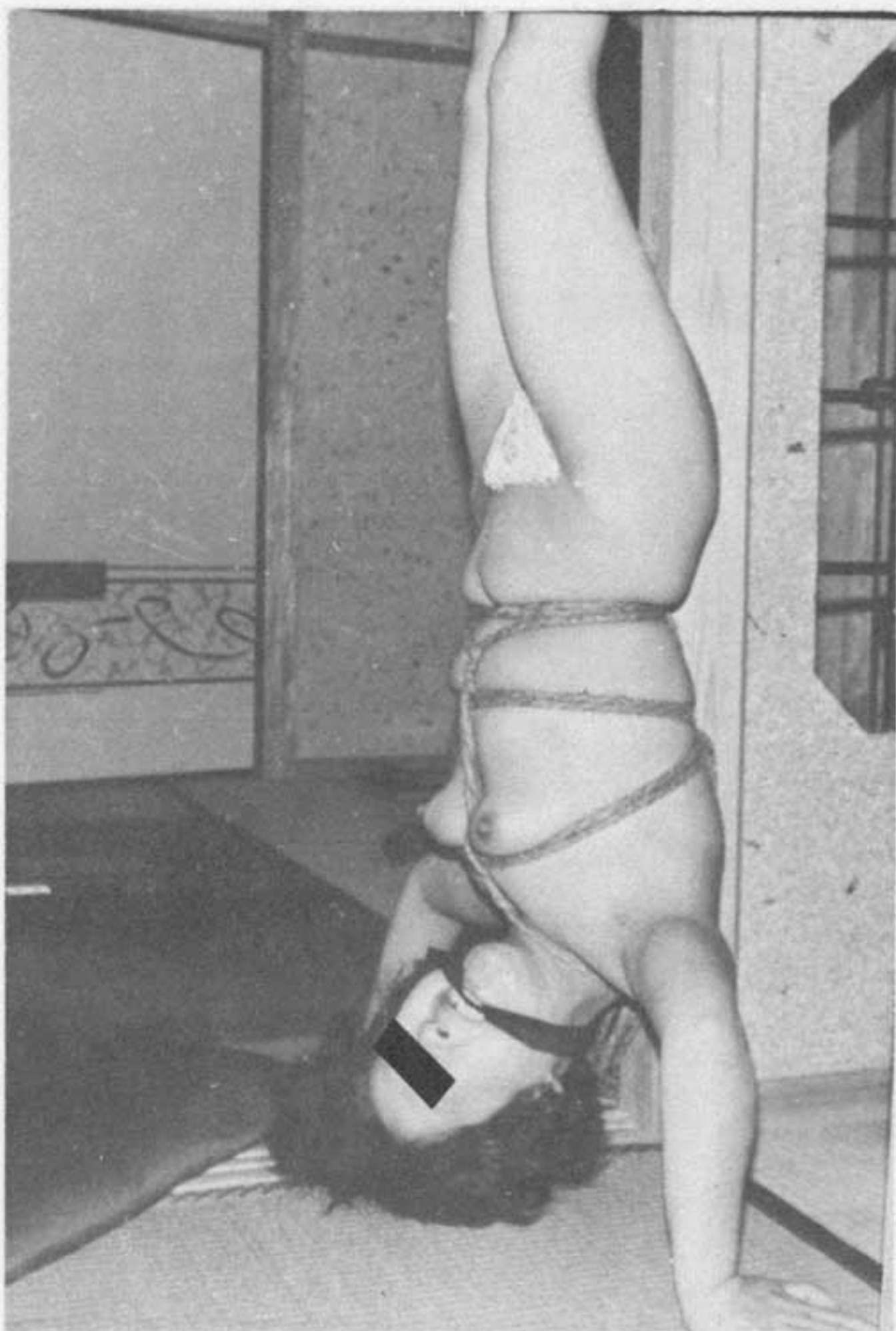


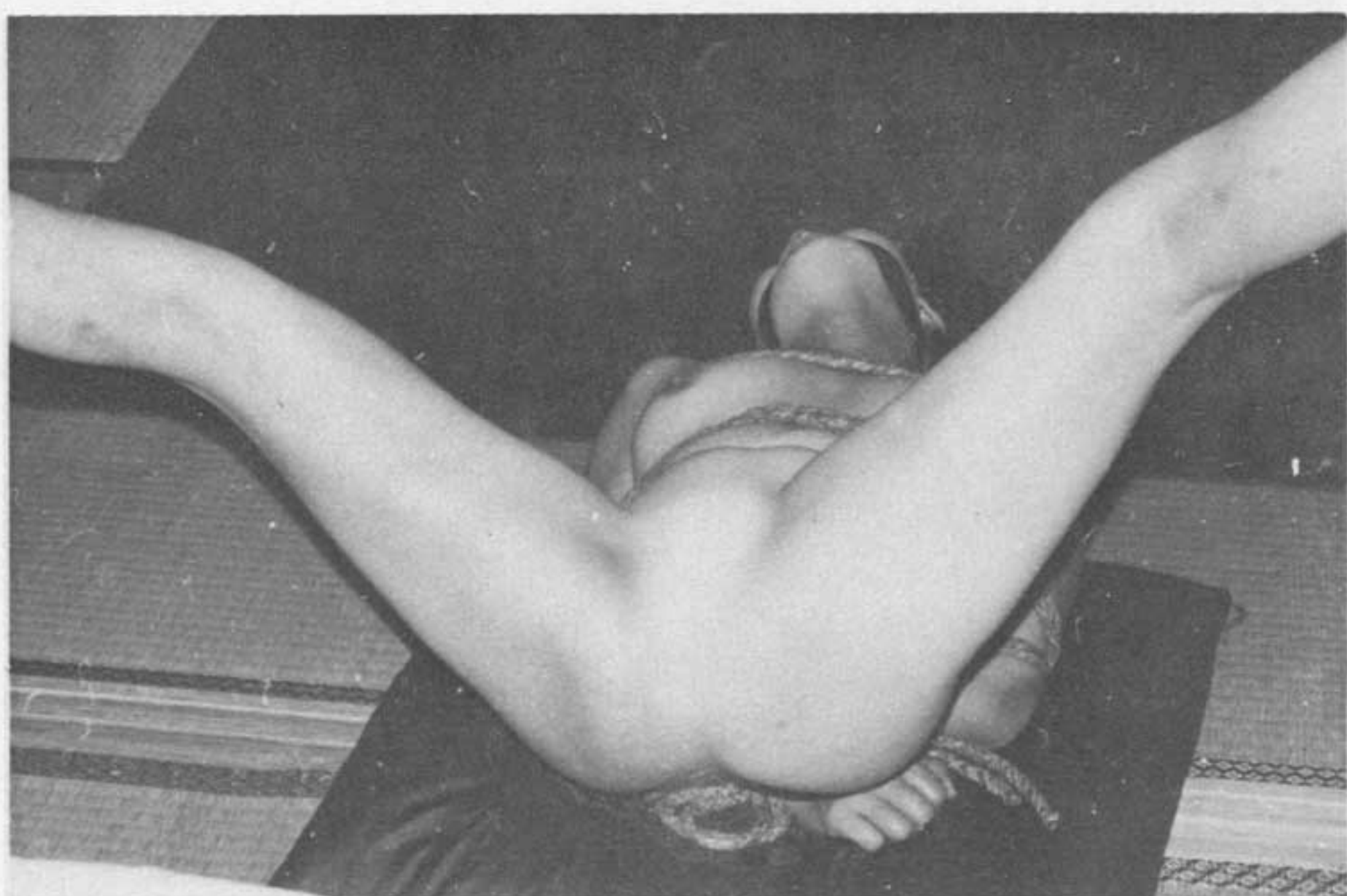
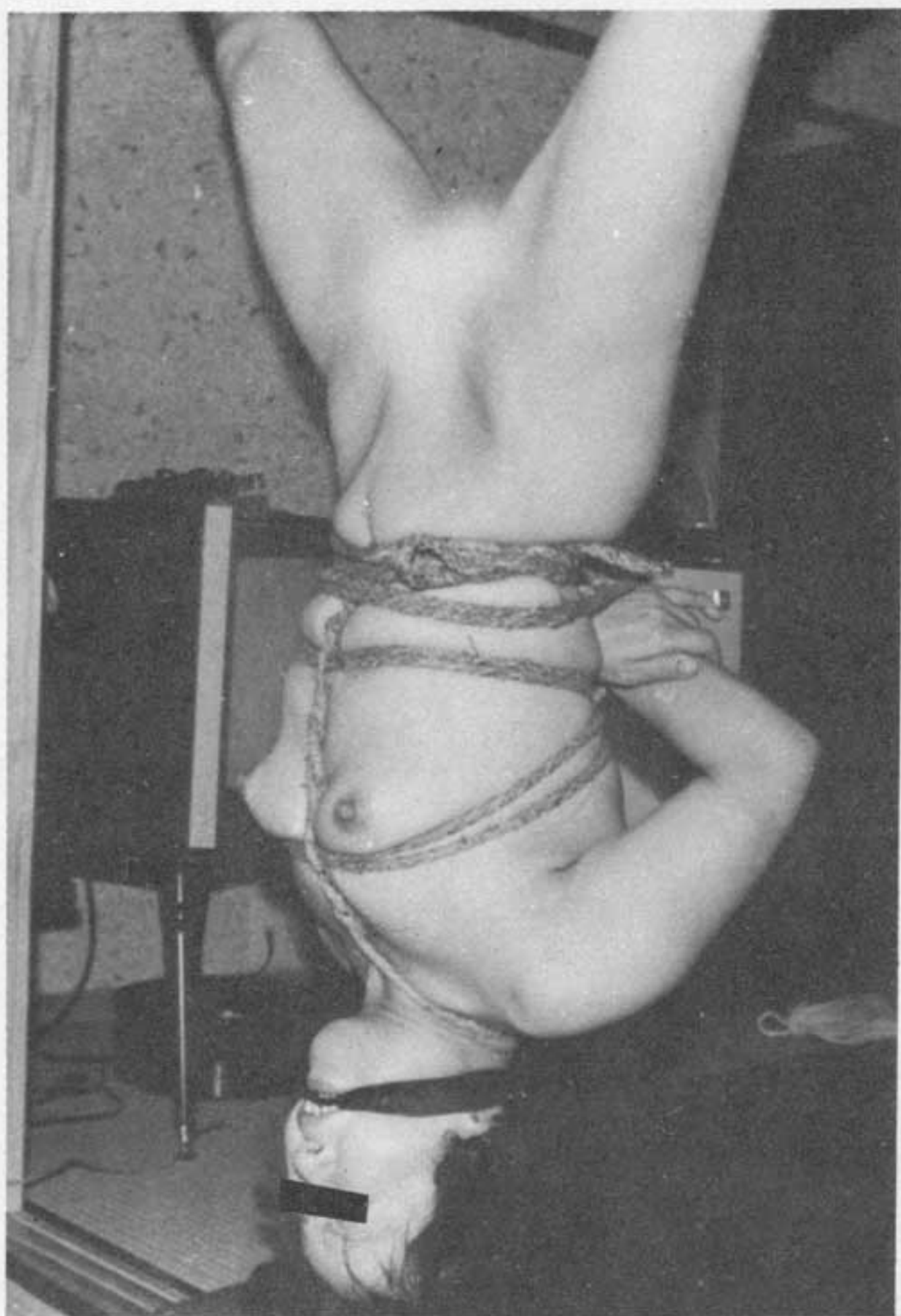
和田鋭二 奴隷妻誕生



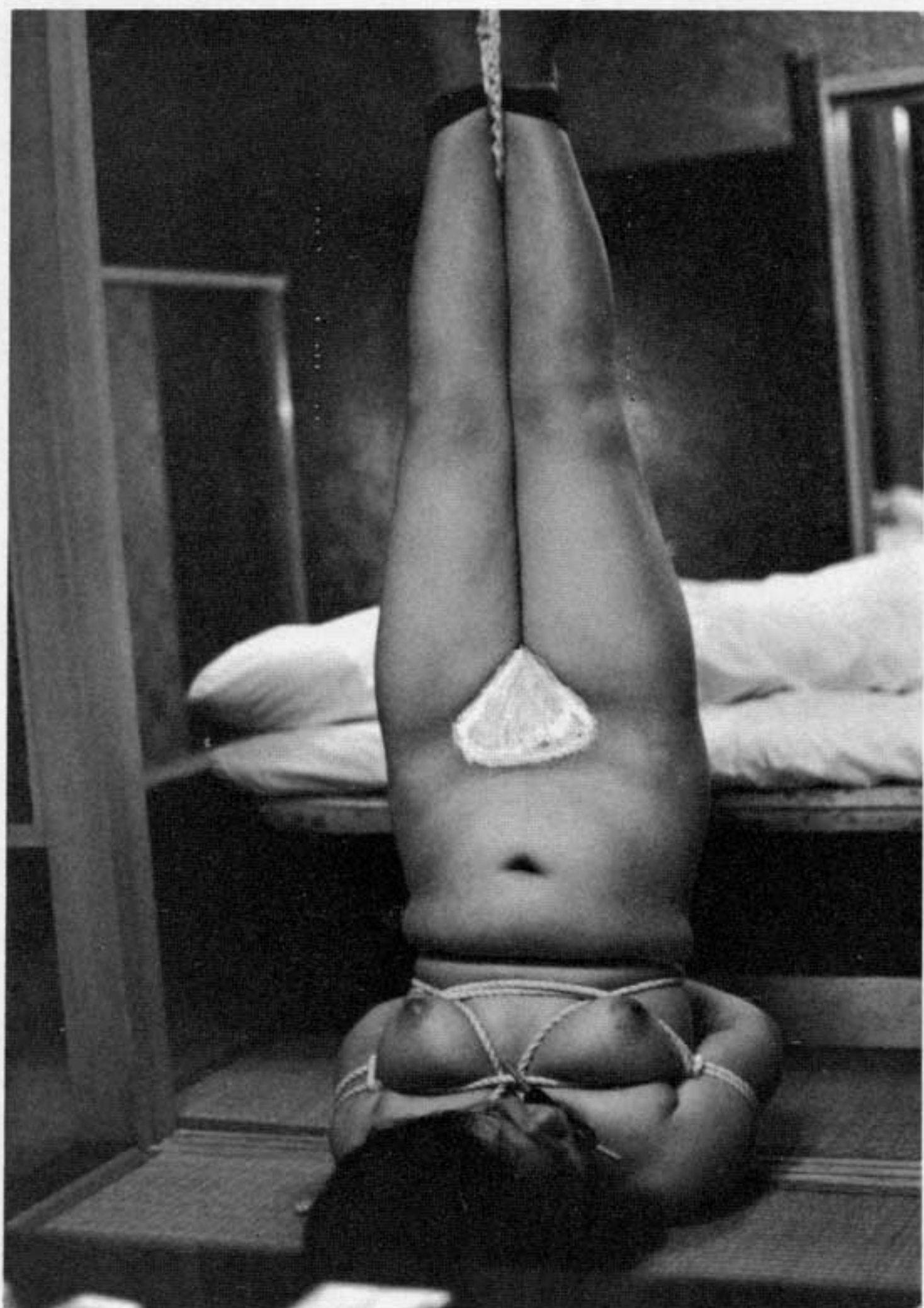
西に棲むM女・I

PART 3





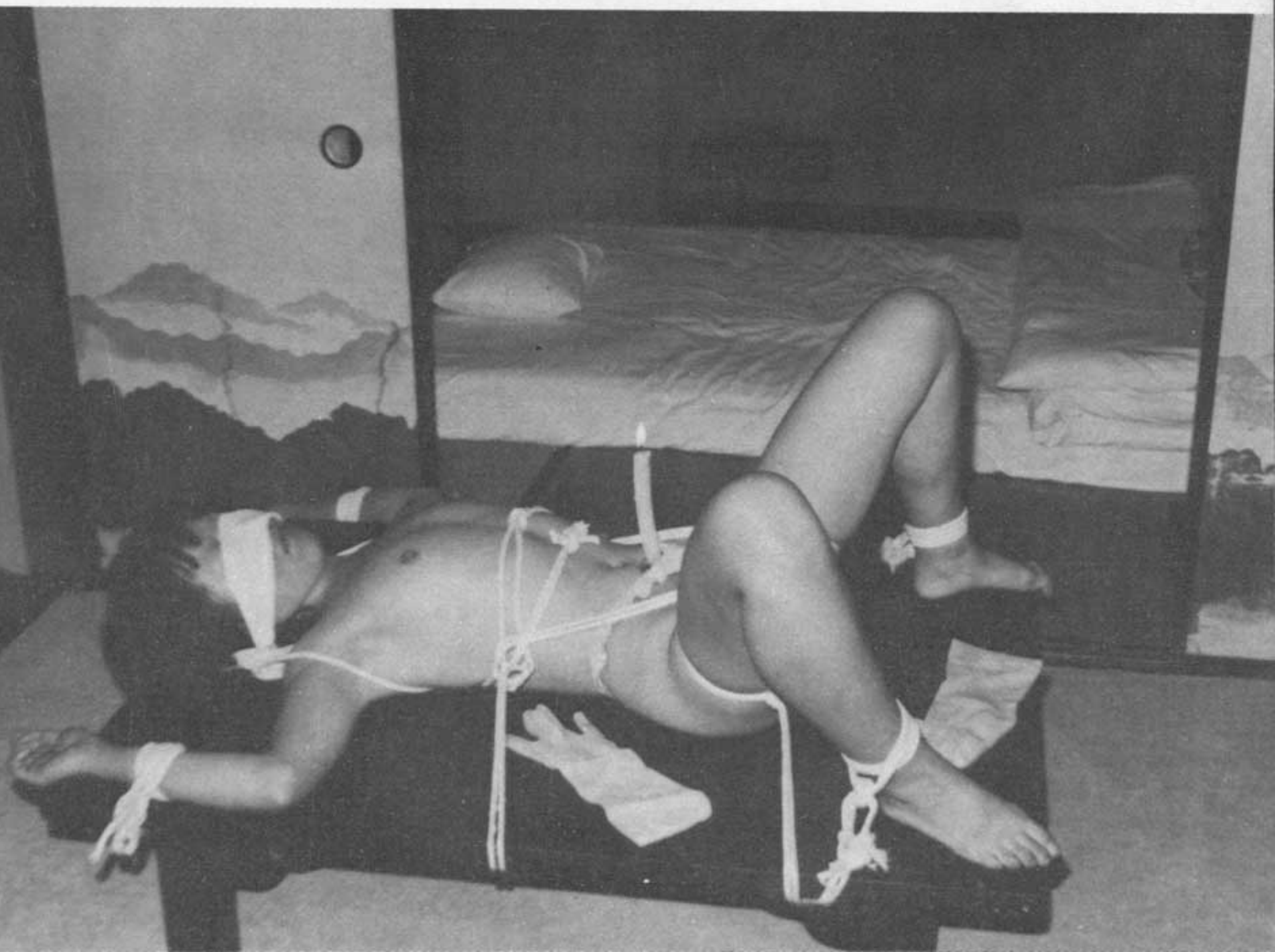
読者提供フォト集

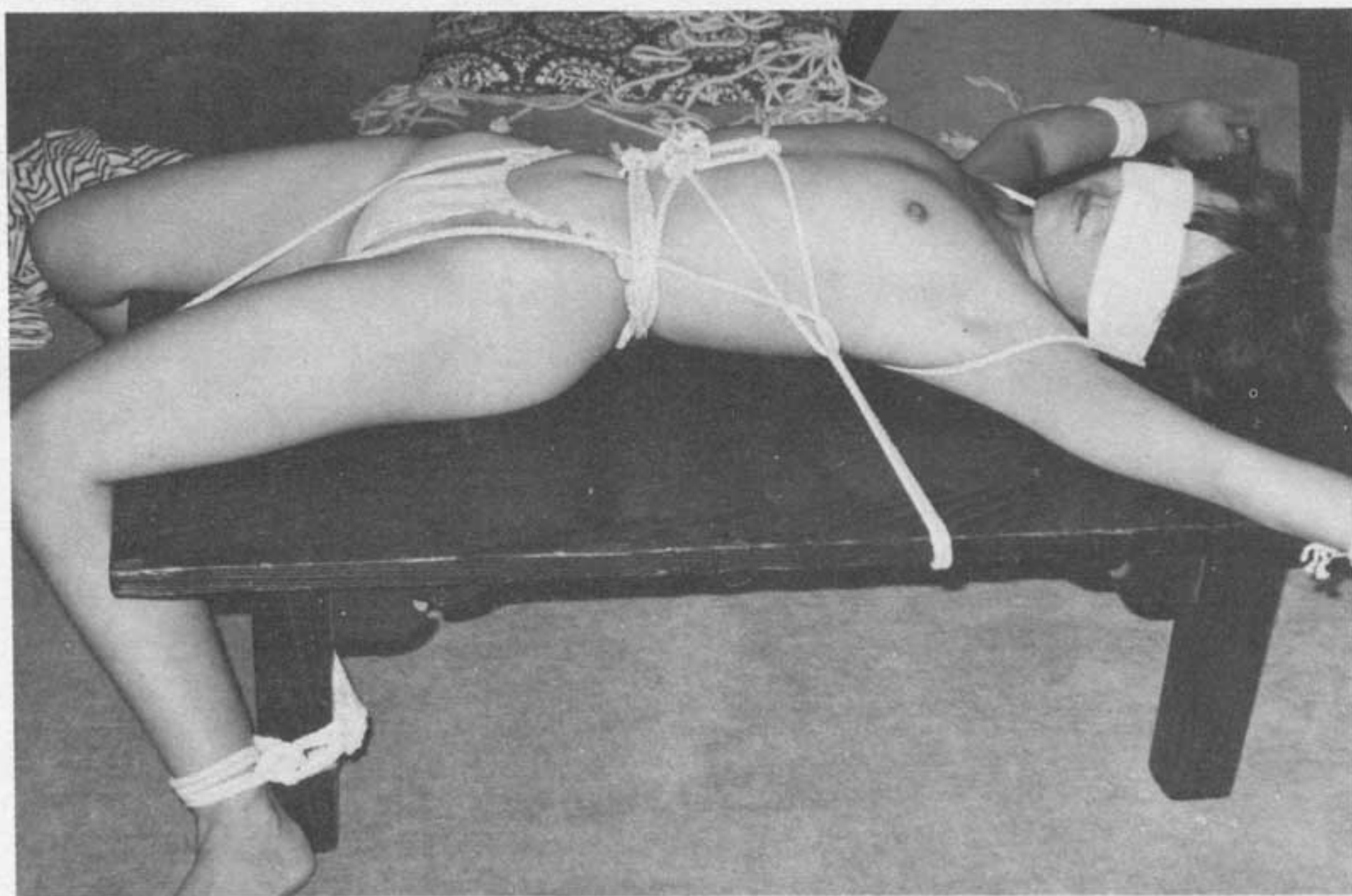
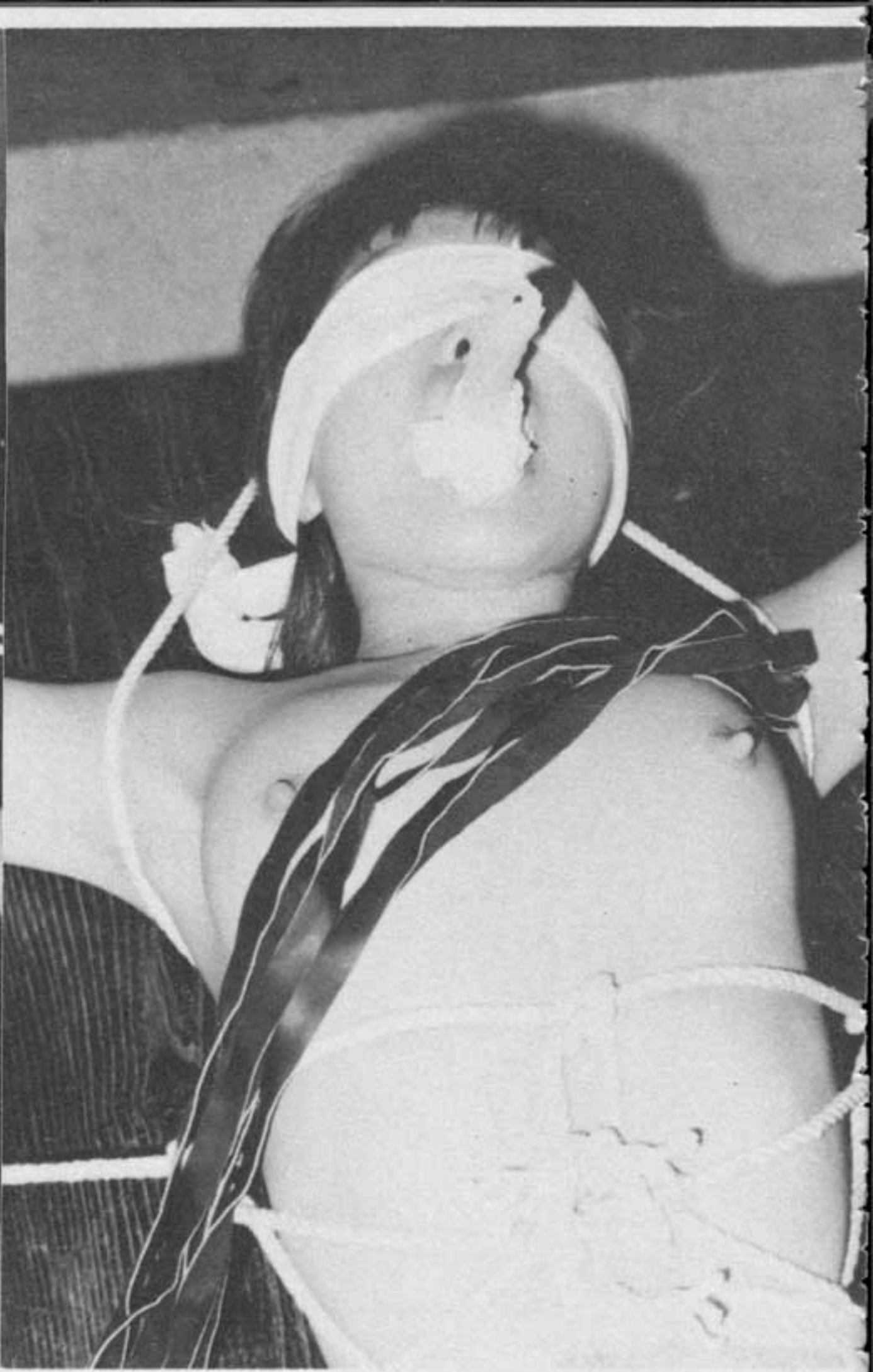


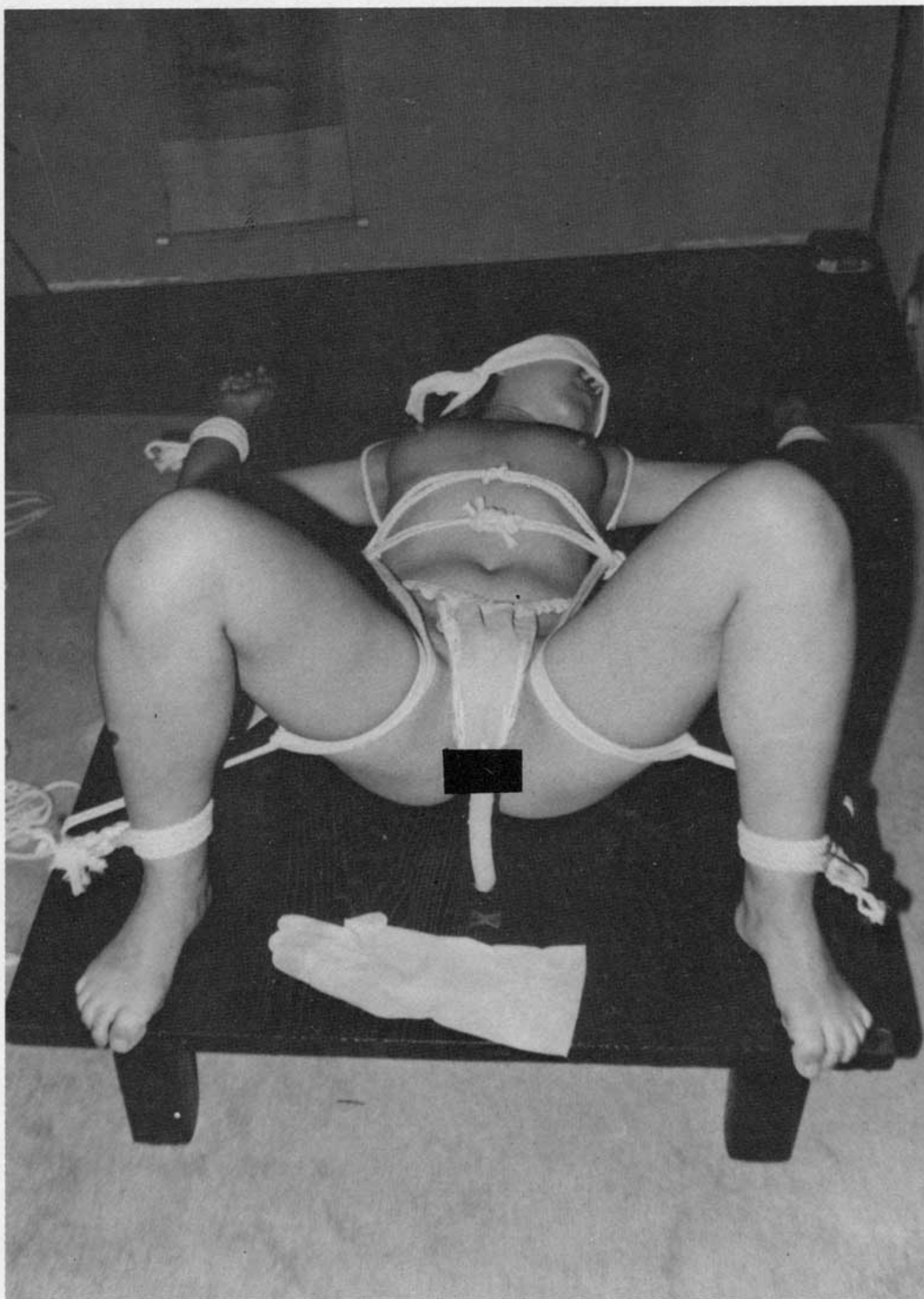


私がニコよ…

PART 2







私のSMプレイテクニック

その2 逆吊り

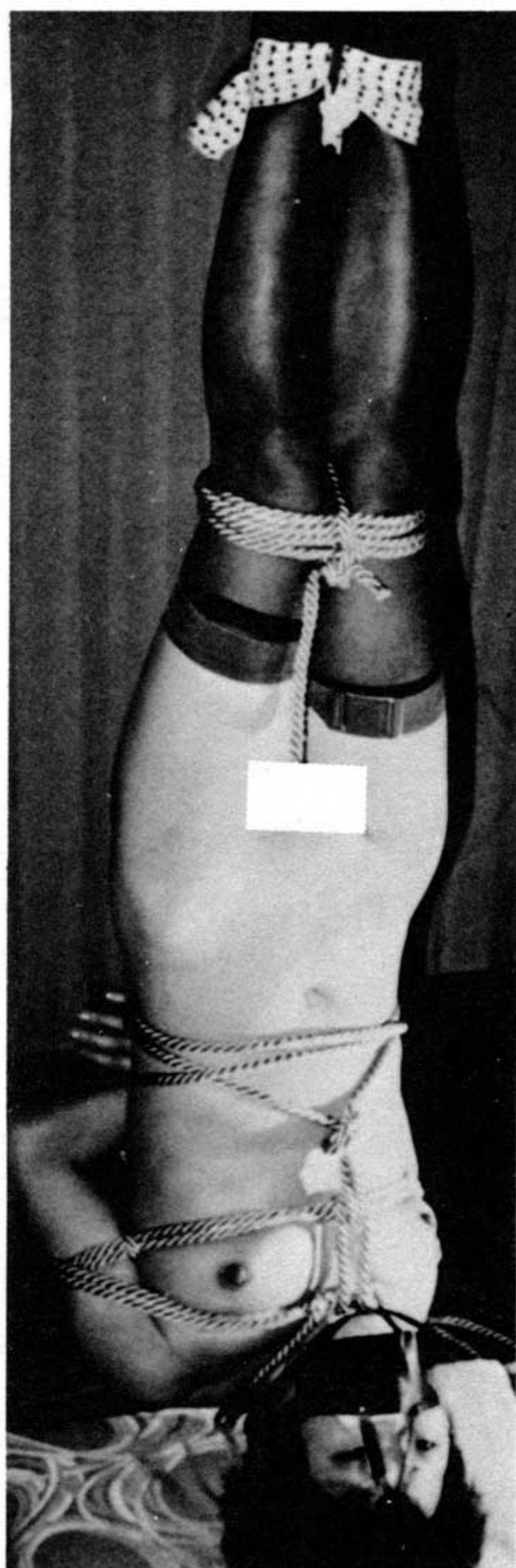
ロマン派生

前号に「駿河問ひ」のテクニックを大公開したが、果してお解り頂けたかどうか心配である。どうか素直な御意見をおよせ頂きたい。

この雑誌は、マニア同志の連絡の場だと思うので、皆が自由に発言してこそ、その存在価値があると思う。私のテクニックシリーズは必ずしも、十分に資料を用意して書いたものではないので、写真も、そのテクニックを説明する為には適切とは云えないものもある。私が多貫欣氏のように画才に恵まれていたら、イラストを駆使して図解するのだが、どうも小学校以来図画は苦手だったので、間に合わせの写真とたどたどしい文章で説明せざるを得ないので、解りにくい所は読者の想像力と旺盛な研究心で補なって頂きたいものである。さて、今回は「逆吊り」の巻だが、これも我マニアにとって誠に魅力的なテーマだと思う。逆さに吊られた女の姿というのは、なんとも痛々しく可哀そうなのだが、それがどういうわけか、我々SM人士の胸をジーンと締めつけて来る。私は映画などで逆吊りのシーンを見ると急にソハソハして来て、いつの間にか、あらぬ所に手が行っていたりする。また、自分で逆吊りのプレイをする時も、いざ彼女を逆さに吊り下げると、すっかり上

気してしまい、そばにあるカメラが見つからなくなつてウロウロしたり、ピント合わせを間違つてピンボケ写真を撮つてしまつたり、我れながらだらしなない状態になってしまう。逆吊りにされた彼女と、そのままではなにするわけには行かないのだから、単純な意味でのセックスアップीलとは違うのだが、しかし、矢張り或る種のセクシャルな興奮を強烈に呼び起す。

一方逆吊りにされた彼女の方にも或る程度の興奮があるらしい。生まれて初めて吊られた時は、怖ろしさと足首の痛みで夢中になり何もわからないうちに、何回か吊られると怖ろしさも薄れて多少の余裕も出来てくると共に、自分の全くどうしようもない状態が自分で或る種のいとおしさ、ナルシズムを生ずるらしい。前に私が逆吊りにしたある経験豊かなマゾ女性は、逆吊りにされた自分の姿が鏡に写っているのを見ると、自分ながら、美しく可哀そうに見えてホレボレすると云っていた。正にナルシズムではないか。この時、しばらく逆吊りにされていると、頭が充血してポーツとしてくるようだが、失神しそうな或る種の快感があるらしく、恍惚とした表情になつて来る。逆さ吊りこそは、責める方に



はもちろん、責められる女性にとっても一つのピークではないかと思う。

しかし、そうだからといって、無暗みと逆吊りを行う事は甚だ危険で、下手に落下させたら、首の骨を折って命にかかわるおそれもあるし、また足などに大きな怪我をさせてしまったら、プレイなどと云っていられない。逆吊りをする時は、先ず絶体安全を確保した上、女性にあまりひどい苦痛を与えないような縛り方を工夫する必要がある。更にその上その逆吊りの姿が美しくならないと意味がない。こういう点に十分配慮すれば、案外と女性も怖わがらなくなりそれほど嫌がらないど

ころか時には、大変協力的になるものである。

一般に女性を吊り責めにする時、逆さ吊りが一番苦しそうに見える。しかし、実際には逆さでなく、頭を上にした方が肉体的には苦痛が多いものである。両手を頭上に交差し縛り、手首で吊すのは、一見容易なようだが、実際には極わめて痛いもので、軽量な女性でも、せいぜい十秒位しかもたないものである。胸を縛った縄で吊すのは、それよりやや楽だが、これも見た目よりはずっと苦しいらしい。一番楽なのは、背中を下にして水平に吊るやり方だが、これは見た目があまり美しくくない。これを裏返しにしたのが、前号

で説明した「駿河問ひ」である。この駿河問ひは前に述べたように意外と苦痛が少ないものである。

逆さ吊りは、頭が下にあるので心理的な恐怖感はかなり強いが、苦痛は足首だけで、頭を上にした吊るよりは、はるかに少ない。そこで、足首の縛り方を工夫することが先ず大切である。美的な観点からすれば、足首を縛るのは縄が最も良い。しかし、あまり柔らかい縄は丈夫さに心配があるし、あまりにこっつい縄は足首を痛める怖れがある。よほど軽量な女性でなければ、縄で吊るのはむずかしい。女性に甘いロマン派生としては、仲々縄で吊すと

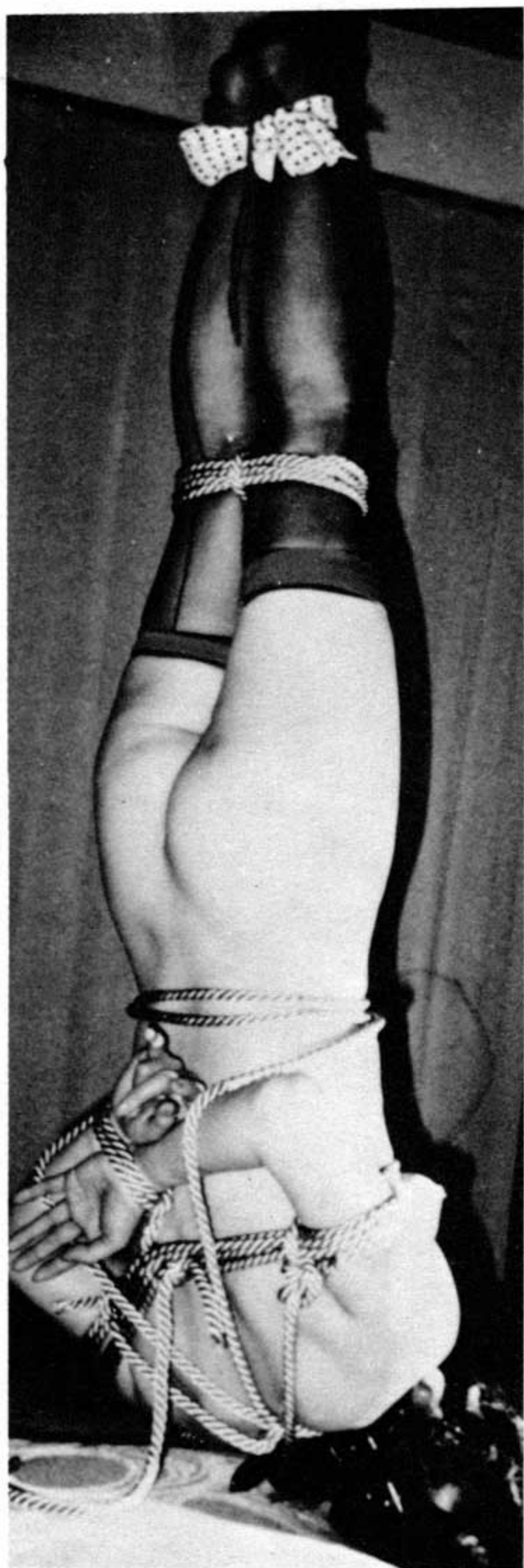
ころまでふん切れず、いつも、手拭で足首を縛り、そこから、登山用補助ロープを使って吊すことにしている。木綿の手拭をキチンと折って足首に二回ほど巻きつけて縛ると、強度もかなりある上、巾が広いこともあって、あまり局所的に力が加わらないので、足首の痛みが少ない。見た目はあまり綺麗とは云えず、いかにもフェミニストの縛り方といった印象を与えてしまうが、この際じつと知らぬ顔の半兵衛で話を先にすすめよう。

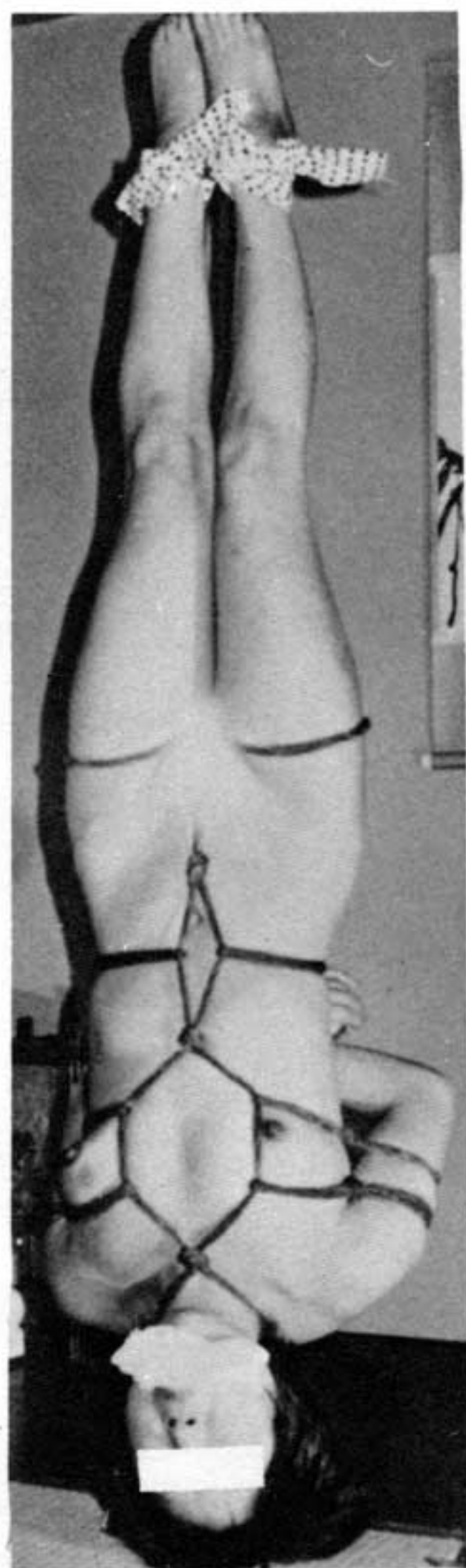
この足首を縛る時に両足を揃えて一本の手拭でぐるぐると巻く方が見た目には良いのだが、こうすると両足のくるぶしとくるぶしが

ぶつかって痛いと言えられることが多い。両足首の間に、小さく畳んだ布切れとか、綿などを挿入しておく方が良いが、これを吊っているうちにずれてしまうことが少なくないので、その辺を十分注意する必要がある。

写真①及び②の足首は、まさに両方一緒に縛り、その間に脱脂綿を挟んで吊り下げである。この時は、かなり注意して縛ったつもりだったが、時間にして五、六分位で、足首の痛みのため逆吊りをやめておろしてしまった。折角の美しい女体を落着いてゆっくり鑑賞出来る余裕がなくて残念だった。何しろ写真

をとるのに夢中で、折角の実物を見るより、ファイダーの中の彼女の印象しか頭に残っていないのだから、よっぽどいそがしかったらしい。ここで、手拭いで両足首を縛り、その手拭いに丈夫なロープを通して縛ると書いたが、この写真ではロープは両足の間を前後に通して、手拭と直交するようにかけてある。極く自然に縛ればこうなるわけだが、最近外国の縛り雑誌の逆さ吊り写真を見た所、あちらでは、足首を揃えて縛った上、足の甲のの部分にだけ、別の縄を通して吊している。すなわち、踵側の縄には、吊縄はかかっていないことになる。こうすると、足首の縄が





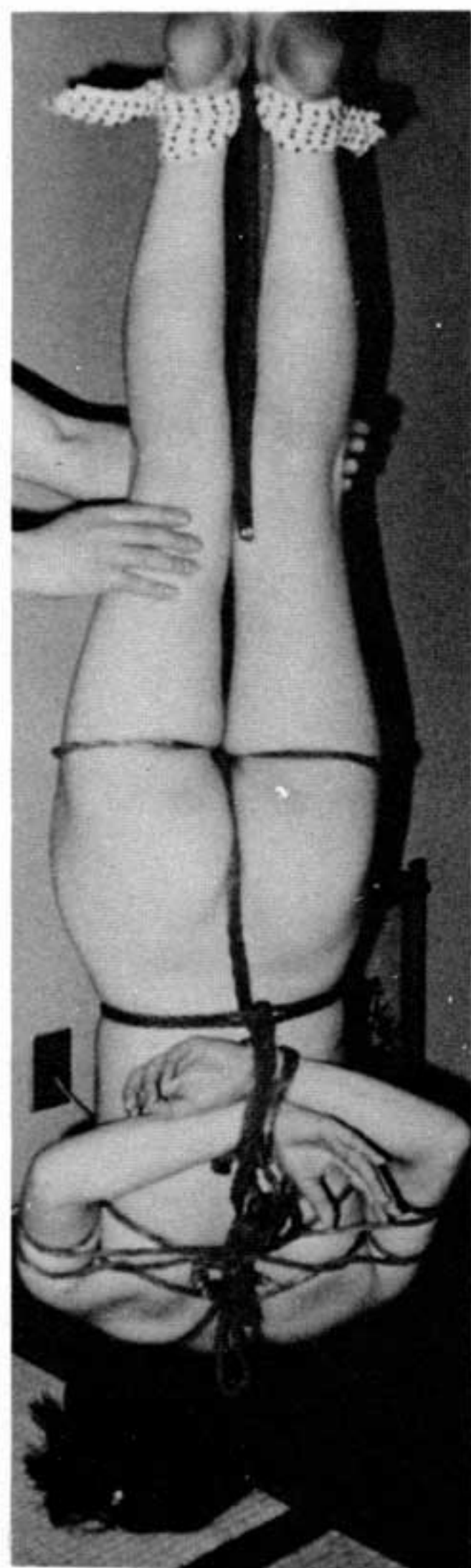
甲の方だけに力が加わるので、ゆるんで来たら足首が抜けやしないかと気になるが、踵につかえるので多分大丈夫なのだろう。ゆるんで脱ける心配は多少はあるが、このように縛った方が、くるぶしとくるぶしのぶつかるところが少なくなり、足首の痛みが減るのではないかと思う。某誌の濡木氏の逆さ吊りでは、あらかじめ縄で輪を作っておき、そこに女性を逆さにして、足首をはめ込むそうだから、多少足首の縄はゆるくても大丈夫らしい。足首の縄の前面にだけ吊り縄をかけるやり方はまだやったことがないので、次の機会に是非やって見たいと考えている。

写真③と④は、①②とは違って、左右の足首を別々の手拭で縛り二本の吊り縄を使って吊り下げである。一寸、写真ではその違いが

はつきりしないかも知れないが、そこは空想力で補って欲しい。何故そんなことをするかというと、両手足を別々に縛った方が、女性にとってずっと楽だからである。両足首がぶつからないことと、僅かながら、左右の足を別々に動かせると、痛みがかなり違うものである。この時は、おそらく十分位は吊っていると思う。手拭が一本余計になり結び目が少し目障りだが、両足をキチンと揃えれば、手

拭いを一本使ったか、二本使ったか一寸わからなくなるので、まあ良しとして欲しい。この際、左右別にとりつける吊り縄の長さは、厳格に同じ長さに揃えておかenないといけない。若し長短があれば、当然短かい方にばかり体重がかかって痛くて仕様がなない。まあ、最初に逆吊りをする時は、この両足首を別々に手拭で縛るやり方が最も無難ではないかと思う。このように左右別々に縛っておくと、次に両足開きの逆吊りに移行することが極く簡単である。

写真⑤は、別の時のものだが、両足をひきはなして吊れば開股逆吊りとなる。この写真は写す角度も悪くて、左右に開けた足と足の間隔が狭いので、残酷感がやや薄いようだ。本当はもっとと広く開股した方がずっと美しく



く見えるものである。しかし、大きく開けば開くほど、足首の痛みが強くなるのは物理の法則の通りなので、気の優しいロマン派生氏としては、あまり強烈な開股吊りが出来ない次第である。それにしても、もう少し広げればよかったな。残念！

さて、ここまで、もっぱら足首の処理に話が集中してしまったが、もう一つ肝心なことがある。それは、どうやって安全に吊すかという点である。

まず吊す場所を選ぶのは当然である。当節のラブホテルの鴨居など、見掛けは立派だけど普請がいいかげんで、うっかり吊すと折れ

たり外れたりすることがあるので、まず自分で両手でぶるさがり、二三度ゆすってみなくてはならない。壊れそうならばもちろん避けるが、大丈夫そうでも、ふすまなどをとり外すと、妙にしなるような場合は、見た目が悪くても、ふすまを外さずに使った方がよい。逆吊りにする時、こちらが二人居れば何かと仕事は楽だが、まず一人でやることが多いので、その場合の手順を考えてみよう。

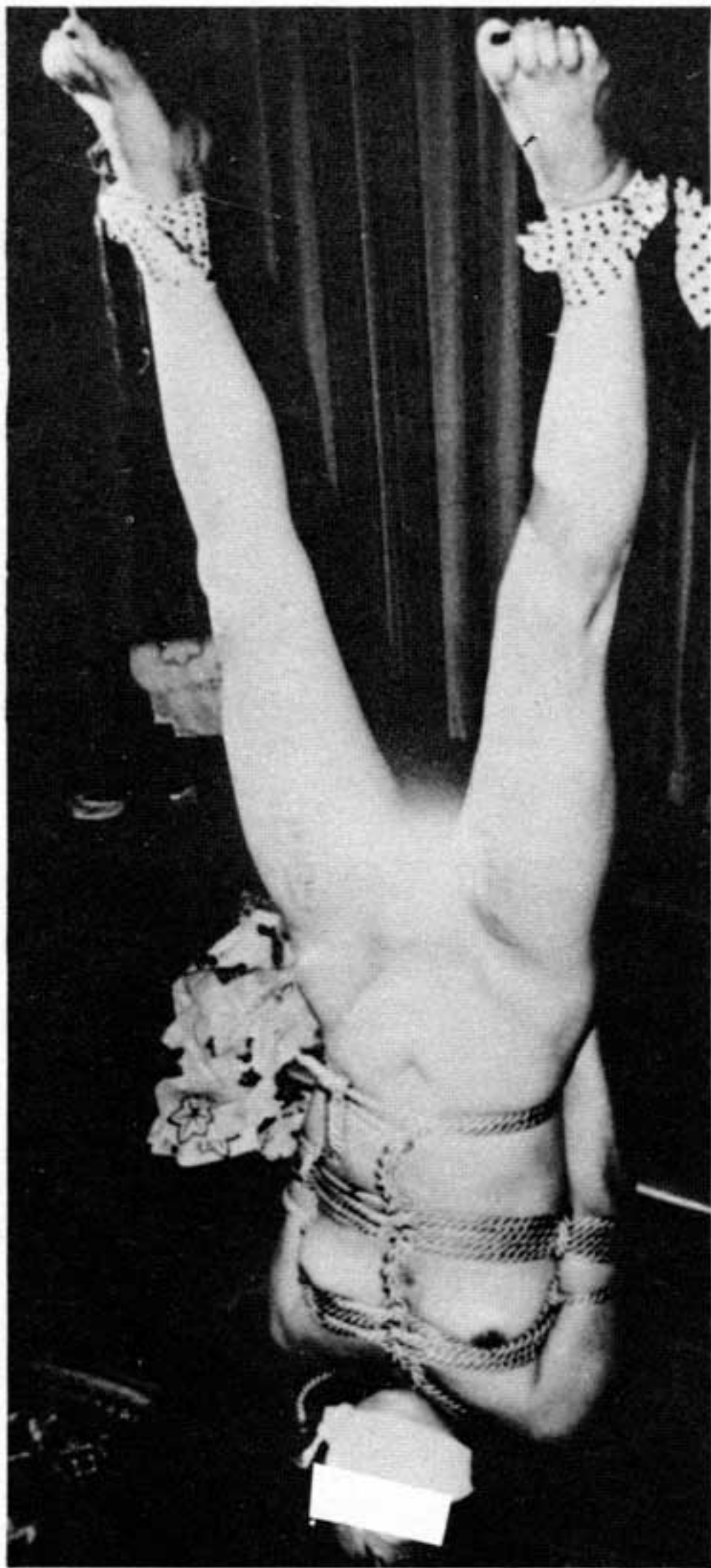
まず吊すべき鴨居などに、短い丈夫な縄で二巻き位強く縛ったものを用意しておく。これは、女性の足首からとった吊り縄をひっかける為のものである。足首からの縄を直接鴨

居にかけるのは、重量かかっている時には、意外にむずかしい。結びつける操作が大変でゆるみやすい。そこで私は、登山用のカラビナというのか、丈夫なリングのようなものを利用してゐる。このカラビナに登山用補助ロープを一米位結びつけたものを用意してある。

このロープのカラビナのついていない端で足首の手拭に連結し、長さを適当に調節しておく。そして足首を持ち上げて、ロープの端についているカラビナを、前に用意した鴨居の縄にカチンとはめ込めば一瞬にして安全確実に固定出来るし、とり外す時も、そんなに力はいらない。この辺は適当な写真がないので説明だけではわかりにくいと思うが、要するにカラビナを上手く使って固定するという点がミソなので、後は読者の絶大な想像力に期待するより他はない。

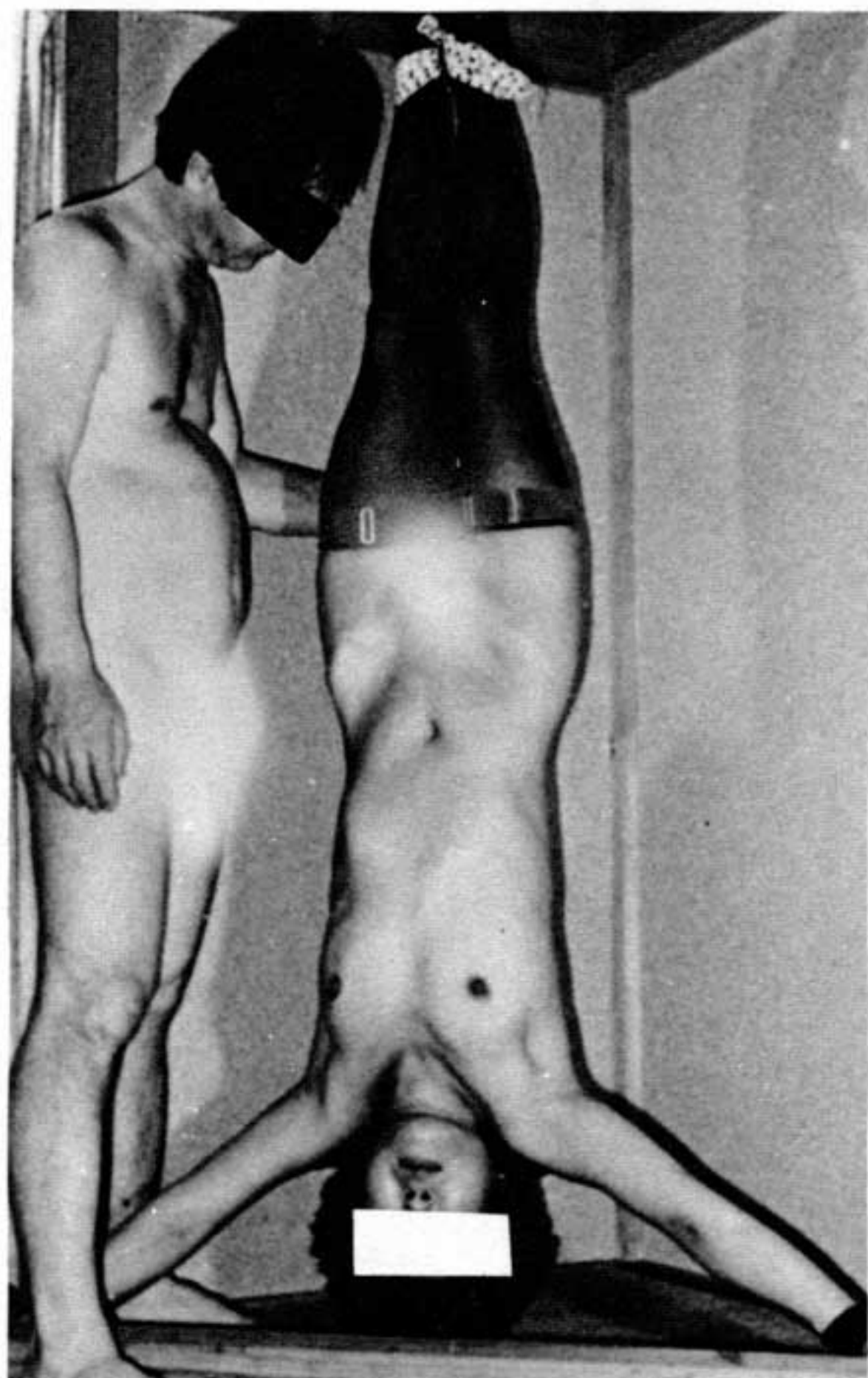
こうすると軽量な女性なら、自分が抱え上げ、片手で吊り縄を固定することが出来る。もちろん降す時は、もう一度抱え上げて、カラビナを外せばよい。

ややグラマーな女性の場合は抱え上げて片手で操作するのは一寸むずかしい。こういう時は、テーブルの上にテレビなどを載せて、一米位の高さの台を作り、これに座布団を一枚





載せておく。これに縛った女性を仰向けに寝かせ、足を上に挙げさせる。少し吊りあげ気味に足を伸ばせば、ほぼ鴨居の高さまで上るから、そこでカラビナをあらかじめ用意した所にカチンとはめ込む。そして台をとり除けば良いわけである。この際一枚敷いておいた座布団がよい具合に滑って台と女体とがうまく分離する。降ろす時は、むしろ座布団はない方が滑らないのでかえって安全である。これ



で殆んどの場合上手く行くので、私は滑車とかチェインブロックの類は使ったことがない。しかし野外などで高々と吊るには滑車やチェインブロックを使った方が安全で楽かも知れない。

次に加害者側が二人以上居る時はもっと色々なやり方が出来る。一人が抱きかかえて一人が縛ればよいのだからさほどむずかしいことはいらないが、それでも鴨居にかけた縄はややもすると伸びたりほどけるから十分に注意する必要がある。あまり長い縄を使わず、何回もぐるぐる巻かないで簡潔にキチンと縛

る方がしっかり縛れる。

二人で吊る場合に割に簡単で上手くやるには補助棒を使うと良い。これはあらかじめ二米ほどの長さの丈夫な角材を用意しておき、この角材に女性をきっちり縛りつけてから二人でこの角材をヤツと持ち上げ、あらかじめ用意しておいた所に引っかけるというか、載せるというか、とにかく固定すればよい。

写真⑥は女性を寝かせておいて手足を補助棒に縛りつけた所である。この時は手を広げて逆さ磔の形にしてみた。このように寝かせ

てゆっくり縛れば縛り目に不安はない。このようにしてから、足の方の棒を二人で持ち上げ長押しに三角に引っかけたのが写真⑦である。こうすると鴨居など適当な吊り場所がない所でも、十分に逆吊りが楽しめるわけである。もちろん鴨居に吊り下げてもよい。この写真では、手が畳に触れているのが一寸惜しいが、彼女にしてみればそれだけ安心感があるのか、かなり長い時間頑張ってその顔がポーツというんで来る所がなんとも云えず美しくかった。

写真⑧も全く同じ手順で開股逆吊りにしたものである。こちらの方は後手に縛ってある為、彼女の不安が強く、写真⑦ほど長時間は吊しておけなかったが、それでも五分以上は吊っておいたので、カラー写真だと顔面が紅潮しているのがよく解るのだが。

最後に一つ、余計なことかも知れないが、万一逆吊りの最中に縄が切れるかどうかして落下した場合、女性が首を前屈するようにして落ちればまず怪我はないと思う。特に室内での逆吊りは、せいぜい頭と床の間は数十セ

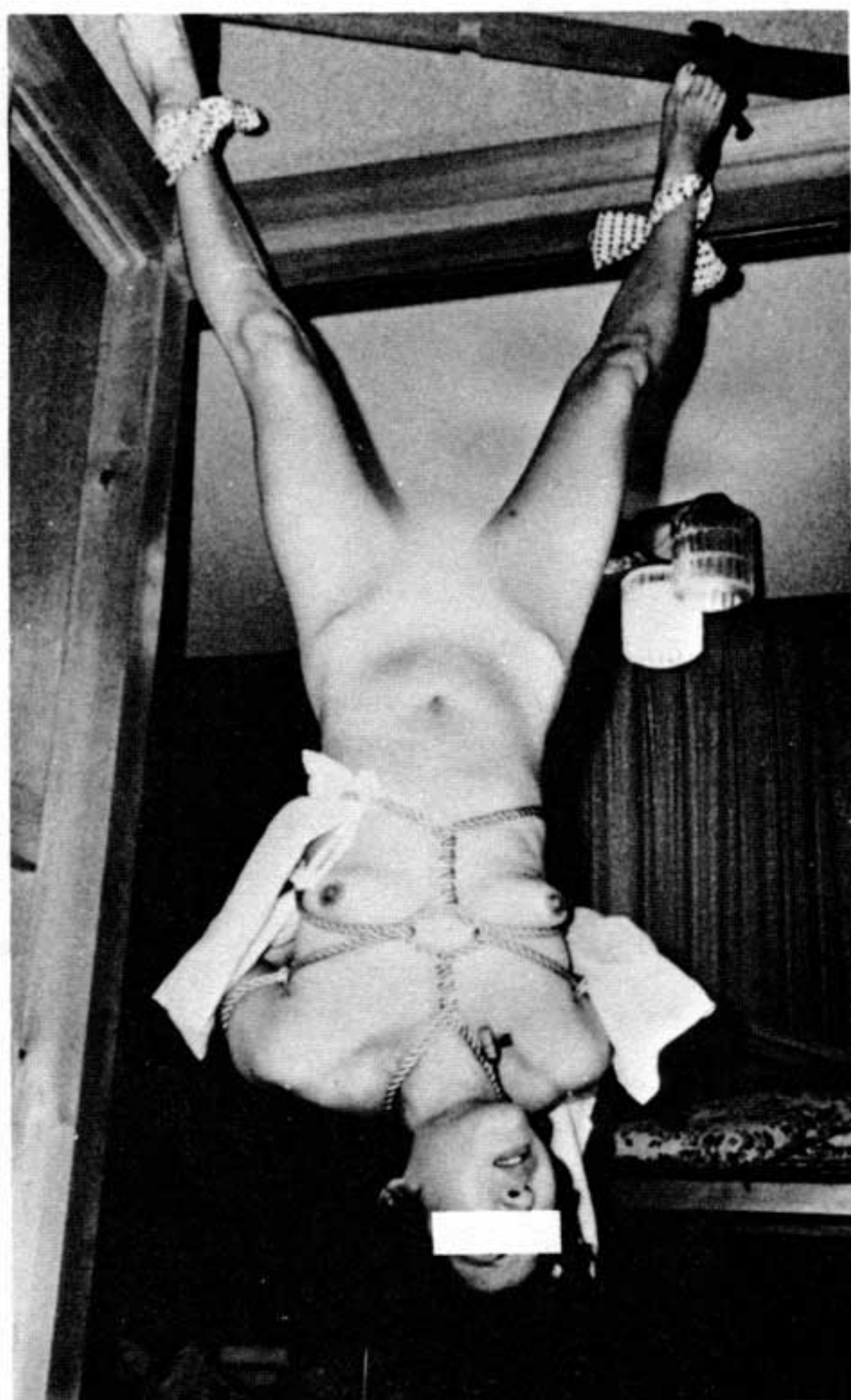
ンチにすぎず、首を後屈さえしなければ怪我はしない。それで、あらかじめ女性に「万一危ない時は首を前屈(お辞儀)しろ」と云っておくとよいが、あまりそれを云うとかえっておどかして、怖がらせることもあるので上手に話さないと不可ない。

少々くどい説明になったかと思うが、とにかく安全第一なので、あまり生半可にいい加減なやり方をしないで欲しい。キチンとやればそれほど危険なプレイではない。

今回のモデルは全部秋野英子さんである。今回は、変形吊りの巻を予定しているのでどうぞ御声援を!

——小さな提案—— 専属契約モデル募集

二号誌上に「初めてのSM写真」という標題のミニレポートを載せていただいた大岡光生です。誌友間で『写好』グループを作りませんか。また、私と個人的に専属契約してくれる女性モデルを募ります。詳しくは「日月舎・編集室」宛で回送依頼の便りを下さい。 埼玉 大岡



疑似分娩

睦月笛一郎

最近、久し振りで某ピンクショップを訪れた。此の店は婦人科の検診に使用する各種膣鏡や医療器具などが豊富に取り揃えてあることで有名だが、片隅には昔なつかしい活栓付きのコルポイリントルが吊り下げられてもいた。このコルポイリントルは、想い出がある。他誌にも書いた覚えがあるが再度、読者に訴えたいので紙面を拝借する。

筆者が以前、八戸に居住していた時の噺である。長男が生れたというので分娩室に駆けつけると、赤ン坊は新生児室に入れられた後で妻だけが寝巻をはだけた格好で低い分娩台に仰臥していた。東北の秋も爛けた夜更のことで、冷氣は耐え難いものがあつた。

すでに、医師と看護婦も引揚げてしまったらしく、がらんとした分娩室は妻の流した血の匂いだけが妙に生々しかった。

（産婦を病室まで運んで呉れ）と、いう当直看護婦の電話に腹を立てたものの今迄見たこともないグロテスクな検診台（現在では診療台と普通には謂われているがSM効果を上げるため、筆者は昔どおりの呼称、検診台で通してきた）や妻の載せられている分娩台を暫く好奇の眼で眺めるともなく眺めていた。

この分娩台の構造は妻が退院するまで、二回ほど、第二期の陣痛の起きた妊婦を看護婦に頼まれて分娩台に運んだので判ったことだが、顎にベルトを掛け、面脚は左右に拡げて自転車のペダル様のものを踏み、両手でワイヤーの付いた吊手を握る。

陣痛が強まるに従っていきみも強く、力一杯、ペダルを踏むとペダルに連結されたベルトが顎を頭上の方へ持ち上げる。これを緩めようとして左右の吊手を引くと、今度は伸

び切った脚が膝を曲げた姿勢に戻らされる。この繰り返しで段々、胎児が子宮から膣へと娩出されて来る。妻も面脚を拡げた格好で油汗を流しながらペダルを踏んでいたのかという感慨は、ずっと後で沸いて来たことだった。

妻を抱え上げたとき、医師が助産婦が掛けていたらしい黒いゴム曳きの前垂れに付着した鮮血が乾きもせず無影燈の光を受けて輝いているのを見て、淫靡な感情が一瞬、走つたのとゴミ入れの大きな罐の中に、ゴム風船のようなもの？ が血にまみれて投げ込まれていたのを覚えていた。

妻が男の子を産んで四日目だったか——紙屑を捨てるために裏庭へ出たとき、看護婦宿舎の棚の針金に三個、例のゴム風船が大小取り交せて吊られているのを発見した。

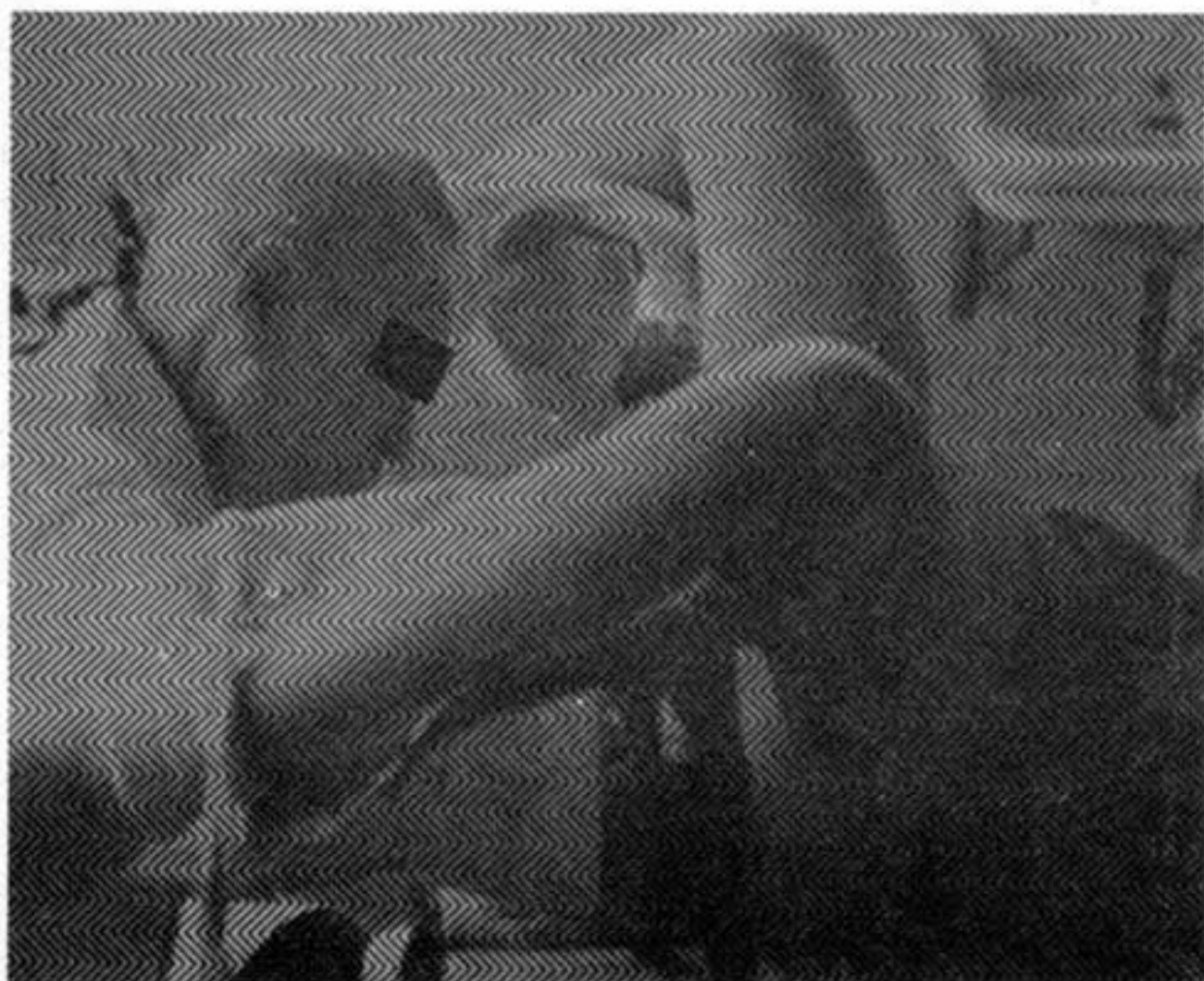
筆者は、見てはならぬものをみてしまったように眩ゆげに眼を細めた。しかし、そのゴム風船からどうしても視線を離すことが出来なかった。

（ゴム風船じゃないナ）

確かに、それは厚味のあるゴム球だった。

「近頃の娘達は仕様が無いねえ」

この近在独特の土地言葉で喚くような、老



模疑搔爬 長谷忠夫氏提供

婆の声に驚いて振り返ってみると、矢張り、ゴミを捨てに来た顔馴染の老家政婦が突っ立っていた。

筆者は、ゴム球が産科の中で、どのように使われるのか老婆の説明で初めて知った。無数養な女だったが、産科医院開設の頃から働いているとかで色々なことをよく知っていた。このゴム球の名称が（コルポイリントル）と、いうことも教えて呉れた。

分娩が第二期に入ると産婦のいきみにつれて胎胞を纏った胎児が子宮口に近ずき、胎胞

が破れると羊水の流出と同時に胎児が子宮口を通過して、産道に這入る。

しかし、胎胞が破れる時刻が早過ぎると羊水だけが流れて胎児は依然として子宮内に留まり、難産の一因となる。これを、早期破水という。羊水が子宮内から早期に流れ出してしまうのを防ぐために、例のゴム球——コルポイリントルを脹らませて子宮口を塞ぎ、圧迫するのだと謂う。

コルポイリントルは膣の広狭によって50cc刻みで五百から百五十ccまである。標準型のバルーンを始めとし、指定量以上に液が這入らないようにした網状のもの、押入に便利ないように折り畳める日□型、膣口だけを塞ぐハーフコルポなど多種多様である。

このコルポとは別に、子宮内に挿入して陣痛を促進したり、人工流産をさせるメトロイリントルがある。メトロはゴム球（バルーン）とバイオリン型があつて容量も最高百五十から八十ccまである。

コルポも陣痛促進のために、稀に直腸内に挿入されることもある。此処の産婦人科医院の若い看護婦同志がコルポイリントルを自身自身の中心に挿入し、浣腸器で液を入れたり、出したりのパistonを繰り返して、自慰を愉し

むのだと老婆は、いった。

老婆の嘸を聞いても、筆者はまだ半信半疑だった。この女は、看護婦達の性器と自慰のことを地方独特の方言で、汚なく罵った。何を思ったのか、老婆は柵越しにコルポイリントルのひとつを取って、筆者に手渡した。容量は、三百ccと記されてあった。小さな盗みに後ろめたさを覚えながら、筆者は口でゴム球に空気を送り込みながら、若い看護婦が奇怪な自慰を繰り返している光景を想像した。

コルポイリントルとは、これで縁切りとなった訳ではなかった。現在は廃刊になった関西の某誌に執筆を始めた頃、芦屋界隈の富裕な夫人達がコルポを利用しての疑似分娩プレイに励んでいるという便りを、その中のひとりから戴いた。

筆者が作中に前述の分娩台のことを書いた処、早速、小説ではなく本当に、そんな分娩台が実在するのかと真偽の問い合わせと同時にグループ四人で行なっているコルポイリントルを利用しての疑似分娩の実態を報告して来たものだった。

司会役？ は堂島にある某財閥系の指定バ—のマダムだった。某日、六甲山系の中腹にある屋敷に招かれて行ってみると女性は全部、

裸かだった。肉体の衰えを見せ始めた中年女
四人の裸か姿は壯観どころか、男の気持を白
けさせるのに充分だった。

疑似分娩プレイが始った。懸架に吊した千
cc.のイルリガートルのゴム管から妊婦役にな
った女性の中心部に挿入してあるコルポに液
が注入され始めた。液を内臓したゴム球は荒
れ果てた花片をこじあげようとしていた。

コルポの先端に重錘を付けて引張ると同時
に妊婦になった女性が全身でいきみを繰り返
して、体内のコルポを娩出しようとした。

汗みずくになって、疑似分娩という奇怪な
プレイが続いている女の顔は哭き笑いの表情
だった。それは、苦痛を超越して陶酔の境地
のように見受けられた。

花片を押し分けて顔を覗かせていたゴム球
は、突然、体外に飛び出した。

「ぎゃあーッ」

産婦役の女は悲鳴を挙げた。有閑夫人達の
詰まらぬお遊びだとプレイ中に考えていた筆
者も自慰が目的なのか、子供が欲しくてたま
らぬ執念が為せる業なのか、迷いだすとお遊
びと呼ぶには空恐ろしい鬼気を肌に感じた。

そうかと思うと、金銭か何らかの手段で連
れて来られたと思われる若い娘のアヌスにコ

ルポイリントルを挿入し、液の注入と同時に
苦痛のために哭き出す娘を冷酷な表情で眺め
ていたのを忘れはしない。

容量以上に注入されたコルポはアヌスの筋
肉を押し開き、そして引き裂き、鮮血を畳の
上に点々と滴していたのを、はつきり覚えて
いる。このグループは、常統的に疑似分娩プ
レイをやるのかと思うと、レスビアンで有名
な某女を連れて来たり、ブルーボォイに女装
させたうえで男性自身を露出させ、鬦りもの
にしたりした。

そのために、自然と縁遠くなってしまった
が悪いことばかりでもなかった。当時、ゴム
製の病人用オシメカバーはニシキが関西の一
部のデパートで売出していただけで筆者の手
に入りにくかったのを、彼女等が大量に購入
して送ってくれた。

ダンロップの大人用ゴムカバーについても、
バーのマダムの仲介で市販されていないのを
戴いたのが現在も一、二枚残っている。

筆者自身がS的な目的でコルポのプレイを
したことは一度だけがある。この女性は、
後藤さんといってオシメカバーフェチであつ
た。オシメカバーの装着、排尿、オシメの取
替えプレイに加えて、コルポの挿入を申し入

れると簡単に承知した。両脚を上げた無防備
の姿勢の後藤さんの中心部にコルポを入れ、
イルリガートルからのゴム管を接着し、注水
すると黄色いゴム球の根元が可愛らしい花片
の間から顔を出した。

後藤さんは時々、低い呻き声を洩らした。
只、それだけのことで責める方には、何のサ
ジスチックな感嘆も起きなかった。興を喪つ
た筆者がゴム管を狭み、コルポから水を抜い
たとき、後藤さんは白い歯をみせて大きな嘆
息をつき「もっと、続けて欲しいの」と、い
った。筆者は始めて、コルポイリントルの効
用を知った。

話は大方、横道に逸れたが筆者が医療用の
器具を利用したプレイを書くに至って花盛り
となったが、コルポを利用したプレイが聞え
て来ないのは淋しい。しかし、ピンクショツ
プでのコルポイリントルの売行きは必ずしも
悪くないらしい。

何処かで隠れたコルポマニアが隠れたプレ
イをしているなら、本誌のためにも名乗りを
挙げて欲しいものだ。

質問歓迎

SMP 雑感

鈴井是雄

縛り方にもいろいろあって、完全にマスターするには骨である。他人の縛ったのを批判することは、大変楽でありたのしい。が、己がいざ一本のロープで、女体を縛るとなるとなかなか頭の中で描いた様にはいかない。

たんなる撮影のための緊縛であれば、多少技術的にも、ごまかしがきくが、SMPともなると、これは大変な問題となってくる。

片や不動、こなた可動的な行為であることが根本的に違っているから、市販されている各種SM誌の如く華麗にはいかないし、又仮に縛りあげてもプレイは、不可能に近い。

私が、愛する性奴に、実験した結果得た答である。SMPの終焉は、男女の接合であり通常、(私は区別していない)男女間で行われる愛撫と同一であるとすれば、たとえ、がん

じがらめにしばられた女でも、己が、肉体のセクシャル・ポイントを長時間責められれば、かなりな動きがともない、自分では、納得して縛りあげたはずが、いつのまにかゆるくなっていた。この様な経験は、SMPの愛好者ならどなたもおもちのことではなからうか。

縛る事のみで熱中していると、大変な事を忘れてしまう。私自身、再三、性奴に頭を下げるはめになった。ロープで女体を縛る、この事に夢中になって、二十数年、未だに縄さばきに自信のない私は、SMPであるとかかってはいても、手加減のない縛りをするので、プレイの最中に、手指のウツ血にはっとする事たびたびである。

縛りあげてはみたものの、手首、足首の絞り具合がゆるいのは、なんとも頼りなく、つ



いついきつく締めあげてしまう。

性奴の哀訴であわてて気のつく始末、これでは、プレイも中途半端で切りあげる事が度。さて、どうしたものかと思案の末に、考え付いた最良の作をひとつ御披露致します。

使用するもの、古いネクタイ、これはあま



り柄の入っていないダーク調のもので、特に材質は絹のものがよろしい。出来ればシルクのブラックタイが最良です。これですと男の力で思いつ切り縛りあげても見た目程被縛者には苦痛の少ないことが判明しましたし、被縛感もあります。フォト①を参考。

二本のネクタイを結び合せ一本にし、乳房

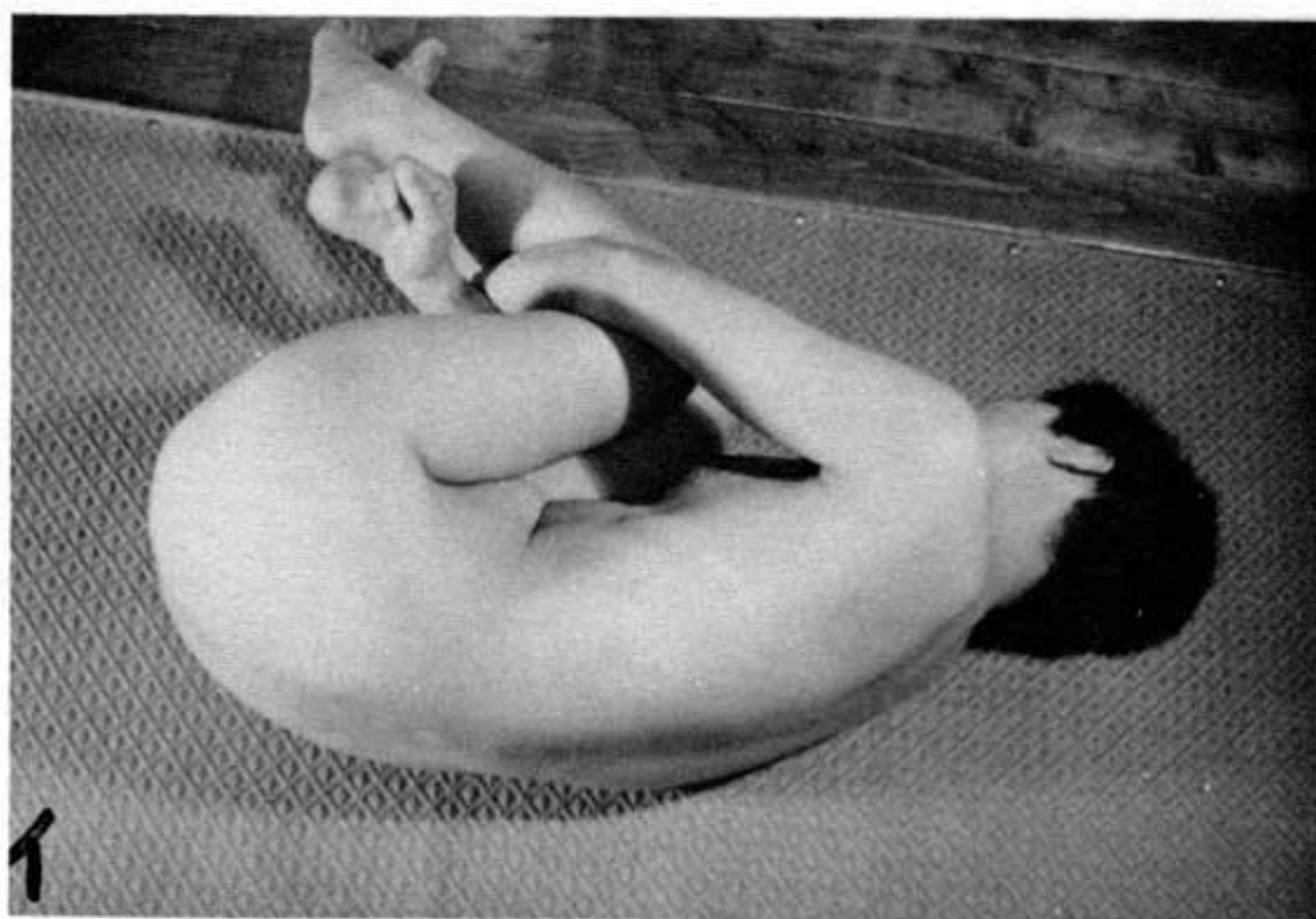
の上部よりまわして、上膊部「高手」を半周乳房の下でとめます。結び目が気になる場合には背時にまわします。余りで手首を縛って出来上り。この方法の最大のメリットは、性奴をどの様に扱っても肌が痛まない事、縛りを解いた後、肌に「縄目」？ならぬ「縛跡」がロープ同様にのこっている点でしょう。

デ・メリットは、只一つ使用するものが高価になってしまう点。ですが、己が首をしめるもので女体を拘束するというのも面白いものです。諸兄には、一度おためし下さる事をおすすめします。

深く、静かに、己がプレイに専念するという事は、とかく、他のものが目に入らないこととなります。何も真似をしたりすることも無いとはおもうもののやはり気にはなります。何が？と、問われても明確には言い切れませんが、やはりなんとなく何かが、その何かが得られた場合に、案外つまらなくなるかも知れませんが、現在は、その何かに向って一生懸命孤軍奮闘中であります。

何んとはなしに話がそれました。元にもどして、タイ使用の縛り方をもう一つ、二つ。

其の一、胸部「前面」に邪魔なもののないのが身上の縛りが、必要な時にはこれが最良。



左右の腕の上膊部を背骨が中心になる様に交叉して絞りとめ、手首を思い切り中心点近く引き上げる。この時にもっとも注意していただきたいことは、間違っても上膊部にずれるからと一卷しないことです。これをやりますと、手首を引き上げるとき、被縛者に悲鳴をあげさせることになります。プレイも長時間

は無理です。フォートの撮影のみならいいでしょうが、私は用いません、失敗は成功のもとを痛感。フォート②

ここまで来て思いつき前の稿を読み返す、竜頭蛇尾だ、矢張り自分の文才の無さを知り少々嫌になりはじめる。性奴を喜ばすよりもむつかしい。だがここまで来たからには、引き返す訳には参らぬ。今少々の御辛抱を願っていざ進まん。

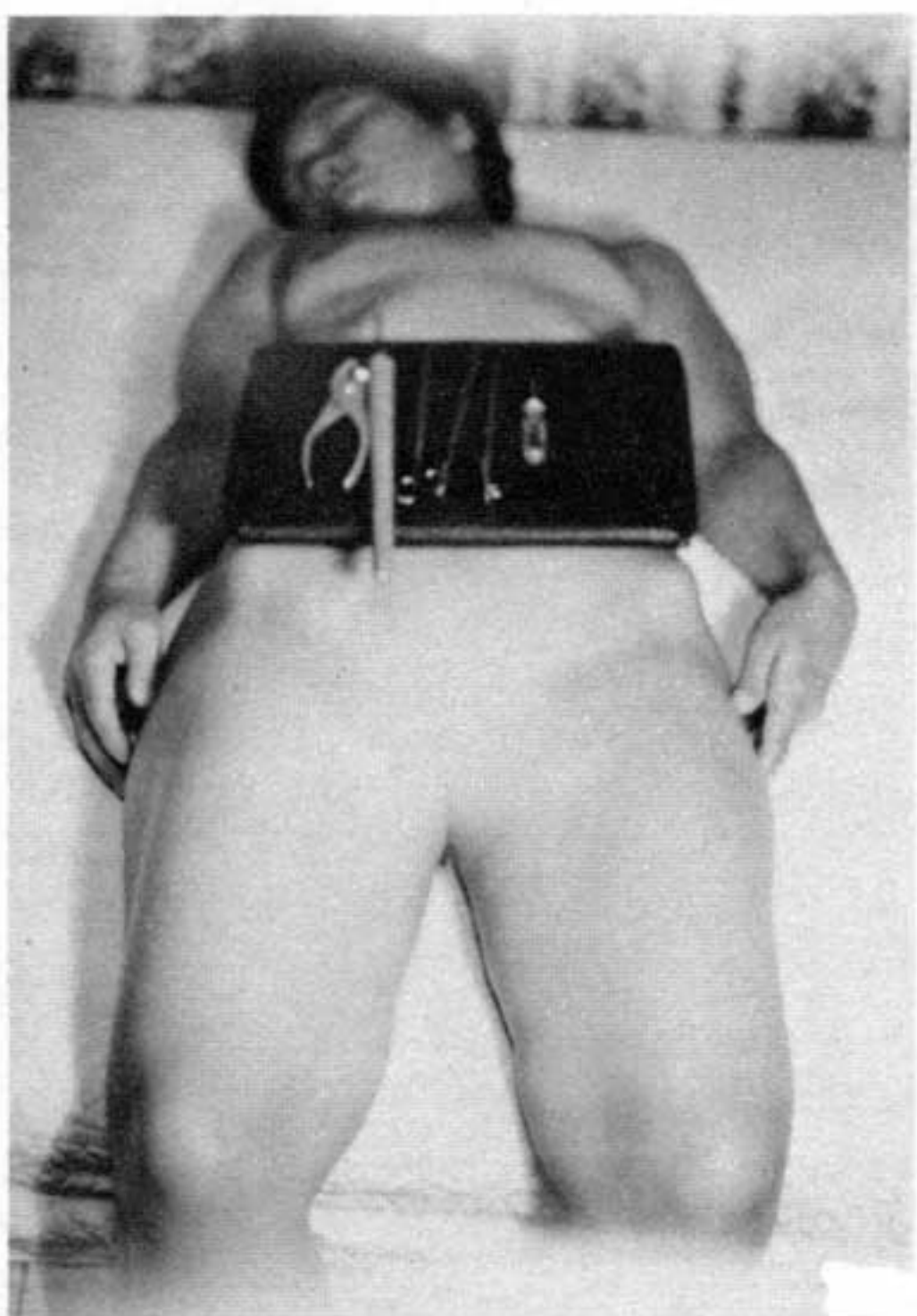
SMPにおいては、頭初も書いた様にとどのつまりSexでとどめが常とは、少々うがった考えでしょうか。私は、「性奴」に対して

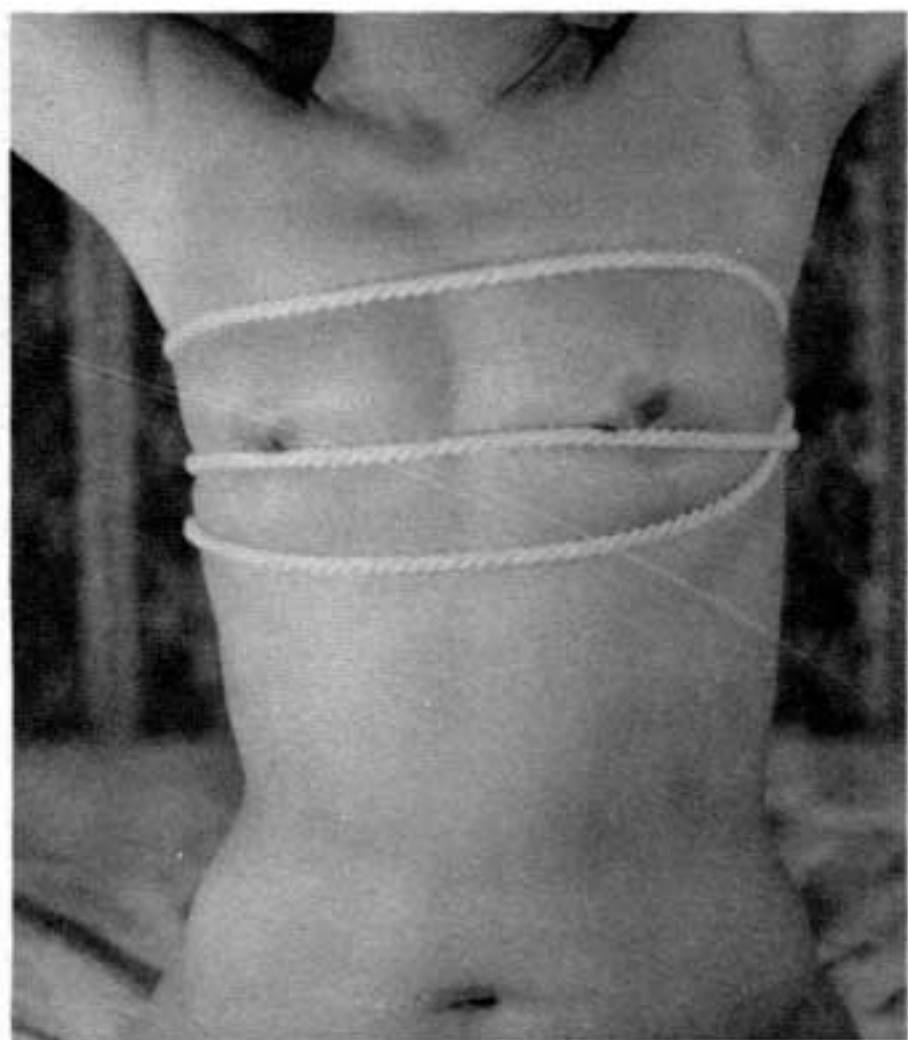
もこれを「エサ」にしている様なものだといつも思っている。それが良いか悪いかは、この道の常識外といわれてもいいが、男と女しか存在しない世界、男がこの欲望を満す手段が変則的であれば、それはそれなりに女に対しても欲望をみたしてやらなければならぬと思うし、それが又、思いやり、というものではないかとも考える。我々が、往々にして考え違いをおこしやすい点は、SMPイコール日常生活という点である。

フィクションの世界ではない。男としての生活があり、女としての暮しがある。只その

時々のはんの一握の時の流れの内でのSMPが「性奴」の瞬間であり「マスター」なのであって、我々がよく口にする「割り切った……」言葉であり行為なのだ、いふなれば、こうした事の区別がつかない、いやつけられないといったほうがいい人のSMPへの介入は迷惑至極である。

Sexは、金になるといった考えは「ヤクザ」の考え方、私は「性奴」との間に金銭の受渡はしないし、物の贈与ももたない。あくまで完全なる結末を暗黙の内に約した男と女の行為である。一方通行では、SMPも存在価





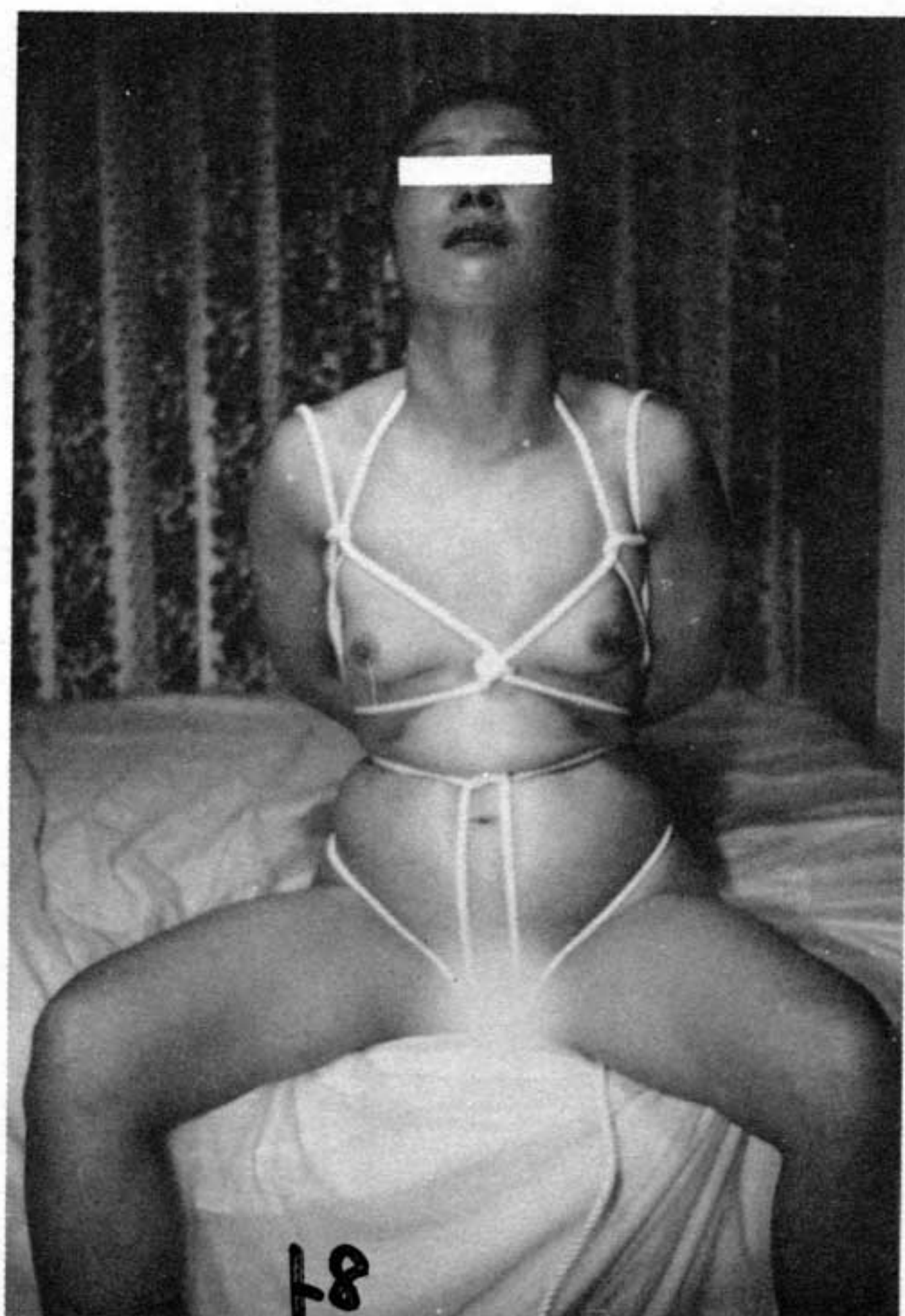
値がない。以上が私のSMPに対する観念的理論？ であります。究極的には男女の尊厳は、いかなる場合においても犯してはならないという事になりましたか。「性奴」となる方が、どの程度まで寛容するかそれによってSMPの度合が異なり、「性奴」を維持する時間も変わってくると思います。では、習性となるか、否、なり得ない。許容する度合が広くなり得る可能性はあるが、一が十になる事は先ずない。そうありたいと想うのは、あくまで我々S指向の男であって、その根底には「小口よね」の様な女性や「O嬢」や「イメージのアンヌ」の女性像が入り交じっていると思う。それらのことはあくまでS指向の男の

夢であって、現実ではなく、実現してはならないものと私は思う。実現すれば———どうか真実恐ろしい。空しいと感じよう。ロマンに向って精進？ するから楽しい。得難いものを得ようとするから、人生なのだとはいえる。私の人生にもどります。現実は厳しい。フォトよりその時々「性奴」の心理を説明して見ましょう。性奴との言葉でのやりとりはありません。私の推測ですから念のため。フォト③ 数年前出合いから数日後、私のアパートで撮ったヌードの習作。将来を予測して縛りのない「タヌキ縛り」のポーズ、心理多大な警戒心と反面どうにで

もしてといったふてぶてしさがある。縛りに対する布石なし。ヌードばかりフィルム二本撮影。翌日の撮影を約束、交渉あり。フォト④ 撮影前に婚前交渉ならぬ、撮影交渉、女性自身を撮る事を了解させフィルム一本消化。半ばやけきみ。フォト⑤ 二日後、S指向のフォトを撮る意向で、小道具をそえてみる。撮影途中で交渉そのまま彼女のペースにはまる。フォト⑥ しゃくにさわってその夜、ついにロープを出し自分の思惑を説明。拒否の予想をもののみごとに覆えされ「いいわよ」のひとつこと。興奮してこの程度のものを一本。「こんなものでいいの」とは参ったア。

フォト⑦⑧⑨⑩⑪⑫（記録では全72枚組である）

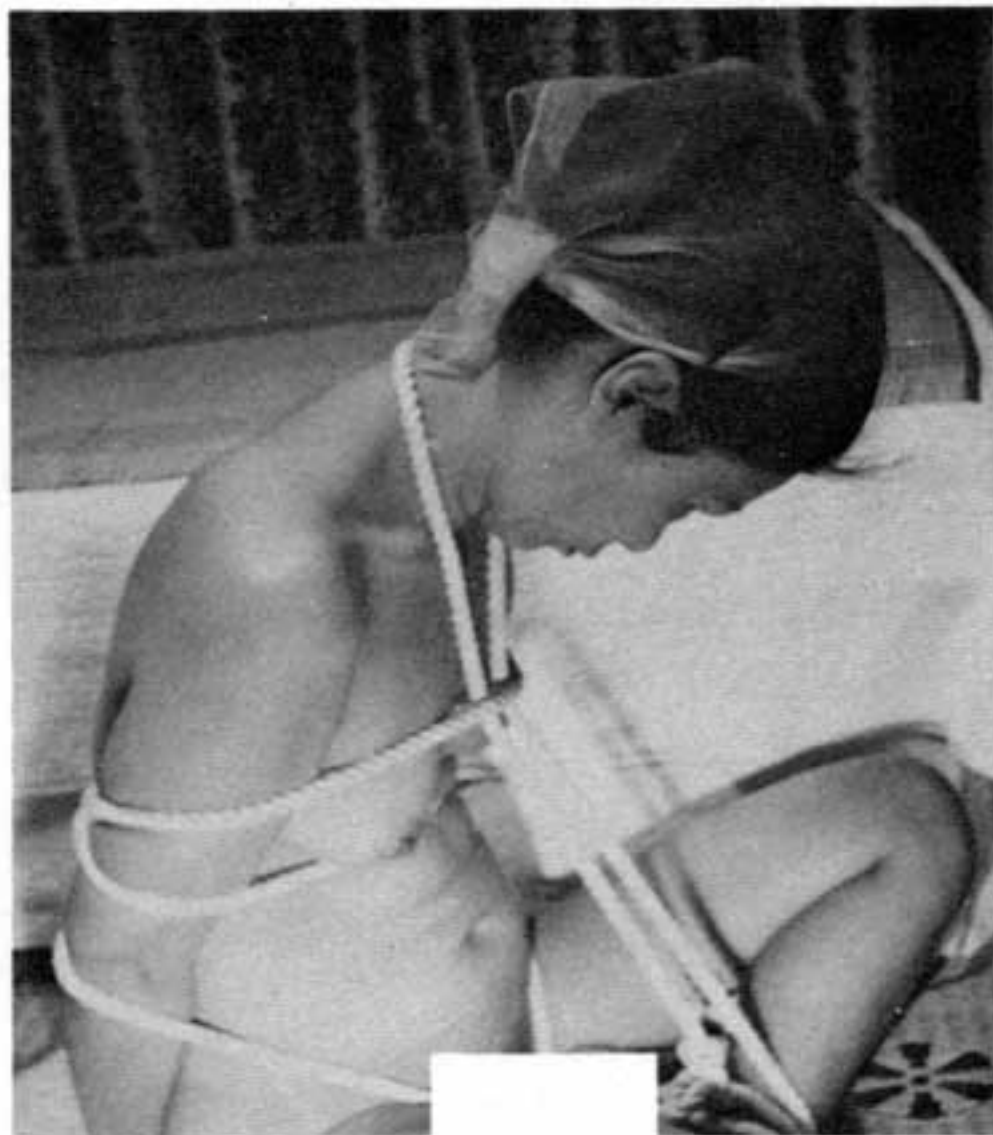
記録にするつもりで軽くストーリー風の撮影を思いたつ。ここまで来るのには大変、彼女の方はたいして気にもしていない。この頃ボーイフレンドが新しく出来て夢中になりはじめていた。そちらは正常、こちらは異常、



男より広い心の持主かな。撮影中デートのためにセットした髪を気にする。SMPと撮影、彼女の要求には適当に応じなければならぬし、体力の消耗は大変なもので、体力の低下とSッ気は反比例。女の方はどんどん燃えてくる。その火消しに動かねばならないし気持は、嬉々としても体がしんどくていま思ひ出してもよくもまあ、と我ながらあきれる。結果、彼女はその日のデートをすっぱかし、私

にもろもろのサービス？を要求。Sッ気のフツ飛んだ一日となる。穴恐ろしや。

その日のことで一気に「性奴」としての道を歩くことになった彼女、私のデーター・ブックには、001・80M・と記録されたことになる。数字に特別な意味はないが、あえていうなら「001」はM度未知の度合を示し「80M」は記録時のM度を表わしているといえよう。あえて「100M」としないのは私



のロマンであり、また「二〇」の未知数を持合せているから今だにつかず離れず、各々の生活をしながら時の流れに身をひたしているともいえましょう。一〇〇Mは、決別の時ときめてもいる。

この時のフォトを今こうして手にすると、撮影ライトに、一〇〇Wの白熱球を三灯アルミホイールで囲ったお粗末さがよくわかる。

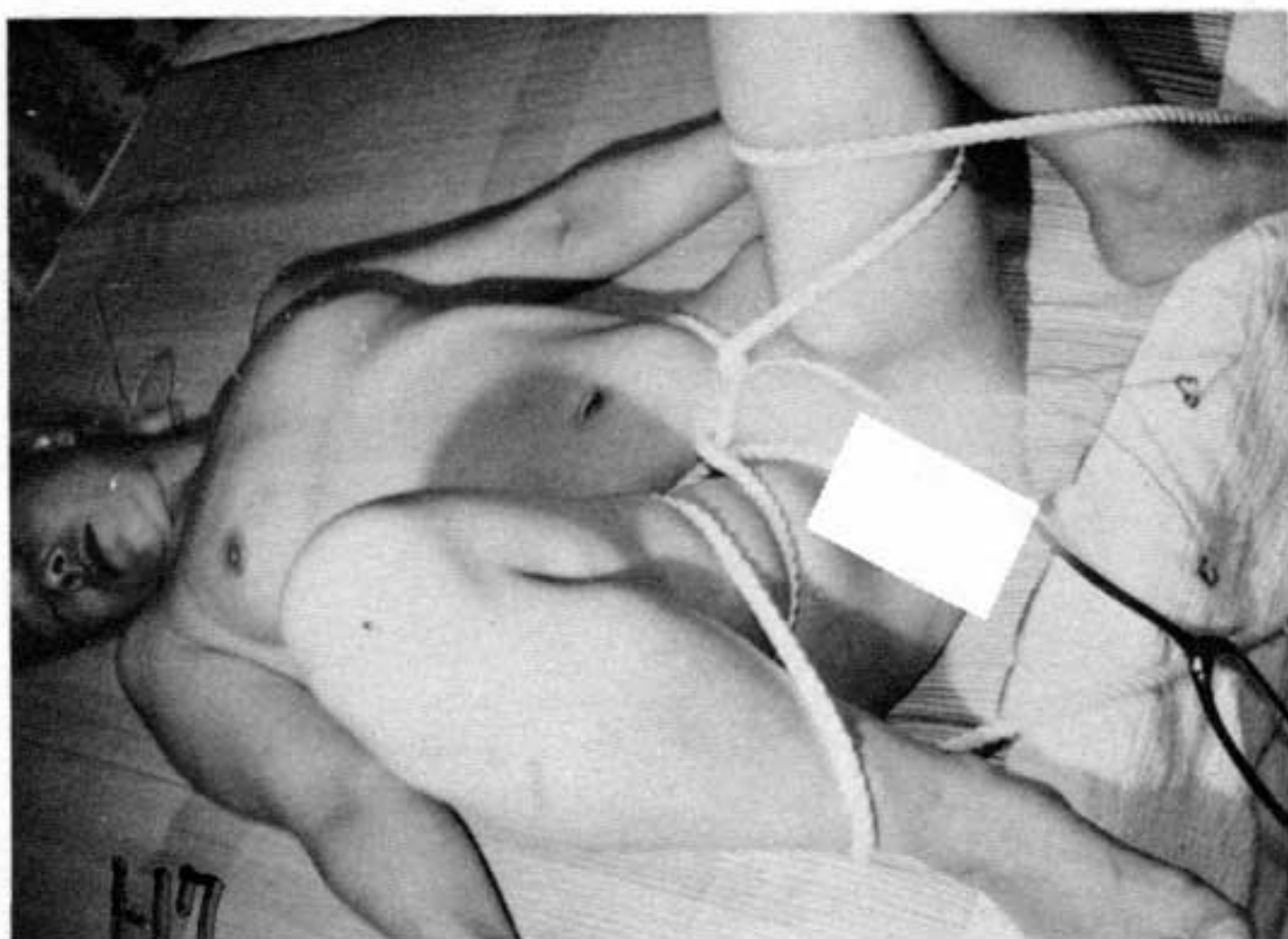
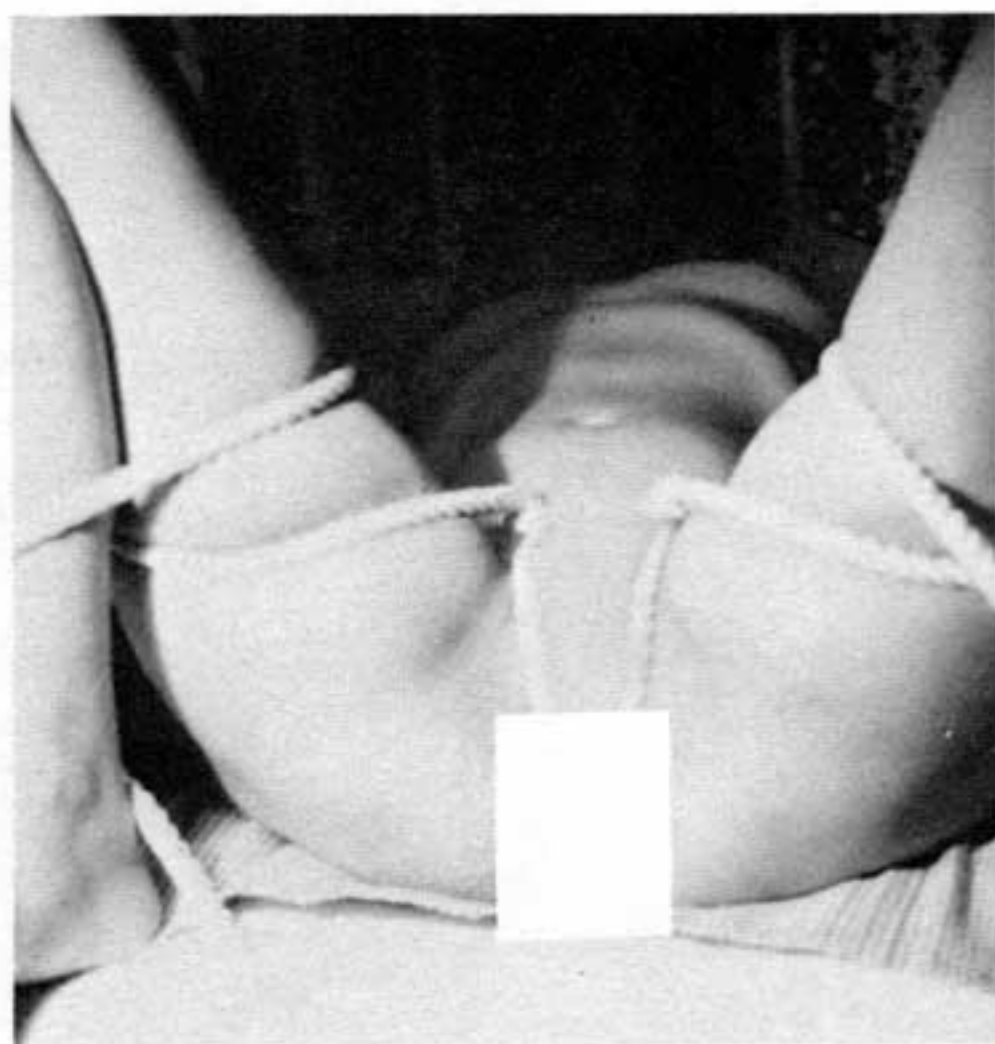
あまりいい作品でない。以後、SMPに専念、記録フォトはそっちのけ、マンネリ化したプレイに食傷気味な今年三月、再度、製作意欲？ にかられカメラをとる。

フォト・A・E・原版カラー（写真頁参照

II 編集室

自分でも意外な程、上手に撮れたもの。惜しむらくは、カラーネガであるために極端なポーズが撮れなかったこと。只プリントしなければとの条件で、カラスライドで一本とったのが成功だったことが収獲。貴誌の巻頭座談会で参考にとの御希望があればお貸し致します。諸兄又しかり。試作ですからあまりSMPのムードはありません。念のため。

又ペンが止まりました。何を書こうとしているのかさっぱり。無才とは哀しいものです。此の稿を起した日に、編集子よりの丁重なる御返信を戴き感謝しました。ためにこの有



様、むろんペンで飯をくう気はないからいいものの、あまりの才のなさにあきれる。

いずれ又あらためて貴誌々上へ「性奴」記ならぬ、フォトを発表させていただけると思います。その方が気楽ですね。

追稿 只今、タイプの違った「性奴」候補を捕獲、いずれ発表出来るとおもいます。

S研クラブ活動 第一回報告

女性会員のM化馴致

宇都宮 恵寿夫

“サン・アンド・ムーン”二号に『栃木県にS研を作ろう』と呼びかけてから、三ヶ月位たったでしょうか。県内外より多数のお便りを頂きました。と言いたいのですが、極く少数の同好の方より入会希望がございました。皆様、住所・氏名・電話を明記してあり、真剣に入会を望んでおられる方ばかりでした。遠方の方とは電話にて意見を交したり、近郊の方には直接お逢いしてSM談義に時間を忘れた位です。皆様共通しておられるのは、SM愛好者であることを他人に知られては困るとの警戒心に必要以上に神経質になっておられる様子でした。

現在の日本では当然かも知れません。ややもすると“変態”呼ばわりをされかねません。

当S研クラブを発足させた目的も、その辺にあります。誰にも話せず、一人悩み苦しんでおられる同好の皆様、是非、当S研クラブにお便り下さい。救世主(?)と言う程のことでもありませんが、打ち明け話し合えば、少しは気が晴れ心が軽くなろうというものです。同志が待っており、希望がもて、親睦の中から近い将来にSMマニアも市民権を持つ地固めが出来ると思います。閑話休題。

今回登場して頂く女性会員は、ご本人曰く「自分はS性かM好みなのか、良く判らないのです」との事でした。そこでまず「M化馴致」を試みようということで、縛りプレイを試みたのが記事中のフォトであります。

彼女は既婚者で、御主人の希望により御夫

妻でS研入会を果されました。

私と御主人とは、元同じ職場にいたという旧友関係で、独身時代に共に彼女に『恋の狩人』としてアタックしたものです。結果はいうまでもなく無念の涙をのんだのは私であります。彼には女性特有の母性本能を呼び起す童顔のマスクと話術巧みな人柄のよさというものを持っているのです。そんなわけで大恋愛の末結ばれたお二人なのです。

一ヶ月程前でしたか、私が仕事の帰り道、

お二人の愛の巣へ立ち寄り、世間話などとしておりましたが、ひとときの歓談後、私の見送りのために車の脇まで出て来た彼女が車窓を覗きこみ座席へ置いてあった“サン・アンド・ムーン”二号を見て、不審気に

「これ、何の本ですか」

と問いかけてきたのでした。

「エッ、ああ、これね……これは、その『愛を見つめる雑誌』で……」

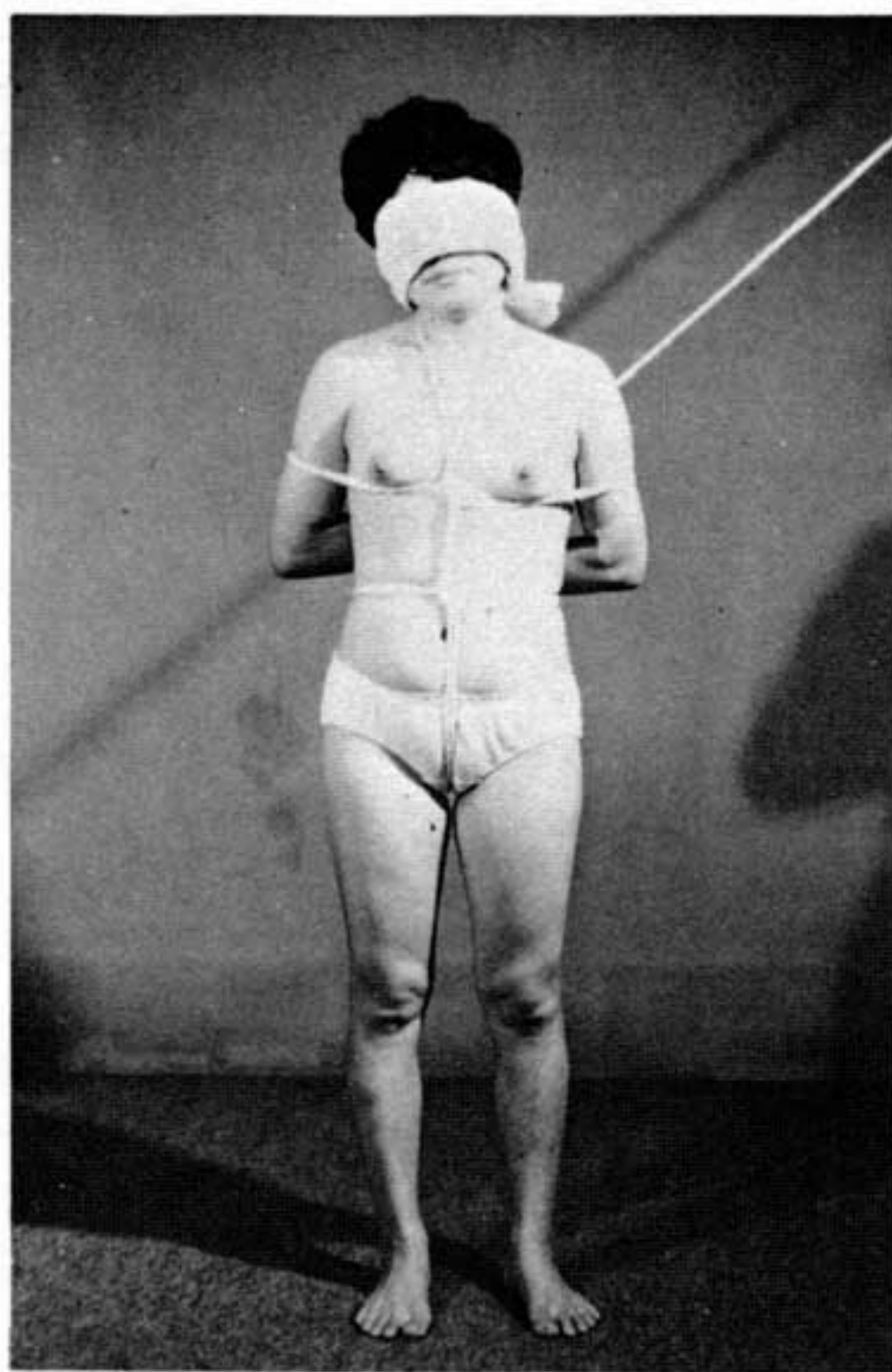
と口籠る私におかまいなく、彼女は手にした雑誌をパラパラめくり、

「まあッ……凄い本を持ってるんですね！」

と驚嘆。見られてしまった以上仕方がない……

……意識して平静を装いながら

「ああ、よろしければ差し上げます。私はも



う読み終りましたから。……お二人で縛りのプレイなどお試しになってはいかがです」と、冗談とも本気ともつかず薦めたのが、そもそもそのキツカケでした。

車の座席に置いたのが一冊だけなら言い逃れや体かわしも出来たのですが、二十冊もあったのですから彼女が不審に思うのも道理であり、私は説明を続けました。

——実は、栃木県に「S研」グループを発足させようとして、今、県下の書店を廻りこの雑誌の特約販売店を開拓しているところなんです——すると、

「面白そうなお仕事をしていらっしやいますのねえ……」

と好奇の目を彼女は向けてきました。「仕事じゃありません！ 道楽です……趣味ですよ！」

私は力説しながら、ふと彼女が嫌悪感を持つていない様子に気付いていました。一度話してしまえば次から次へと話が進展し、そのあと改めて正式に御夫婦ともどもの御入会が実現したのです。一時は「S研」自体、やはり無理な企画であったかな、とあきらめかけていたのですから、御夫婦の加入は喜びも一入でした。

人間は、S・M両面を持ち合わせているそうですから、彼女も今後の調教次第でS女王にもM女にもなりうる事と思いますし、相思

相愛の御主人にしてもSかMか判別する段階には至っておらず、お二人して今後の楽しい有望な素材であると思います。

九月初旬、私の家で初歩的な軽い縛りプレイを実践してみることが出来ましたので、お世話になりました「日月舎」へご報告し、御礼申し上げる次第です。

記録写真は、顔を出さない条件で、私が撮影致しました。ご夫妻も秘蔵記録として、また今後の参考資料として大切に保管したいとの事であり、積極的に協力して下さいました。

さて、写真①は、初めての縛りですので下着をつけたままで「後手縛り」「股間縛り」程度にとどめました。ご主人立ち会いの記録

作りです。

写真② 前葉①の縛りのまま座りポーズで右足を固定——ここでハプニングあり——立ちポーズの彼女にご主人がそっと近づき、いきなりパンティをずり下げたのです。「きゃっ！ ヤメテェ……」と座り込んだポーズをそのままキャッチしたのが②となったわけです。

写真③ 椅子を使い、後手縛りと乳房縛り
写真④ ③のままで両足を大きく開いて椅子に縛りつけたバリエーションです。同一ポーズを前から横から撮影しましたが、手がしびれてきたという彼女の訴えにより、何しろ初回のことであり無理強いせず、縛りを解き

小休止……時計を見ると真夜中の二時でした。

縛りプレイと撮影に入る前に、充分時間をかけSMについての話、記録を残すための打ち合わせを行ない、少しでもプレイに対する彼女の不安を取り除こうとしましたから、コミュニケーションには二、三時間を費したのがあります。初回の記録作りそのものにかけた時間は僅か十分位でした。

ご主人は少し物足りない様子でしたが、明日のお仕事に支障が起ってはいけませんかと納得して貰い、次回の「M化馴致」続行の計画と予定日時を約束して、お二人は帰られました。

私の印象ですと、ご夫妻は共に開放的であ

り且つ好奇心（知識吸収欲）が強く、今後S研の率先行動家として御活躍願えると思います。当夜の約束として、九月下旬に第二回のM化馴致を行うことになっておりますので再び成果報告が出来ると思います。

読者各位からの御鞭撻、御高評もお受け致したいと考えておりますので、よろしく願います。



奴隷妻誕生

和田 鋭二

涼子に佐野みさ子の写真集「マゾ牝虐艶集」を見せたとき、あんなにも興奮するとは思ってもいなかった。涼子とつきあうようになって、すでに一年、最近前戯のなかで、腰紐を使って開股縛りをして、舌技でもあそんでも抵抗しなくなった彼女に、内奥のマゾ性を感じてはいたが、

「私もこんなにして、いじめられたい！」と口ばしるとは予想もしなかったことであった。私がSMの世界を知ったのは、丁度五年前、「奇譚クラブ」が廃刊になる二年程前であった。渋谷の古本屋の店頭にたつてあれこれ物色している、足許から底冷えの寒さが身体をはいのぼってくるような夜であった。何気なく手にした奇譚クラブの巻頭の女性が縛られて

いる写真を見たときの、身体を刺すようにして走り抜けていった戦慄を今でも忘れることはできない。そのときの戦慄が、涼子の責められたいと口走った時、再び私の五体を通りぬけていく思いがした。

涼子は私の友人でもあり先輩でもある、松村春夫の妻で、私は春夫の了解のうえで月二回、浜松で涼子と交際をつづけているが、この頃は、私の身も心も、涼子にのめりこんでしまつて、この一年とゆうものは涼子に出逢う時間を作るために、毎日の生活設計をくみたてていくような日日であった。

それだけにSMプレイを、二人の交際のなかにもちこんだ場合、涼子の拒否反応にあったときのことを考えると、不安で、言葉や行



初めてのSMPと撮影に恥じらう涼子

為に表らわせなかっただけに、涼子の一言は、やっと長い間求めさぐっていた桃源境の入口にたどりついたような思いと、これから秘境の世界に歩みいるよろこびで、胸がはりさけるようであった。

次の出逢の日、私はいつも東京から新幹線



私の手製の皮具で両手首を拘束する

を利用して浜松にいくのが習慣であったが、この日ばかりは、自家用車のトランクに大きなバッグ二個を入れて、東名高速を久し振りに走るのでした。一つのバッグには、写真機や三脚やフラッシュやら写真用具を、もう一つのバッグには、紐類やらバイブレーターや皮具製品、また佐野みさ子の写真集を求めた

新橋のポルノショップで、これと同じものをくれと、いつて買いととのえた、プレイ用具類であった。

ただ一番心配したのは、綿の紐や、麻紐など使用すると、縛りのあとが手、足にのこることで、涼子もそのことを心配して手紙でいつてきているので、思案にあまって世田編集長に手紙したところ、ガーゼを使うとよいと教えてもらい、自分で自分の身体に実験してみたところ、きわめて具合よいので、ガーゼを使ってみようとは何反か支度もした。

部屋に入ると、私は涼子に先に風呂に入るようにすすめた。いつもは一緒に入るのにと、一寸不審気の涼子に、

「プレイの支度するから！」と言うと、「あら！ そう」と顔を赤らめて部屋を出ていくのであった。写真機にフィルムを入れたり、フラッシュに電池を充電したり、ガーゼの包みをほどこいて太めの紐に仕立上てみたり、電動式の指人形を試動したりして、カバンのなかにつめこんできたものを一つ一つ取り出した。

陰鏡や、小型のバイブレーターなど、身体に直接ふれるものは、よく煮沸消毒したつもりではあったが、念のためにと、洗面所の熱湯で消毒しなおすなど、夢中でそれらの小道

具を、寝室の枕頭台の上にならべ整理しはじめていると、いつの間にか風呂から上って、バスタオル一枚で身をつつんだ涼子が私の背中から、のぞきこむようにして、その様子をながめ、

「鋭二さん、写真もとるの！ 困るわ、恥しい」と不安気の口調をなげかけるのであった。そして振りむいた私の身体に、しがみつくようにして、私の唇をもとめた涼子は、「ね、お願い！ 今日はいつものように、愛して、変なもの使っちゃあ嫌よ、この次約束守るから、縛らないで、あなたのいつもの愛撫が、涼子一番ほしいの」と言うのであった。

しかしそのうるんだ瞳、身体をまさぐったときの股間の濡れ、唇の動きで、涼子が今日はいかに興奮しているか、私にはすぐ解るのであった。

「嫌なら、何にもしないさ、僕だって、涼子の、この素肌があるのままでの身体が一番いいもの」と言いかえして、二人はそのままベツトにもつれこんでいくのであった。

いつものように私は私の舌と唇を、涼子の唇から乳房へはわしていく。その反復のなかで耳をかむ。とくにこの頃、涼子は私に耳たぶを唇で愛撫されながら、綿棒を使って、軽

く耳孔をまさぐると、異常な高まりを覚える。らしく、激しいうめき声を発するのであった。「早くちようだい。じらさないで、お願い……」

涼子が絶頂感に入る激しいうめき声を発しはじめたとき、私は身体の動きを止め、



X字型に固定された涼子

「涼子の嘘つき！」と耳許でささやくと、夢の世界から現実の世界に涼子を引もどした。「どうして？ どうしてなの？」とかすれた声で涼子は訴えてくる。

「僕のすきなように涼子を責めたい、今日は、そうしてといいと、涼子の方から言っておいて、駄目などと残酷だよ、駄目なら、涼子も天国につれていかないから、手前でストップするから」

「いや、いじわる、解っているくせに、私は全部鋭二さんのものよ、あなたと一緒にときは、私はあなたの妻よ、鋭二さんの好きなようにして、鋭二さんがうんと燃えるなら、どんなことでもして」

「いいんだね、縛って動けないようにして、写真もとるよ。その思い出をずっと僕の手許にのこしておきたいのだ」

「みんないいわ、すきなようにして、でも春夫に解つたらいや、二人だけの秘密に出来るの」

「勿論だよ、僕だけの涼子にしたいもの」「うれしい、ね、お願い、早く早くちようだい」

それから数分と経ずに、愛の序曲は終わったのだった。涼子のほてった身体をだきしめな

がら、私は涼子と初めて出逢ったときの事を回想していた。

それは一年前の、六月の初め、浜松に松村春夫を、十数年ぶりにたずねたときのことであった。会社に電話すると、手がはなせない急用があるので、早くかえるから、直接自宅の方にいって、待っていてくれとの事で、浜名湖畔に臨む住宅地にある彼の自宅をたずねたのであった。

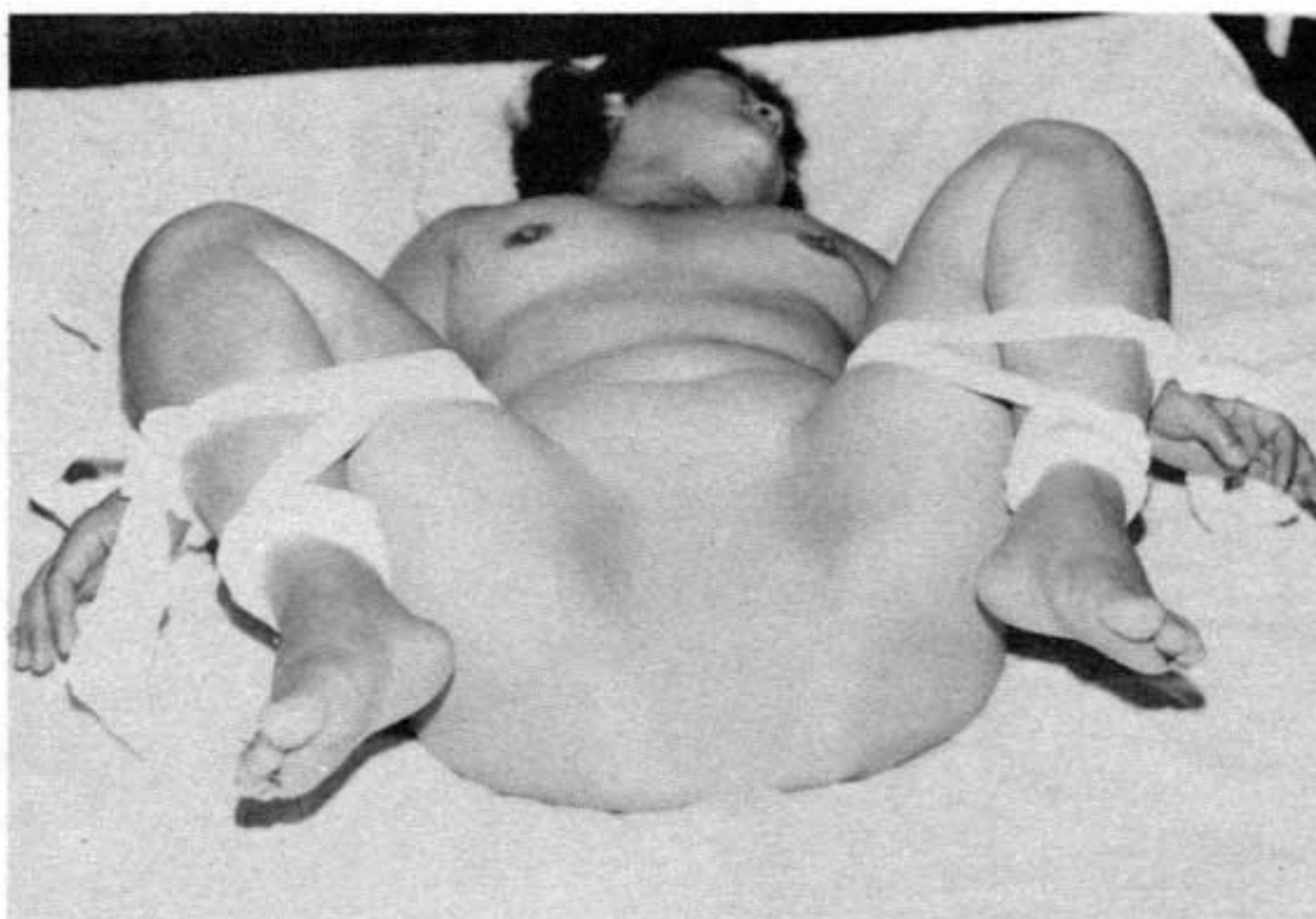
デパートでパートの勤めをしている彼女はすでに帰宅していた。玄関のドアを開けた彼女に「松村さんの学校友達です。会社へ電話すると先にこちらへ直行するように言われたものですから」と、私がはにかむようにして名乗ると、彼女は初対面の挨拶も忘れて、私をじっと見つめるのであった。

人生の出会いにはこういうこともあるのだろうか、四十八才の私と三十九才の涼子とのこの出会いは、私には十三年前に亡くなった妻を、涼子には初恋の男を思い出させたのである。

鉄道案内書によると「海の眺めは蒲郡……」

と明治の鉄道唱歌にも歌われているように、蒲郡市は三河湾につつまれた静かな碧い海と、

暖かい陽光を返すきらめく海が、観光のポイントである。その蒲郡の海を一望に見渡す高台に、見おろしの竹島が庭園の延長のような感じをもたせに、日本でも大正前期に作られた古いホテルの部類に入る蒲郡ホテルがある。菊地寛の小説「火華」の舞台になったことか



初めての開股縛りにうめく……

ら、蒲郡の風光と人情とホテルの名前は、戦前の人には忘れがたいものとなっている。私はこのホテルの庭園にある六角堂を検分して、その設計図と文献をとりたいために、浜松の松村春夫をたずねてきたのである。かつて彼が仕事の関係でそのホテルに出入していた支配人と親しくしていたことを耳にしていたからだ。

翌日は涼子が公休日だったこともあり、松村は仕事の都合で案内できないから「お前が案内しなさい」と言われた彼女の案内で私はホテルをたずねたのである。

行きの車中やホテルでの小半日を彼女とすごしたのだが、このとき、彼女は自分の過去を初めは見栄や気取りもあって、小さな嘘で粉飾しながら語っていたが、私があるの自分の過去を話すのに感動して、彼女も正味の過去を話してくれたのである。

涼子の実家は木曾福島であるが、すでに涼子が生れた時は、名古屋市郊外の春日井市に居をうつして、父は春日井市の財力者である筒井呉服店の番頭をしていた。涼子の名前をつけたのは祖父の伊作で、伊作は木曾御岳山の先達をしており、春日居から名古屋にかけての御岳講をいくつか取りしきっていて、



大の字縛りですべては私の言いなり……

これといった定職はもたなかったが、先達さん、先達さんと相談に見える人も多く、経済的にも不自由のない生活をしていた。それだけに、涼子の実家のすべての実権は祖父伊作が握っているような形であり、涼子の姉の信子が産れた時、呉服商の傍、ひそかに愛読していた文学書のなかから、自分の果せなかつ

た夢を長女に託すつもりで、女流作家吉屋信子の名前から、信子と父が名付けたのだが、そのことは祖父伊作の大変な不満をかったらしく、涼子が生れたときは、伊作はこの子の名前はお七夜までに俺がつけると、はっきり宣言して、涼子の両親を黙らしてしまったそ



テーブルの上に固定する

うである。

涼子とゆう名前は、伊作が先達をして御岳山頂にのぼったときの誇りとよろこびと、山の靈気のすずやかさとをその名に託したものである。

姉の信子と涼子の夫の春夫とは二人ともダンスがうまく、二人の交際はそのまま結婚にまで進むものと涼子は思っていた。当時涼子は軽い心臓を病んで家にこもる事が多く、その手先の器用さをかわれて、父が務める筒井屋の呉服の仕立物を手伝うことが多かった。

呉服の仕立をたのみにきたり、引取りに来たりするのは、涼子の小学校からの同窓だった筒井家の長男市郎がほとんどであった。市郎は高校を卒業する日、将来僕と結婚してくれとはっきり涼子に求愛していたし、涼子も誰れにも打明けないまま市郎を将来の夫と心にくめていたようである。

筒井市郎との恋愛が表ざたになったとき、涼子の病弱を理由に筒井家から反対され、両親も家柄の違いを心配して反対し、引きさかれるようにして交際を断られた彼女は、姉と結婚するものとはかり思っていた松村春夫から求愛され、両親や姉もすんなりと春夫の申し出を受け入れて結ばれたのである。が、こ

れは姉の信子が病身の涼子を思い、失恋の痛手から立ち直らせるために、春夫を説得したのだと、涼子は今も信じていたのであった。

ところが運命は皮肉なもので、涼子より遅れて結婚した姉の信子は、その夫を結核で亡くして一人娘をかかえて東京に住んでいたのだが、いつの頃からか、涼子の夫松村の会社がある静岡のはずれ、三保の海岸の近くに住み、そこへ春夫が曜日を決めてたずね、泊るようになり、姉も彼をくるのを待ちわびているようだというのである。

だが涼子は夫と姉の關係に気づいても、嫉妬はほとんど記憶にない、と私に告白するのであった。

すでに春夫が電話してあったらしく、フロントに支配人を尋ねた二人に、黒の蝶ネクタイに黒のタキシード、年配のいかにもフランス映画に出てくるような感じの、古風な蒲郡ホテルにふさわしい、その人は、

「お部屋もおとりしてありますからどうぞ、ゆっくりおくつろぎ下さい。庭園の御研究家だそうで、手前どものホテルにお目をかけて下さって大変光栄です。どうぞ、御自由に御覧下さいませ。ボーイにもよく言いつけてお

きますから」と丁重に挨拶を述べた。春夫がどう話してくれたかは解らないが、私にも都合よいことであるし、涼子を私の家内と思っているふしもあったが、一つ一つ話す必要もないと考えて、

「有難う御座います。気ままにさしていただ



椅子の上に開股縛り

きます」と好意をうけることにした。

ボーイの案内してくれた部屋は、見下^{みおろ}に、竹島を中心に蒲郡の海が一眺にみわたせる部屋で、右手の岬の先には西浦の温泉郷が、かすんでみえていた。私が検分したい六角堂も目の下に位置して、そりかえった中国風の瓦は、初夏の陽差を遊ばして、前庭の処々につじの朱の色と調和して、一日の変化をたのませてくれそうであった。

ホテルでの私の愛撫は正に姫君につかえる下僕の如く涼子を戸惑わせ、雲の上を遊泳している錯覚を覚えたようだ。女は男につかえるものだ信じてこれまで生きてきた涼子に、私の解放的な愛の表現、壊れものでもあつかうようなソフトな愛撫は、当然のことながら私に対しての価値感を重く認めさせてしまうのであった。

「汚くはないのかしら、みだらではないのかしら」という涼子の懸念をふり払うように私の唇は彼女の全身に及んだ。人は不倫というかも知れないが、純粹に快樂だけを追求していることが、こんなに楽しいものとは知らなかった。ことの終ったあと、涙をためている私の目を見て、彼女の目からもふきあがるように涙があふれるのを私はやさしく唇で、吸

いとるのであった。

実はこうなることを松村春夫は、すべて承知しているのではなからうか。

涼子はベットの上で煙草を一本すった。夫の春夫が姉の信子の家へ行き泊るようになってから、涼子が覚えたささやかな慰めの一つだと言ったそのすいさしを私もうけて、二、三服すうと、ベットから下りようとする涼子を再度押え込み「許して」というまで、長い時間、涼子を離さない、激しい火の男に私は見事に変身していた。

民子と死別してから幾度かすすめられ、自分の気持も傾いた女性は何人かいたが、私は再婚しなかった。愛は抽象的な輝かしい、精神の貴族であって、肉欲はその前では、無様な道化にすぎない。心で愛することは、民子一人で充分だと思っていたのに、私の掌は、涼子の軀に愛をもとめて憩いたがるように、幾度もおののきつつ、その体型の上を流れ、涼子の指は、ふたたび私の肉の奥からの海鳴りの響きを呼びもどしてくれるのだった。もうすでに苛だたしい異和感も、重苦しい精神の圧迫感もなく、二人の間に確かな愛の実証が得られたというよろこびに、彼女の生命を吸いつくしてしまいたいほどに私は貪るので

った。

村松春夫が上京したついでに立寄ったと言
って突然、私の会社を訪れたのは、それから、
しばらくしての後であった。

そして彼の口から、涼子とつきあってみな



愛撫とパイプ責めに絶叫……

いかと、言われたとき私は、「お願いします」
と言って深々と頭を下げたのであった。そし
一年はあつという間に過ぎていったのだ。

この頃のように、もう涼子の存在が、私の
すべてであるような日々のなかで、私はどう
しても、私と涼子とだけの、たしかな愛の実
証がほしかった。SMの世界は、私の遅緩し
た精神に、新しい意慾をわきたたせ、春夫の
知らない、涼子と私の世界を造型していく、
唯一の手段と道程だと思ふようになっていた。

涼子の両手首に、私は自分で皮の端布を用
いて作った皮の手かせをはめると、Vの字型
に両手を延ばさせ、寝台の両端に縛りつけて
同じように両足首に、ガーゼの紐をゆわいつ
け、丁度涼子の身体がX型に寝台に固定され
るよう紐を、寝台の脚部にかくむすびつけ
た。見馴れた涼子の身体も新鮮なうごめきを
もって私に迫り、私の舌先はいつか、その全
身をはいずりまわりはじめていく。

「素晴らしいわ!」とうめきのなかに、感動
の叫びをあげる涼子に私の心はたけりたつ。

涼子の頭をぐいと右側に向けておさえこみ、
綿棒を使った耳の愛撫をはじめめる。いつもよ
り荒々しく、そして細心に……。綿棒は両耳

をいたぶって、鼻孔もまさぐり責める。

「許して!」とうめきあえぎながら、涼子は
股間を濡らしはじめる。

私はバッグから「ヨカールM」を取出すと
それで涼子のアナルのまわりと肉部の肉ひ
だにも、つけていく。男性自身をマヒさせて、
持続させる薬であるが、私は使ったことがな
く、今日こそ、アナルセックスを成功させる
ためにと用意してきたものであった。

「さあ!これからパイプを使って責めるか
らね!」でも、どんなによくても、一人で、
いっては駄目だよ、最後は必ず一緒だからね」

涼子はきいているのか、いないのか、全身
を興奮状態のピンク色にそめながら、眼をか
たくとして、荒い息づかいをしている。

最初に小型のパイプを用いることにした。
X型にしばらくされている涼子の身体に、さらに
ピントとした緊張感が溢れてくる。身体の苦
痛感も激しくなる。充分に濡れて、なめらか
になった小型のパイプを前からぬきとるとア
ナールに近づけた。

「痛い!」と言う涼子の声に一寸躊躇したが
「我慢するんだよ!」と言いながら、一気に……。
そして、張りさけんばかりの私自身を涼子の
なかに……。

X型に固定した紐をほどくと、ぐったりと身を投げ出すようにして、ベッドの上の涼子は放心状態であった。腰の下にあたる部分のシーツは、涼子のあふれてきたもので、すっかり濡らされて、大きなシミを作っていた。それが新しい刺激となって私の心を燃やし



別れの愛撫を受けて放心状態の涼子

はじめ、再び涼子の身体をおこして両手を背中にまわし、両手首を縛るとそのまま、ベッドにおしたおし、足首を大腿部をおりまげたまま、それぞれガーゼの紐でしばり、手首をしばった紐で、ハの字型に開股部分が、さらにひらくよう固定し、先程の小型パイプで通りのよくなったアナルに、さらにオリーブ油をぬりこめて、私はアナルセックスの体位をとらせて耳もとでささやくと、

「いいわ、好きなように責めて、すきよ」

と激しく愛情を告白して身もだえながら次第に私の奴隷妻として変身していくのであった。こうして果てしなく愛の狂宴に夢中になっているうちに、ふっと気がつく部屋に入ってからすでに四時間余の時間がたっていた。涼子を必ず、夕方六時迄には帰宅させるということが、春夫と約束した一つでもある。

一緒に風呂に入り、涼子のやや赤らんだ手首や足首を、風呂の中でもみほぐしていくうちに、それが、愛撫の表現に変わっていくことを二人はおさえることが出来ない。涼子は、私の胸に顔をうずめながら、

「やっど、あなたの奥様になれたような、気がするの、本当にうれしいわ、誰れも知らない二人だけの花園が造られていくわ」

「涼子の身体をもっともつと色々な方法で、開発していくよ、あの写真集の佐野みさ子以上に、みんなが羨やましがるような、奴隷妻に育てあげるからね」

「有難う！」

外に出ると浜名湖の湖面は夕映をうつして私達をつつみこむのであった。

本誌「サン・アンド・ムーン」は
全国書店販売のルートがととのつ
ておりませんので、近くでお求め
できない場合は

定価千二百円 送料百円

を現金書留で左記へ注文ください。

〒一〇一

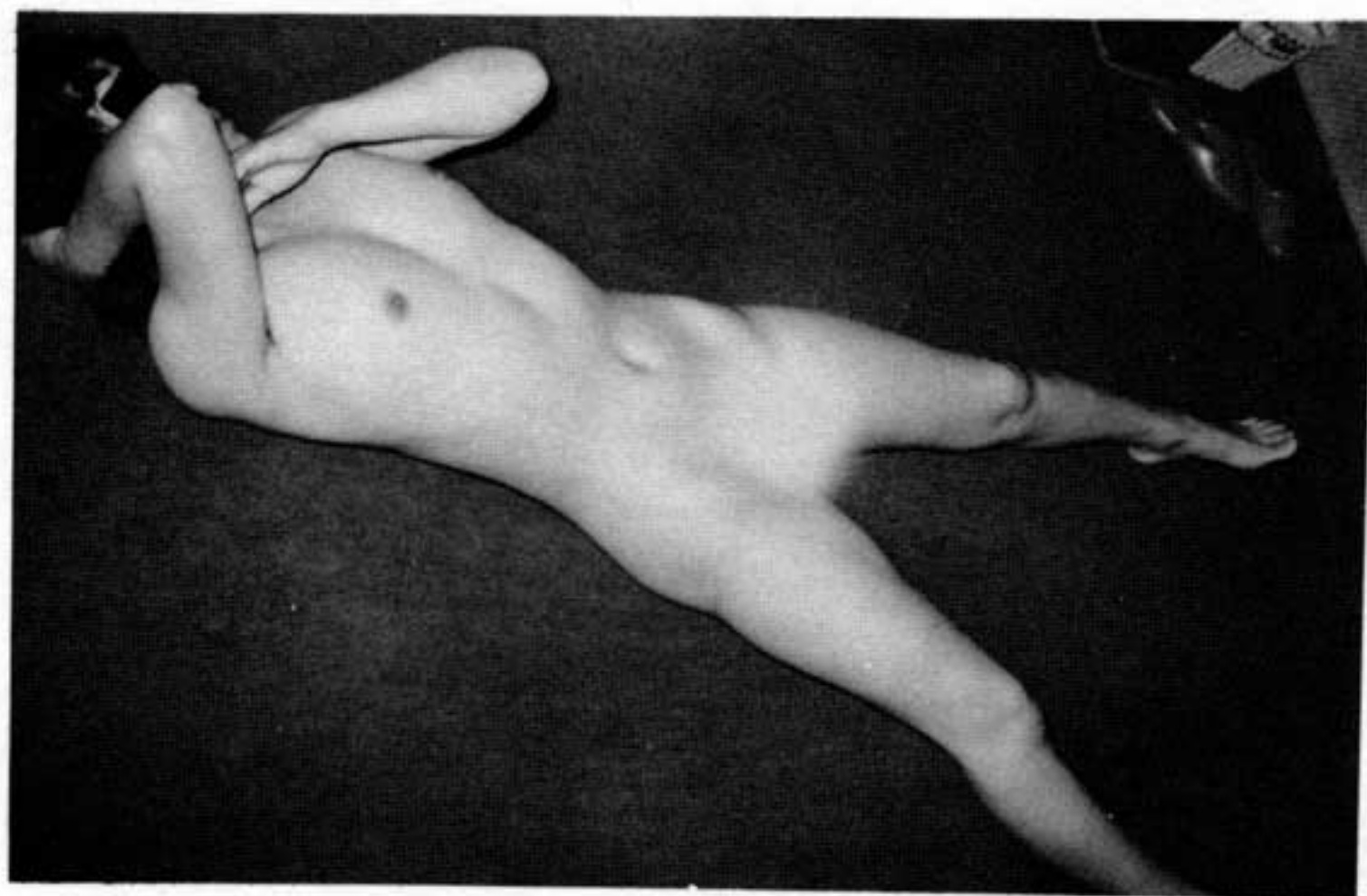
東京都千代田区西神田

一四一三 新神田ビル

エド・プロダクツ

告白・わが理想のパートナー

尾河 隆



誰の言葉か忘れてしまったが、「人の一生は出会いと別離のドラマである」と言うのを良く思い出す。その言葉通り私は私の性癖に関する人生の部分で、忘れることの出来ない一人の女性との出会いと別離とを、事有る度に思い出す。

こんな書き出しで話をしていくと、何か畏まった文章になるが、ただ何と表現してよいかわからないが、何か二人の間に通じるものが必然的に結ばせたのではないかと、少し時間を経た今になって思えてくる。それは真に自然な進展であった。

私は学校を卒業して以来、二度ほど会社を辞めて、五年前に現在の会社の総務課に落ち着く事が出来た。私の入社のおかげでもあったのですが、この会社の創立者でもある会長が私と同じ県の出身者、そんな理由で社内には同じ県の出身者が多く、四月に迎える新

入社員も当然同県人が多数となる。

二年前のその時期、高卒の女子事務員として入社して来た二十数名の中に、これから話す裕子が居た。裕子も私の田舎とは約三十キロぐらい離れたT市の出身で、家は旧家であったと言うものの現在では昔の力はなく、古い門構だけが昔の力を残しているにすぎないと、裕子の家を知っている人に聞いたことがある。

私は総務課でも人事関係の仕事をしているために、入社後の新入社員教育とかで、彼女達が社会人として落着くまでは、何かと面倒を見なくてはならず、その分だけ彼女達と接する機会が多い訳です。しかし仕事柄、人間関係の信頼を破ることは出来ず、又、私自身も性の相手として彼女等を身近に感じたことはなかった。

当然、裕子についても新入社員として域を

出るなど想像だにしなかった。

ゴールデン・ウィークを間近に控えた四月下旬のある日、退社時間近くになって私の机にやって来た彼女は、相談があるので聞いて欲しいと言う。彼女に限らず、こう言った事はよくある事なので帰る途中に聞くことにして、終業ベルを待った。ビルの玄関口で待っていた彼女は盛春を感じさせるブルーのワンピースを着ており、野暮ったいので評判の私には不釣合いな道連れである。地下鉄の入口に近い割とゆったりとした喫茶店に入って隅の方に席を取ると、彼女はぼつぼつと話し始めた。こんな時、私は別に話の内容に特別の興味を覚えない。大体的内容は決っているからだ。女の子の相談は、一にボーイフレンドや恋人に関して、二に寮生活のトラブルについてで、仕事に関する相談など不思議に少ないのを知っているからだ。だから私は裕子の話を適当にうなずきながら聞いていたが、そのうち、ふと裕子の唇や目、そして腕の動きの中に、私が努めて隠している部分を刺激するものがあるのを感じた。不思議なもので、私が裕子に感じたことは、口で伝えなくても伝わるもので、裕子も又、私に何か感じた風でもあった。自然と退社後、喫茶店で過すこ

とが多くなっていた、と言っても、しばらくは一女子事務員と一人事担当社員である。

そんなことが何度かあった後、何時もの喫茶店の隅で話している内に、裕子は今朝の通勤電車の中で痴漢に襲われたことを話し出した。入社以来今日が初めてではなかったそうだが、今まではスカートの上から、そつと押し付けたり、撫でる程度だったのが、今朝はパンティの中に手を入れてきたとか、余りの驚きで声も出ず、次の停車駅まで、それはそれは羞しい思いであったことを話し出したので、私はここぞとばかりに、根掘り葉掘り聞き出した。

「パンティーの中って、どんなことされた？」と興味深そうな目で聞くと、

「やだわ、そんなこと」と言っ、はっきりに話さない。

「感じたらう」と、なおもたずねると、「羞しくて、羞しくて」と顔を上気させる。

「羞しいだけではないはず、一緒に感じたはずだが」と、しつこくたずねる。

こんな話から二人は、今までの表面的な話から、互いに隠し続けたもののベールが剥れるのを感じた。そして同時に、相手の性を意識して興奮を覚え始めた。

裕子は想像以上に話に乗って来たし、話の一つも逸さない。私が故意に話を下げていても追いついて来た。そして最後には、私のセックスについての自論（好い加減なもの）を話すに至った。

セックスは人間の本能だから、本能を満す事自体には何の悪徳もない。唯、他の本能、



寝るとか、食るとかは異って、一人で出来ない、そのため本能遂行の段階で相手の性の本能を無視し、過程を無視することから生じる諸々の行為が偏見と、悪徳に通じる部分を生み出したので、第三者に迷惑のかからない者同志で楽しむのは恥すべきではないとか、少し強引に話をもっていったりした。そして、同じ本能である食欲でも、皆人によって好き嫌いがあるように、セックスについても、その好みは多種多様であって、常食としているものだけが食べ物であるとするのは、狭い考えて、極端な話、蟻や百足だって食べる人も居る。外国に行けば、山羊の目や脳ミソが最大の美味しい料理になる。そして私のセックスについての好みは、女を従属せしめ、辱しめることによって最大の喜びとする男であることまで話した。それは裕子が、私の好みに通じる女であることを確信していたからで、「きみは、どう思う」と休まず聞いた。「ええ……」と、やや下向加減に返事をしたが、その目は逃げていない。

「貴女はSMって知っているか？」と周囲に人の居ないのを確めて聞くと、意外にはつきりと「本を見たことあります」と言われて、私の方が驚いた。

「何処で？」と聞き返すと、「本屋さんで初めて見て、びっくりしました」と言う。

「ああ言うセックスでどう思う？」となおもしつこく聞くと、その本を見た強烈な印象が忘れられないと言うような話を話した。私は何やら確信を得たので、次の土曜日SMの本を見せる事を約束して、その日は別れて帰宅した。私の隠し続けた性癖が、誇張して言うところの目を見た思いで、子供の頃の遠足の前夜のように寝つかれなかった。

もう梅雨に入ったのか、土曜日は一日中しとしと雨が降っていた。私は通勤には使ったことのない車で、いつもより早く出て、混雑する道をのろのろと出社した。会社のガレージには置けないので、三百メートル離れたモータープールに駐車して、そこから歩いた。短かいはずの昼までが、本当に長く感じられた。

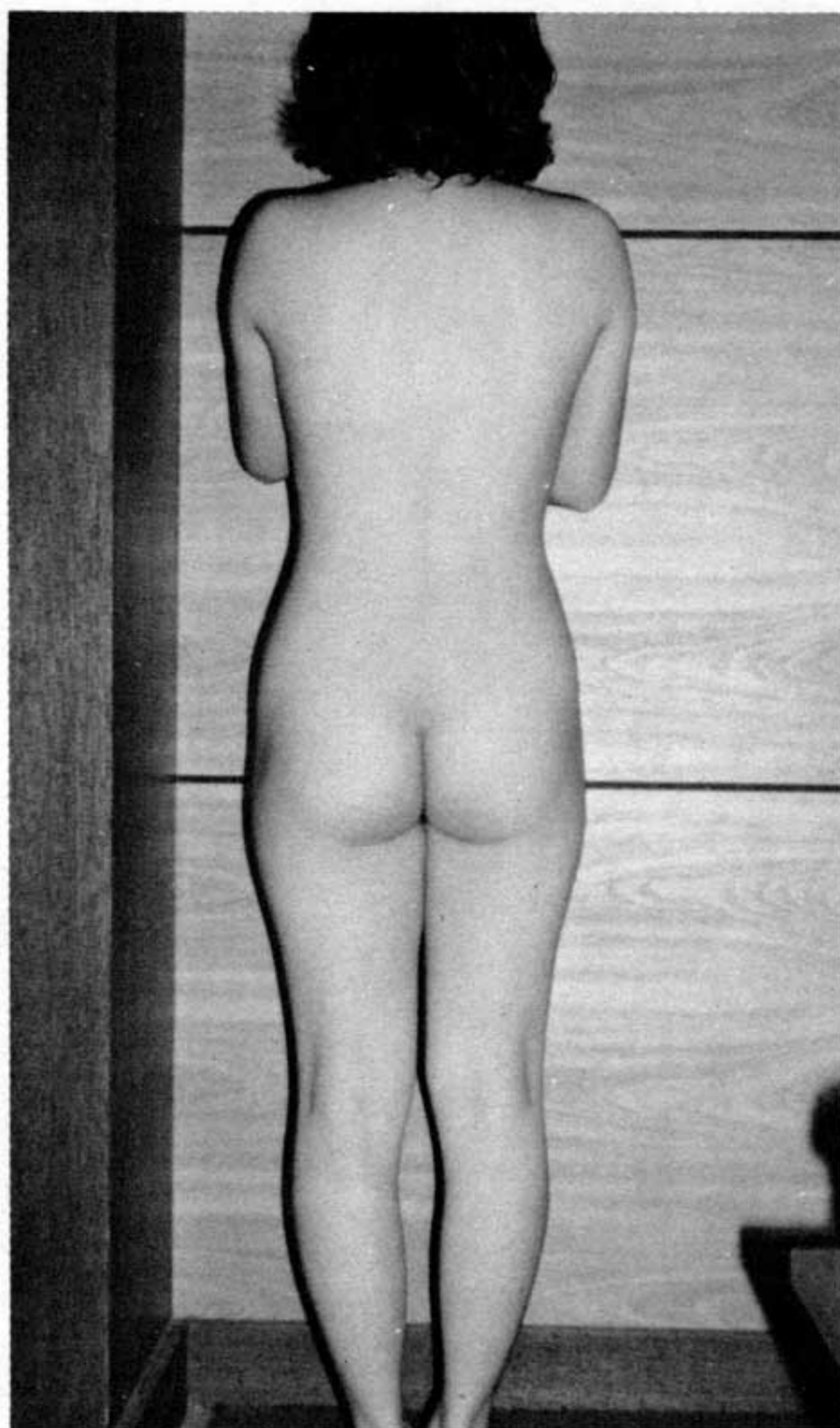
モータープールの近くで待っていると、私服で来た裕子は大胆にもミニスカートであった。私は何かのめり込んでいくものを感じた。

高い駐車料金を払って車に乗った二人は、会社から一步でも遠ざかりたい気持で、高速道路にのり東へ東へと走った。小一時間も走ったところでドライブインに入り遅い昼食を



食べた。車の中でも食事中でも、あまり刺激的な話はしなかったが、助手席に太腿を露出させていられては私にとっては、耳からの刺激など必要はない。

昼食が終って、再び車の人となった二人はしばらく無言であった。何分か走っていると、家も疎になりやがて、低い丘陵地帯になり樹



木に道は囲まれてしまう。もう少し行くと、モーターの在るのを知っている私は、裕子に、「入るよ」とだけ言うと、裕子は返事をせず「OKである。バックミラーを見てモーターに通じる小さな道へと左折した。」

一戸建になっているこのモーターもまだ三時を少し廻ったこの時間でも、そうとう混んでいるらしく空棟は二つぐらいであった。車から降るとき後の座席から、バッグを取り出

したので裕子は興味深そうに視線を送る。きつと察しているにちがいない。しかし裕子は概して黙っている。

部屋は洋式である。ベッドのある部屋と椅子とテーブルの置いてある部屋に隣して風呂やトイレが続いている。低い天井に梁が横たわっているのがいい、まあまあ部屋である。レザー張りの椅子に腰を落して向合うと、急に羞しくなったのか、下を向いてしまったので、私はバッグから数冊のSM誌と写真を

取り出すと、その中の一冊を裕子に向けて広げて渡した。変に羞しがるといけないので逆療法と思い、文章に出来ない言葉で本や写真の説明をすると、顔を桜色に染めて、それでも本を投げ出さず見ている。説明している私の方が興奮していて、椅子から離れると裕子の横に行き、右手でブラウスの上から胸を撫でた。私の手の平から食み出るほど弾力のあつる豊かな乳房がより私をたかぶらせた。そのまま一気という気持をかううじて押えて、風呂を勧めた。裕子は従順だった。

何日か前から縄を搜したが、ごつごつした荒縄でもいいけないと思い、柔いものを搜したがなかなか見付らず、それでも三メートル位のを一本見付けて、今日持ってきたのをバッグから出しながら裕子を待ったが、なかなか出て来ない。覗きに行くと揚場でバスタオルで裸身を包んで立っている。

「そのままこっちに来いよ」と言うと、黙って部屋に入って来た。私がバスタオルをわざと荒々しく取ると、下には何も付けていない。早くも全裸である。

よくSM誌などで、プレイに入ってから、着衣のまま縛って、長々と段階を踏んでからさしてパンティに手がかかると言ったプレイが



でもまだ両足には縄を掛けていないので、裕子は足を交互にくの字にさせながら羞恥に耐えている。

私は先ほど味わった、裕子の豊かな乳房の感触が忘れられず、いきなり裕子の正面に立って、両方の乳房を驚づかみにして、いじったり、そうかと思うと急に手の平を広げて、優しく揉んだりして、じっくり時間を掛けて楽しんだ。裕子は足を止めて、顔を左右に激しく振って、全身を赤く染めながら羞恥に悶えている。裕子は本当に、私に合った女だと満足感に浸りながら、裕子に男性の経験のあることに気付く。後になって聞いたのだが、裕子がまだ高校三年生の夏休みに血の繋がりのない叔父に犯されたということだった。それまでは何の感情のなかった叔父が嫌らになり、ずい分抵抗したのだが割と近くに住んでいたのも、その後も三度ばかり無理矢理辱しめられたそうである。余程父に話そうと思っただが、厳格な父の顔を見ると何も話せなくなったそう。

ポーズだってそうだ。最初はおとなしい縛りから入る予定だったが、裕子の若く白い全裸を見たら、しよっぱなから目に付けていた梁を使って、バンザイの姿にさせたのである。

のMと思った。

久し振りに性癖を満す私は、二本の浴衣の紐まで取り出して、片足釣をやることにした。さすがに裕子は「ウー」と声を出す。

このポーズのまま、私は指と言葉によって飽くことなく辱しめた。若い裕子の肉体はそれに充分に答えてくれた。時間の立つのも忘れていたが、あまり無理なポーズも続けられないと思い縄を解くと、裕子は風呂場に逃げた。羞しさと汗をとるためだろう。私だって汗びっしょりだ。椅子に腰かけて一息つくとも私も全裸のまま後を追う。割と広い風呂も二人でつかると肌が触れる。触れると根から助平な私は又手が出る。しかしお湯につかって落着いたのか、裕子から話し始めたので私もそれで安心し、子供のように戯れる。

裕子の手を取って、私のものをにぎらせると「いや」と肩をですぼめる。

「おれのをさわって裕子のもさわらせろ」と、言うのと、「ううん」と腰を引く。又々風呂場での痴戯にふける。血圧の高い事がちらっと頭をかすめて過ぎる。

風呂から上がって再び縄を手にとると、部屋の中央に肘掛椅子をもってきて、裕子に座らせる。もう裕子はどんな責めをされるのか

知っているはずである。

左右の肘掛に裕子の両足を股がせて、両膝に巻きつけて、椅子の裏で両手と伴に固定する。少し腰を前に突き出させたので、女にとって耐えられない程のハレンチな姿である。女の全てを露出させて、裕子は耐える。もうどんな事でも出来るのだ、私は思い出したよ



うにバッグから小型のバイブレーターを取り出す。私はバイブレーターと言っても、これ一つしか持っていないのだが。

裕子は最初から目をつむっていたが、バイブレーターのビーと言う振動音に、そっと目を開けると、少し驚いた様子だったので、

「心配ない、心配ない、そっと触るだけだから」とか何とか言って、裕子に近づき、右の乳房に押し当ると、裕子はびくんとしたが、やがて顔を上に向け左右に、ゆっくりと振って悶える。私の左手も遊んでいない上に、バイブもやがて乳首から下半身に移動するにつれ、裕子の悶えは一層激しいものとなる。

女の入口の戸を、優しく波打つように押すうちに、私は激情にかられ、椅子の前に膝まつく型で……………。

その間中、私は裕子との接点をはっきりと確認するかのようになり、うつろな目は、見つめ続けて果てた。

私は今日、まだまだ沢山な計画を持っていたが、その十分の一も果たすことが出来なかった。しかしけっして心の中が充実していない訳ではない。本当のプレイは、これから始まるのだ、何も急ぐ必要はないと自分に言い聞かせた。事実その通りになり、私の夢を現

現したのだから。

最後にもう一度、湯につかりながら、次はカメラを使いたい、ローソクも用意したい、バイブだって、何んとか大きなものにしよう。本当はと、心は次のプレイに飛んでいる。本当に私も好き者だ。

日が長くなったとは言え、外に出るともう真暗だ。お腹の空いたのを満すべく、レストランに入って食事するも、裕子はあまり食べられないようだ。

帰りの車の中で、SM誌を一冊、裕子に持たす。どこに隠すか大変だと、裕子は笑った。寮の門限にはもう少し時間もあったが、再び混雑する高速道路に乗り街に向った。

裕子とのますます激しく、エスカレートするプレイについては、又改めて貴重な紙面をお借りするかも知れない。

まちの中のエコー



浣腸責め共感者の立場から……

千葉 大村 盛義

貴、新S M誌SUN & MOONの御創刊、

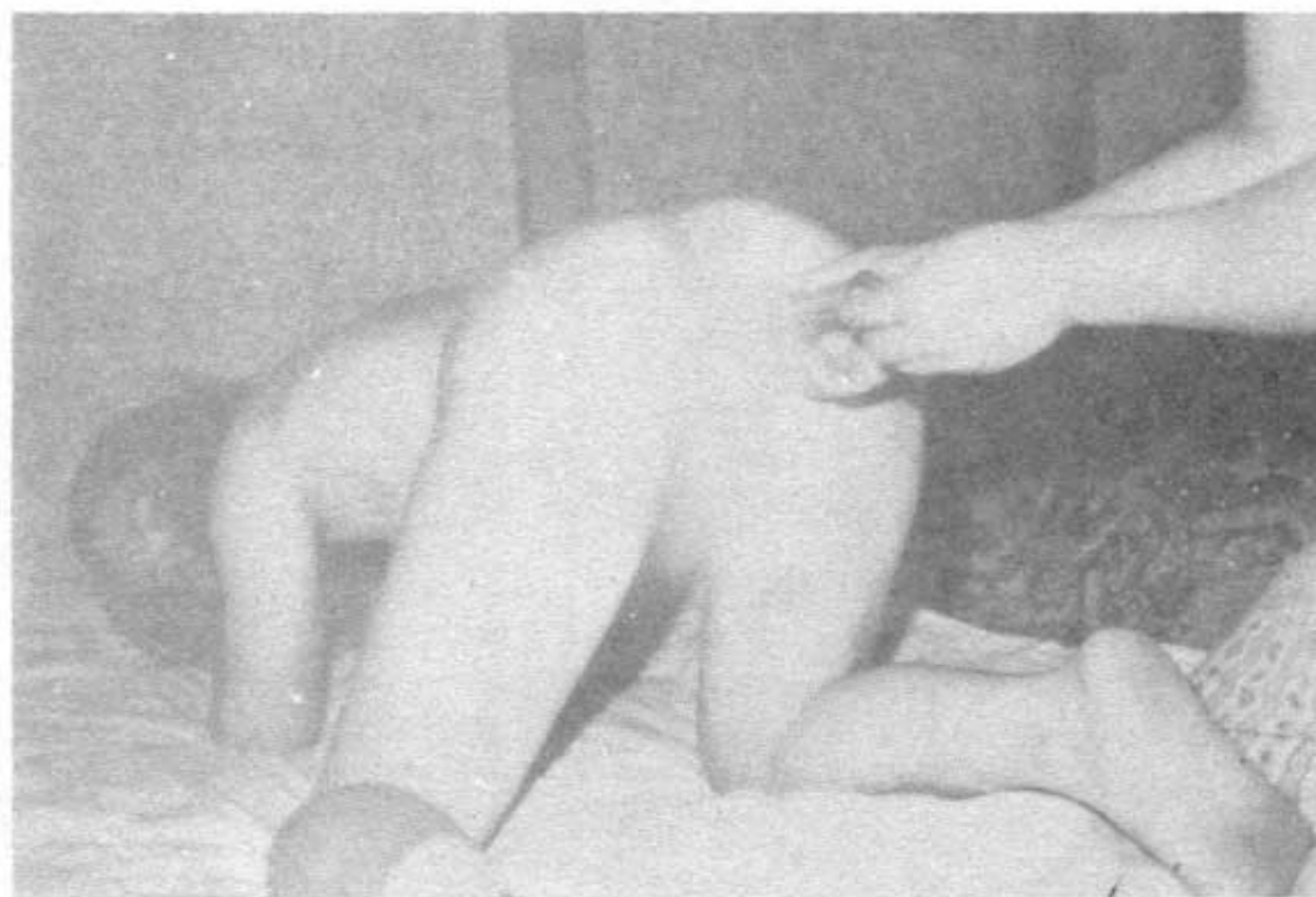
お慶び申し上げます。

「奇ク」が姿を消して以来、寂しい思いをして参りましたが、貴誌を拝読し（まだ二号までですが）「奇ク」にかわる、実感のこもったS M専門誌になり得るのではないかと期待している次第です。

誌上を飾る魅力的なフォトは充分満足感を覚えますが、局部の消去は外国製ポルノ誌をいつも見ている小生にとっては、何ともやり切れない焦躁感を覚えます。しかし、日本の現状ではどうしようもありませんね。まさに性の後進国の感があります。

さて、二号誌上通信欄にての平山連浣氏の御意見に諸手を挙げて賛成するものです。

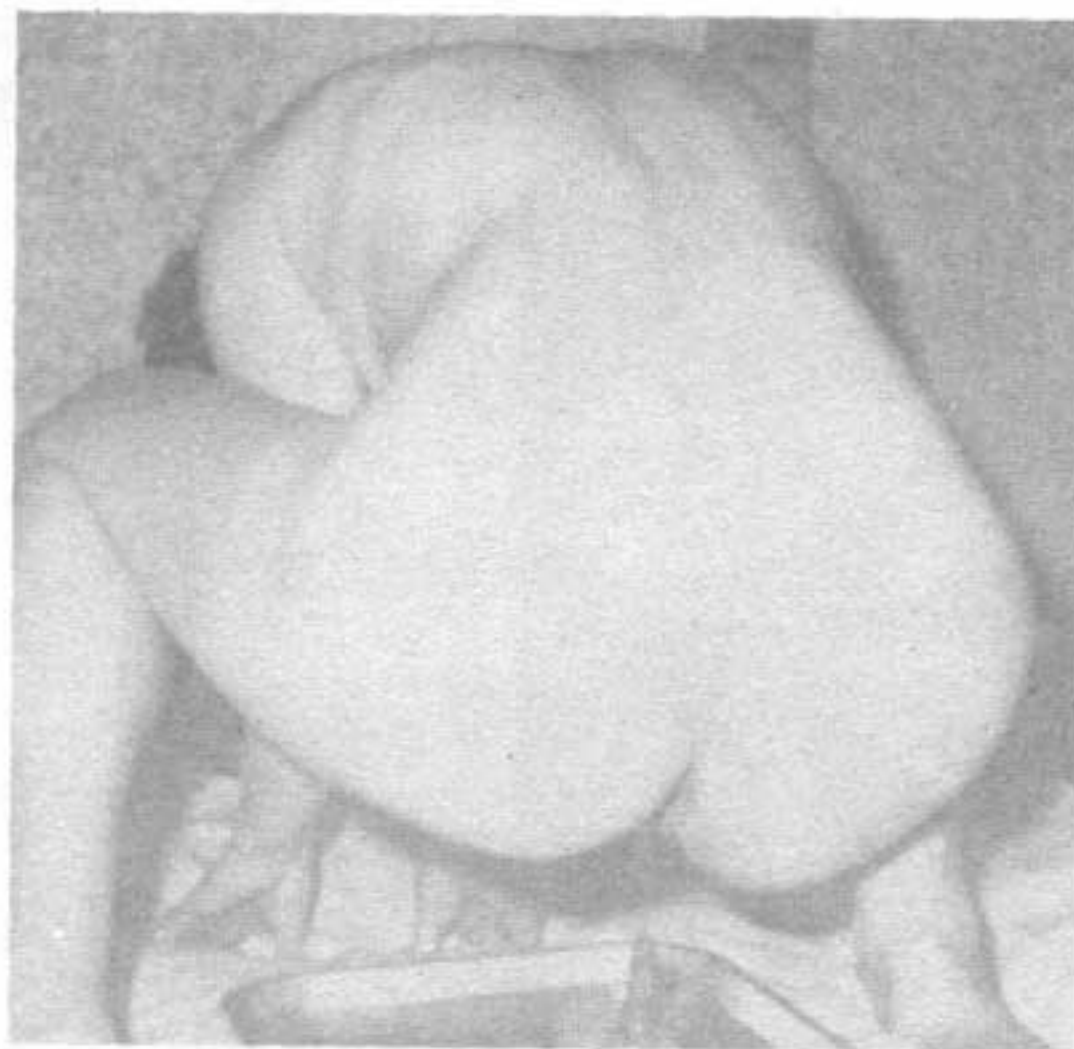
創刊号には記事はなく（浣腸関連の）、二号誌には浣腸記事が当然掲載されているものと信じておりましたが全くなく、一段と失望しました。S Mマニアにとって、浣腸プレイと



言うものがどれ程重要な意味を持っているものか、編集スタッフはまさか御存知ないとは思いません。

過去の「奇ク」誌に於いても、浣腸に関するレポート、体験談、フォト等、大きく誌面を飾っていた事は御承知な筈。又、大勢のファンが、特に最近のSM界の傾向として、浣腸ファンが増えてきている感があります。いわゆる羞恥責めの一環として欠かせないプロセスではないかと存じます。

又、浣腸プレイは絶対に嘘のないプレイであると存じます。



それは、注入後必ず排泄が伴うという事です。他人の見る前で最も人間の恥しい姿である排便の姿態……あたりに漂ようえもいわれぬ臭気……それにあたりを憚らぬ音響等、それらは加虐者側にとっては、聴覚、視覚、嗅覚等を満足させ、被虐者側には失禁、露出等、羞恥責めの極地を味わう事が出来るものと信じます。

いずれに致しましても、SMPは日常的ではなく、非日常の世界の遊びと存じます。従って昼間はお互いに社会的に種々の仕事に従事しており、全く外見的にはSMマニアであるとか言う事は判るわけはありません。しかし、何人と言えども多少なりとも潜在的にそう言ったプレイを願望していると存じます。

そう言った意味からも貴誌が重要な存在になってくると存じます。種々の方法をもって、又、完全にプライバシーを守る条件下にて、マニア同志のディスカッション、あるいは同好会の結成等、お取計いを願えば誠に喜ばしい限りと存じます。

最後に私の自己紹介を——四十才、身長一六六糎、体重七〇斤（中略）SM歴は妻に少々ありますが、現在は通常の夫婦交換プレイ、多数乱交プレイ等、一ヶ月に一回程度参

加しております。

第三号以下各号浣腸記事の掲載を期待させていただきます。また、千代田区の平山連浣氏との文通を希望——お取計いよろしくお願い申し上げます。

——残念乍ら、いまだに「浣キチ生」氏より明確な連絡先についての表示はありません。「八重洲地下街「マイアミ」が性に合った執筆場所のようです。数年来の常連かナニカでしょう。お探し当ての上、交遊記でも御一報願わしく存じます。

エネマが嗜虐遊戯であることについての編集子への啓蒙を、是非お寄せ下さい。私は「プレイ中の不快感を未然に防止するためのエチケット」としか「浣腸」を考えておらず、嗅覚堪能も理解できません。

便秘症でケツタルイ相手に「一喝」する意味から浣腸し、気分爽快になったところからプレイするなら兎も角も、体調を狂わし兼ねない強制浣腸で、果して「重要な」事柄になるものでしょうか。

記事を採り上げる、あげないはさておき、まず「有価値な知識普及、体験報告」を——寄稿いただきたいと考えます。

世田

M^{マゾ} 浸染の推進欲

大阪・堺 中林良雄



月末給料日の夜、成人誌販売の書店に立ち寄り物色中、ふと目新しい雑誌に気付き即刻購入……すぐその足で傍目もふらず帰宅し、一読後うれしきの余り思わず知らずペンを走らせて居ります。

“奇ク”が姿を消してからここ数年間、真のSM誌は一社とて無く、毎号々々買ってみては落胆の繰り返しでした。ケバケバしいカラー写真……まるでマネキン人形に縄を巻きつけた様な味気なさ、もうウンザリでした。

そして今夜、遂に本物のSM誌にめぐり逢えたのです。そのページには、なつかしい佐野みさ子さん、ロマン派生氏等……の活字、まるで夢をみている様です。この手にしている“サン・アンド・ムーン”誌が三号だなんて、残念で残念でなりません。出来ます事なら今すぐ全号手に入れ、一字残さず読みたい気持ちで一杯です。

私は現在三十五才。同年の妻と一人息子の父親です。この世界を知って早や十数年、いまだに本当のマゾの女性を知りません。どんなことがあっても、一生に一度本物のマゾの女性とプレイをしてみたいと念願しております。

妻をM女にと、色々と七年間やって来まし

たが、結局、縛りだけは同封の写真の様に許容してくれる程度にはなりましたが、人一倍痛みに弱く、ムチ打ち、ローソク責め、浣腸などの私の最も好む成就させたい嗜虐は、何一つ許してくれません。警戒心が強く、ことに拒否するのです。これではワサビ抜き寿司を食べている様なもので、今では半ば



あきらめの心境です。

誰でも最初は「真白な紙」……その白紙を「マゾの色」に染めて行くには、皆様はどの様に調教されたのか？ 是非とも御伝授いただきたいと思います。又、私の妻の様な痛さに敏感ですぐプレイに嫌悪する女は不適合なものでしょうか。妻を見ておりますと縛り以外は無理なのか……と考えたりも致します。

但し、セックスは大変好きで、責めが無理なら……と考え、心の中で自分の気持ちを満足させる一つの方法だとも思い、妻を、巨根自慢の友人と交互に攻めるトリオ・セックス・プレイに目下熱中しております。

自分の愛する妻が、他の男性に抱かれセックス攻めにあっている姿を傍で見ていると、S性・M性が同時に満足できる様な気が致します。その私の気持ちも知らないで、この頃では妻も三人交歓を楽しんでおります。

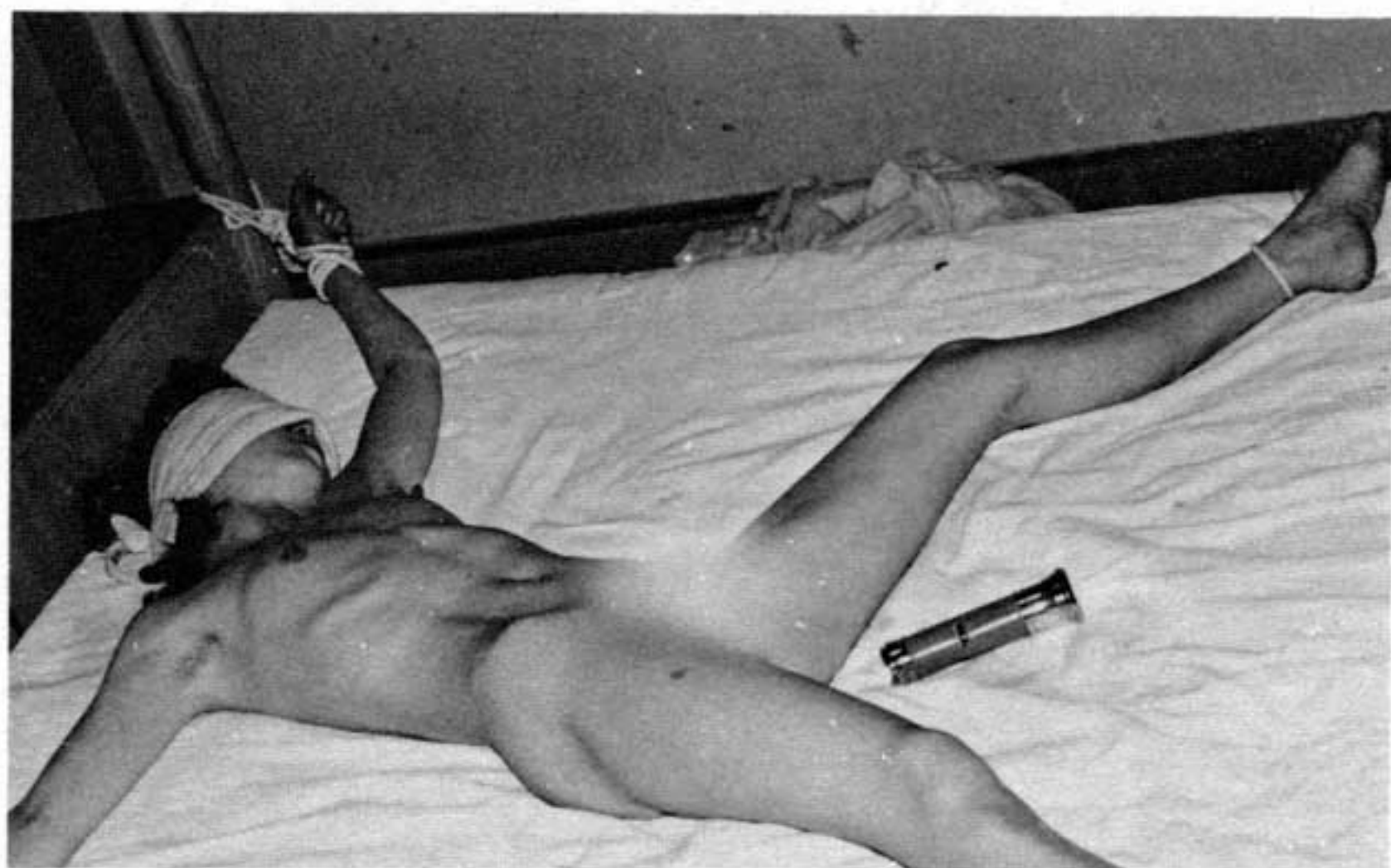
これで「S・M」が加われれば最高だと思うのですが……今のところは「夢」です。ですが、「サン・アンド・ムーン」の様な本格的SM誌を見ると、鎮まっていた趣味が再び無限に広がって行く様に思われだしました。

出来ます事なら月刊誌として、毎月何処の書店でも手に入ります様、御尽力願いたいと



声を大にしてお願い致します。

また、私の希望と致しましては、京阪神近郊でSM特写をされる機会がございましたら是非お立会わせ願いたく、マゾの女性をこの目で確かめさせて頂くような幸運をお与え下



さい。撮影に当たってのどんなお手伝いでも致します。

今後共、素晴らしい雑誌として日進月歩ご発展されます様お祈り致しております。

——熱心な読者をレポーターとする試みは弊誌創刊以来続けております。『特写』の機会があればその「幸運」は巡ってくるかも知れません。しかし、貴男の提供写真を見れば「欲が深い」と読者は思うでしょう。緊縛写真を眺めただけで「エッチノ変態」：

：あなたにソナナ悪趣味があるなんて知らなかった！」と奥方にわめき散らされて何一つ言い返しもできない「オトコ」が多い世の中です。貴男も羨望される身であることを忘れず、好伴侶お相手にますますご研鑽下さい。

私のポルノの文献

新宿太郎

本誌第三号のフィルム紹介「秘密鞭打調教所」を拝見しましたが、偶然にも私が所有しているものと同じものでありまして、おどろき且つ嬉しく思いました。このフィルムの正式題名は「Secret Spanking Cult」となっており一九七二年製作されたものです。フィルムは小奇麗な箱に収められ、箱の表面には題名とスチール写真（勿論ポルノ）が印刷され、裏面には英語、ドイツ語、スペイン語の解説が書いてあります。

私は所用で二年に一度位の割合でヨーロッパ各地を廻りますが、このフィルムは昭和四十七年にコペンハーゲンで入手したものであります。後でも述べますがコペンハーゲンで

は、ポルノ雑誌にせよ、フィルムにせよ内容を確かめて買うことが出来ますので、このフィルムをお持ちの方もいろいろ吟味の上求められたことと存じます。勿論私も種々のSM物の中から選んだもので、このフィルムがやはりSMの傑作の一つだったことが証明されたようなもので、私の審美眼もまんざらではないと秘かに意を強くした次第です。

既に御承知の通りポルノはヨーロッパの可なり国々で解禁になって居り、スエーデン、デンマークは勿論、西ドイツも、更に一昨年にはフランスも解禁になり、美しいポルノフィルムを都市の映画館で見ることが出来ますし、フィルムや雑誌も手軽に入手出来ます。

しかし大部分のショップのものは、セロファン紙でクロージングされて居りますので中味を見た上で買い求めることが出来ないのが残念です。その点デンマークでは雑誌を開き、フィルムを実写した後に決めればよいので、便利であり良心的であります。

私のコペンハーゲン詣ではまだ三回にすぎませんが、渡欧の際は必ず最初に訪問することに決めて居ります。先づポルノ探索の一日を満喫した後ヨーロッパ各地での仕事に取り掛るわけですが、最初に訪問する理由を申し上げますと、興味の他に対税関問題であります。且つてコペンハーゲン発東京行きの飛行機は羽田税関のポルノ検査がとくに厳重な時代があったためであります。今は世界のポルノ解禁でこのような心配は少なくなったこととは思いますが、用心するに越したことはないと考え今も実行して居ります。

コペンハーゲンのポルノ街は本駅のすぐ裏手にあり、神田の本屋街のように軒をつらねて居りますので、道を聞かないでも気楽に訪れることが出来ます。先づなるべく大きく立派な店に入るのがコツです。良い客だと見られますと簡単な応接室でビールやコーラのサービスを受けながら、品物が選べるわけであ

ります。店内の書棚には数百数千種類の書籍、フィルム、頑具等が陳列してありますので、どれを手にとってよいかに迷ってしまいます。従って店主（上客と見ると店主が説明につきます）に希望の種類、例えばSM物と指定しますと、新しい物、評判の良い物を数点選び出して映写してくれるわけです。私は英語以外出来ませんが、店主は下手な英語で説明してくれますし、セックスに関する話はどの国でも手まねで百パーセント通用しますので、心配なく楽しむことが出来ます。

フィルムは大体八〇〜一五〇クローネ（約八千円〜一万二千円位）、雑誌は一〇〜二〇クローネ（五百円〜二千元）位で買えますので、羽田税関さえ自信があれば可なり持込めると思います。尚お値段の方は値切るのは当然で十五%位はまけて呉れます。しかし世界的ポルノ解禁の波に押されてコペンハーゲンのポルノ街も行く度に寂れてゆくようで店を締めるところも続出して居ると聞いて居ります。今年十一月久し振りでデンマークを訪問するつもりですが、街がどのように変わって居るのか一寸寂しい気も致しますが、一面サービスが良くなっていることも考えられ楽しみです。私が集めた品物もフィルム二〇巻、雑誌は

百冊に及びます。私はS専門ではありませんで、オールラウンドプレイヤーのつもりで居りますので、蒐集も多方面にわたって居りますが、勿論アブノーマルな物が殆んどであります。御参考までに変わったもの二、三御披露しておきます。

(1)Violence 強姦 (2)Orles in Leather 皮具責め (3)Satisfied Maschist ツンビスト (4)Pregnant Lust 妊娠10ヶ月のSex (5)Animal Love 犬と豚と女 (6)Toilet Orgg 排便と女 (7)Shaving Torture 剃毛責め……

尚お雑誌類は鞭打もの、浣腸もの、剃毛もの、獣姦もの、ホモ、等のほか刺環もの（乳房や陰唇に金属の環をはめたものそれを鎖で吊り上げたもの）等は珍らしいかと存じます。また二年前はチルドレンラブ流行の走りの頃で、若干は取り揃えて来しました。

以上私のコペンハーゲンでの入手文献の御紹介を申し上げました。SMライブショウ（実演）のこと等はまたの機会にお知らせ致します。

前にも述べましたように十一月渡欧致しますので、何かの御参考になるようなこと等御教示願えれば勉強して来たいと存じます。

本物に飢えて……

三重 名古屋建治

貴誌に、アドバイス―批判―希望をとりまぜて書きます。

まずは批判から――

表紙の図柄は一号も二号も同じで芸がないと思います。なんだかイメージ的に暗く、あの種の不潔感さえ与えてしまうのではないのでしょうか。中味はどぎつくても表紙は（表も裏も）さりげない抽象的なもので、同じSMでも綺麗にまとめたほうがいいかと思います。“なんだ、表紙ぐらい。どうだっていいじゃないか”と思うかも知れませんが、これが案外と重要な事だと、私自身が書店で感じたことなのです。

私は高校時代から十年来SM各誌を毎月購読してきていますので、SM誌を買うことは何んの抵抗もないのですが、この本だけはさすがに店員のところへもってゆくのが大変気恥しく、高校時代のようなウシロメタサを味わいました。

SMは今や市民権を得て陽のあたる場所に顔を出すようになりましたが、やはりSM誌はあまりに表紙を露骨にするとまずいのでは……。一応ベールをかけて美しくぼかすのも手かと思っています。

二つめは価格の点です。三千部限定ではないに、もっと薄利多売にして価格を下げてほしいというのが正直なところです。現行価格はちよつと二の足を踏む値段です。他にも幾多のSM誌が競い合っているなかで高価すぎるというのは、長続きしないのではと心配させられます。

奇譚クラブが書店から消えて、いつも飢えに似た気持を抱きつづけてきた私にとって、貴誌は今後は非とも内容充実し、より発展してほしいと思っています。

三つめには、もう少しグラビア・写真をふやすことです。他誌のようにカラーにする必要はありませんが、もっと数をふやし鮮明で



綺麗な写真を……。現代は活字から映像へと人々の志向が変わってゆきつつある時代です。TV、マンガ、劇画、写真、映画へと……。いわば映像文化の時代です。私もSM誌を買ってもあまり活字は読みません。長々とした対談も単なるのろけやひけらかしの感じがします。

よくプレイボーイが、この女とはあアだった……こうだった、と得々と話をされてもちからはシラけるばかりですが、貴誌の対談もそれに似たところがあります。SM誌の読者とは、はっきり言って「飢えたる人々」です。その飢えたる人々には、ただ「いいぞ、よか



鼻責め・参考写真 撮影者不詳

ったぞ」という「満たされた者」の対談ではなしに、飢えを満たすような写真で示す事の方が読者は喜びます。どうも説教めいてきました。すいません。批判はこれくらいにして今度は希望を書きます。

貴誌の良さは、従来のSM誌にない本物のつよみではないでしょうか。佐野みさ子さんを貴誌がとりあげた事は大賛成大歓迎です。佐野みさ子さんもまさにマゾの本物です。

奇クがなくなってから、もう一度佐野みさ子さんを見ることができないものかと、SMコレクターやセレクト誌に彼女の登場を強く希望して投書したのですが、願いかなわぬまま今までできた次第です。彼女のカメラレポートを三号だけでなくシリーズとして毎号つづけて下さい。かつて奇クで、ロマン派生氏が「縛りの美学」というシリーズものを手がけたことがあります、あのときの縛り方が実にみごとに彼女の美しさを引きだしていました。その当時はそれを見たいばかりに奇クを買っていましたが、いかんせん写真が小さく不鮮明な印刷でした。ロマン派生氏に頼んで、是非とも「縛りの美学」で撮った写真を再度公開して下さい。それを別冊グラフの続マゾ牝虐艶集として出版して下さい。とにかく

く彼女の写真を一枚あまさず公開して出版するよう努力して欲しいものです。(中略)

我々SM愛好家は本物に飢えています。だから、貴誌には是非とも他誌のマネのできないものをやって下さい。例えば「鼻責めの特集」なんかはどうでしょうか。

最近では段々と他誌も緊縛写真に凝った縛り方をするようになってきました。吊り責めはマゾっ気のないモデルではとうてい無理だろうと思っていました。最近ではちよくちよくそんな片足吊りだの、逆さ吊りだのという写真が載るようになりました。それでも他誌のまったくマネのできないのが「鼻責め」ではないでしょうか。

高校時代、奇クをおっかなびっくり買っていたころ、グラビアに大塚啓子さんの鼻責めのアップ写真が載っていましたが、そのときの鮮烈な記憶はいまだに生々しいものがあります。いまのSM写真とは、いわば「縛り写真」であって「責め写真」ではないからだと思えます。その「鼻責め写真」にはまさに責めがあつたのです。鼻をさまざまな方法で責めたバリエーションに満ちた顔のクローズアップの写真は大特集しては？ それができるのは貴誌だけです。



もつとも、いざ、鼻責めをいとわないう女性？ という困っています。大塚啓子さんをひっぱりだすのは無理だとしたら……あとは誰がいるでしょうか。私の記憶をたどってみると、かつて辻村隆氏のカメラ

ラハント（何年何月号は忘れましたが）「矢も楯もたまらぬとき」にでていた篠原レイ子さんがいましたが、もう何年も前のことでこれも無理かもしれません。彼女に名乗り出てもらわなくては所在もわからぬでしょう。あとはSM奇譚誌に投稿フォトとして「鼻責めの好きなペット」と題して紹介されている女性がい思い出されますが……。

ずいぶん長々と書きましたが、この辺で筆をおきます。我々SM愛好家は本物に飢えています。その点を重々お汲みとりの上、今後とも他誌にはマネのできない内容で、より発展するように願っています。

——「飢えた人」からの書状を頂戴して、「貴男も『満ちたりた者』の一員になるよう努力してはどうですか……云々」の要旨の返書を編集子が呈したところ、後日、

「先日貴君からの返信を受け取りました。

私の指摘に対する答はもつともだと思いました。このことで、あらためて気がついたことは、貴誌が従来の各誌とは出発点も、そしておそらく到達点もまたまったく違うところにあるということでした。マニアの為のマニアによる貴誌が、今後どのようなに

充実してゆくか大いに期待しています。偏向的編集方針けっこう……教育界だけでなくこの世界にも幾多のおちこぼれがあると思います。それらの者の為にも偏向にみちた深く鋭い編集を。小生を映像作家にという御好意はありがたいのですが、私にはとてもとてもそのような才覚はありませんので、今後とも一読者として貴誌の充実発展を見守ってゆきたいと思っています。いろいろたいへんでしようけど、どうかガンバッテ下さい。」

との葉書を受けとる羽目になった。

「羽目になった」と書いたのは、いささかガツカリした心境だからである。高校から十年來のSM誌読者と記されたからには私よりぐっと若い世代の人である。その若い人に、他人を羨望やシラけで見るのではなく、充足の生活に踏み込んでみなさいと提案したことも蹴られた思いは無念感すら湧かせた。

どうか読者各位、さまよえる気持ちを「サン・アンド・ムーン」で鎮めていただきたい。それがなによりも「自己の改革」に役立つこととなるからである。

世田

妻は無関心……

鎌倉 戸板康久

七月に行きつけのSM誌を売っている本屋に行きましたところ、貴誌の一号・二号を店先で見つけ、パラパラとめくってみて軽いショックを感じました。多種類あるSM誌の中で、現在までに私を強く引きつけたのは奇譚クラブぐらいしかありませんでしたが、それに代わるものとして私の目にうつったので

す。
二号誌上の関峰夫氏のSMプレイ雑感に、「……SM誌を見るより以外に自己のSM的傾向を満足させる方法を知らなかった時代がある……」とありましたが、今の私はまさにその通りなのです。ただ極く最近私はSM写真が自分で撮りたくて、ネガ現像を始めるようになったになりました。資金不足のため印画紙への焼付けはまだなのです。家を買った暗室にする場所は確保できたのに、器具購入にまわす資金がないというわけです。従ってまだまだSM誌を見ることができしか満足させる方法がない

ことにもなるのです。

私の妻はSMに関しては全然興味を示しません。私が「ちよつとだけ縛らせろ」と言っても受付けてくれません。ただ私がこの種の本を読む事には何も言わず、外でSMプレイするなら「どうぞ勝手におやりなさい」と言います。しかし今の所一度もプレイ経験はなく、SM写真撮りの経験もないので、機会があつたらぜひどなたかの撮影に同行させていただけたいと思っています。私が撮った写真を妻に見せれば、妻にも心境の変化が起るに違いないと思われるからです。

さて、話変つて六本木氏の「好事三昧」へと引きつがれた牧本敬子と編集長のカメラ・レポートですが、一号を読んだ後二号ではどうなるか非常に興味が湧きましたが、読んで少々失望しました。なぜか、と言うと敬子夫人の心の変化が伝わってこなかったからです。そこで私が考えたのは、彼女自身、そして



彼女の夫君による感想文のようなもの——たとえば夫君は自分の妻を他の男性にまかせた時の気持ち、後日見たであろう妻の写真について述べ、それらの事を夫婦二人でどう話し合ったか、を原稿提出してもらってはいかがでしょう。私はお二人のことを思うと我がことのように興奮してしまいます。

また、二号の中とじの写真集の中での「肌
絵羞恥責め」についても、私は非常に興奮い
たしました。なぜならもしかして、この写真
の主は一号の座談会に出席しておられた「い
れずみのつもりで身体に絵を書く」とおっし
やっていた方の作品ではないかと思ひ、なに
か友人が奥方の恥しい写真を見せてくれたよ
うな気持ちになったからです。

話は飛びますが、私は高校生の時代頃から
女性の洋服や下着にかなり興味を持っていま
した。これはよくある下着フェチとか言うの
とはちがい、自分の身につけるとかではなく
女性をより魅力的に見せるものとして考案し
てみる興味なのです。今でもひまな時に色々
なドレスや下着の絵を描いたりして楽しんで
いますが、その内に見ていただきたいと思っ
たりしています。

この手紙を書いている今、一人で家で留守
番でしたが、妻から電話が入りあと十五分位
で駅に着くから、とオデムカエの催促です。
こんな手紙はやはり一人の時でないと書きづ
らいので、この辺で失礼します。

——年令二九才、会社員。子供無し、妻と
二人暮らし……とありましたが、今が一番好

機なのに、と消極さを嘆きたくなりますネ。

「サン・アンド・ムーン」をご妻女に読ま
せる、勇気ぐらいは持っていたきたいもの
です。『完全なる結婚』にするために！

「SM」なんて安易に言葉を使うから「そ
んな不気味なことは「外」でやってチヨウ
ダイ」と肘鉄食ってしまうのです。女性下
着の絵にしても、ドレスデザインにしても
ヒソソリ、コソソリ留守中にするのではな
く、堂々とクロッキープックをひろげて描
きまくりなさい。「おい、お前、ポーズをと
れ！」と命じ、新居の中で白昼でも妻をヌ
ードにさせること、ついでにカメラでスナ
ップ等々「馴致の夢想」を一步步つでも現

実に移行してみるといいのです。

「縛り方教室」に出たって面白くナイデス
ヨ。他人の技術の一端を教わって何の役に
立つというのでしょうか。美の創造に努める
つもりなら身近かな素材で独自な事を実践
する方が有益です。器材購入の資金に積み
立てるためにも「外」に関心を向けること
を断って、まずは奮起してみることです。

その内、貴男の頭上にも陽光・月光が注が
れるようになるかもしれません。それには
「私はこれだけのカメラ・レポが纏められ
る」と自負する作品を「一発勝負」で当方
にお寄せ下さるのが一番でしょう。世田

Mの世界を……

松山 平野賀一

このたび「SUN&MOON」がある事を

知りまして、さっそく買い求め大変感激して
おります。と申しますのは、現在刊行されて
おります数多いSM雑誌は、一様に新鮮さを
失ない、これといった卓越した作品もないか

らです。

フォトもその道の規制のせいでしょうか、
目をひく程の物も少なくて、単なる職業モデ
ルが云うなりの演技をしていることがすぐ判
明してしまうだけのものです。



ところがこの雑誌は、現実には自分達の体験を主体に構成していて、それだけでも出色でした。

私もSMに興味をもちます一人ですが、どちらかと申しますと、自分ではM性であると思っております。責めを受けている主人公があたかも自分であるように、体の芯から燃えてくるのが解るのです。その事をもちまして私もプレイの友を探し、何回となく手紙を書いてはSM雑誌に送ったのですが、結局は一度も返事が来ませんでした。

私には妻がありますが、SMには全く関心がなく、むしろ嫌悪の念で私を見る始末です。そんな毎日とは裏腹に、SMの世界を求め

る自分というものが、日を増す毎に強くなっていくばかりです。

よく雑誌記事を読みますと、「SMプレイの最中にSはSの世界をMはMの世界を知る事が出来、身も心も燃える云々」と書いてありますが、Mの世界と云うものを知る事が可能でありますならば、是非ともMの世界に入ってみたいと思ひましてお手紙を書きました。

編集部の方々にお願い申し上げまして、大変恐縮ではございますが、私に「Mの世界」を教えて下さる方、又、ご夫婦の方でもよろしいのですが「性奴」として扱って下さる方がございましたら、ご紹介して頂けないものでしょうか。

自分はプレイの経験はございませんが、真似事はやった事がございます。又、ご紹介が無理な時は、そうした方と文通だけでも出来ればと思ひますので、よろしくご配慮下さるようお願い申し上げます。

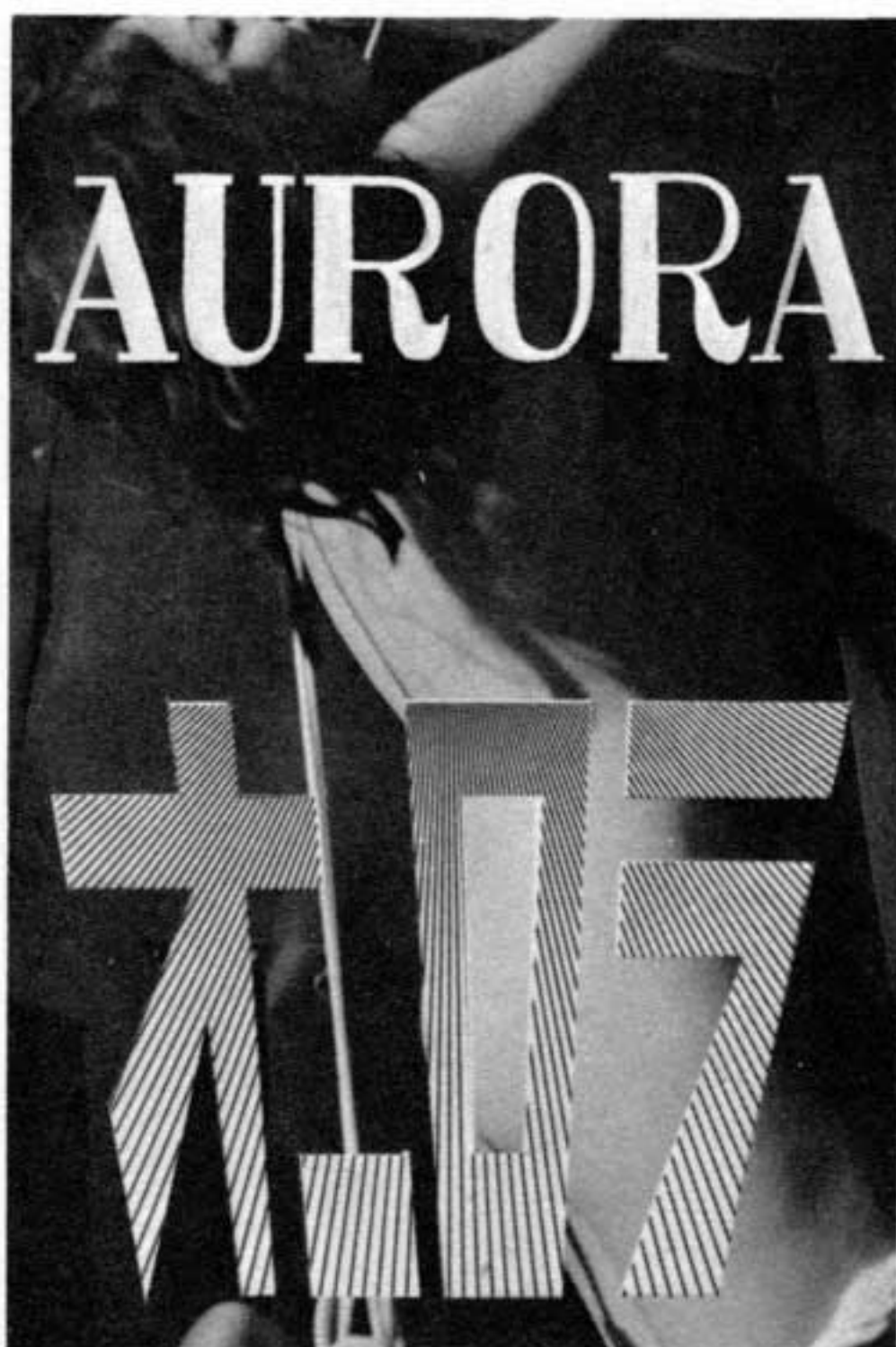
——女房に嫌悪の目を向けられる。それでも「別れることができず」同じ屋根の下で暮している……自虐的生活は「Mの世界」ではないでしょうか。

世俗なSM「雑誌記事の世界」での男性M

は、マスターベーションを女に見られる、女の手を加えられる程度のもので、愚かにしてドン欲な性欲発散の手段でしかありません。またそれを商売にしている「女王」がいるのですから呆れてしまいます。

貴男は貴男の性志向で、もっと奥さんを怒らせてしまわれるといいでしょう。その結果をお知らせ下さった上でないと、懊惱晴らしのご相談には編集部は応じられません。興味本位の一時的性奴希望は、他人の私生活を盗み見る興味に憑かれたまやかし物です。それでは誰も薄気味悪がって相手にしてはくれないでしょう。「縁あって結ばれた」筈のご夫婦なのですから「縁」を最大限に活かすことから出直しされることを、まずおすすめします。

世田



特に、と強調しておいた上で互いに性意識・性向を見きわめた男女の「生活」を「慈悲のあるもの」としたなら、単純にSと表現する「流行語風の表示」は極力使いたくないものになります。「授愛姿勢」(言動)と「乞愛姿勢」(言動)が、男女または女男の間にあってこそ対等にあるいは合致した人間交際となるでしょう。異性に対して「授愛」の側に立つ方がS、「乞愛」の側

に立つのがMと考え、その考えを固定し巷間に広めるなら、倒錯愛・異常愛という見方、受けとめ方もすたると思われるのです。また、プレイと云ったりゲームと云ったりする享楽手段についても理解不足だと思われます。プレイは現象を追って楽しむことです。ゲームは結果を求める楽しみ方なのです。その違いを、秋の夜長を幸いに熟考され

るとよいのですが。

享楽という言葉の印象も人によつては遊蕩という感じと混同されやすいものですが、「授けてやる」とする者と「懇望している」者との出会いであれば、愉楽を分かち合う精神の発揮となつて示される無我の境地を意味しましょう。遊蕩は自我の欲望成就に限られて、おのずと異質なものとのお判りになろうかと思えます。

慈悲和睦のある異性交際は、人間形成がなされた人格者ほどはたから見て「異常」ではあつても当事者間では愛を知ろうとする作業です。

「サン・アンド・ムーン」は啓蒙と、進展を推奨し、慈悲のある暮しを目指す知謀普及誌にしたいのであつて、教唆刺激の交際情報誌風に体裁をとりたくはありません。

たとえば「授愛派」が「乞愛派」に呼びかける通信文であつ

ても、自己の「宣言」であつて欲しいし、風采を相手に知らしめる写真を添付して欲しいものです。真摯な人ほどそれが出来る筈のものであり、義務ほどに考えていただきたいものです。

自筆の似顔絵だつていいのです。自分が地上にふまえて立つ、自己の存在を相手に知らせる基本の姿勢で、未知なもの——オーロラのような輝いてみえる遙かな存在の人たち——を見上げていて下さい。

伝播(広くつたわること)を期待する「宣言」は、無常迅速の感がひととき強まった今日の世の中でも物堅く自分を示して残すものでなければなりません。——「好奇心」「希求」「成就願望」それぞれの明示もそれに含まれなければ欠陥でありましょう。言うは易く行ふは難し……の事態で、志操を貫くのであれば、自己を生かそうとする努力が伴わたるのが当然です。

気羞しきで自己主張すらかな
わぬようでは努力の片鱗もない
ことになります。

嗜好以前の人間成長に各自が
心掛ける姿勢もまた必要なので
す。

『オーロラ(極光)』欄を設置す
るに当って、趣旨を徹底したい
と思いますし、趣旨に沿った投
書を歓迎します。

現在まで、編集室に届いた読
者欄掲載希望のご投書は余り
に通俗的なものでありすぎ、弊
誌の趣旨から申せば記載をため
らうものばかりでした。

今後は購読者各位の熟慮した
ご投書をお待ちすることとし、
真摯果敢な積極的なご活用をお
待ちしております。

■交歓文記載希望の要項■

- 一、住所・氏名・生年明記
- 一、一篇につき二千円申し受け
ます。(連絡費、誌代を含む)
- 一、四百字詰原稿用紙に記入の
こと。文章の長短には制限を

設けませんが、割愛させて頂
く部分があることをご承知お
き下さい。

- 一、写真(横顔可)添付のこと。
- 一、その他、極力自己の存在、
身上(略歴)について詳記さ
れること。但し、投書主のプ
ライバシーは扱者の判断で秘

匿厳守します。
希望する仮名も付記して下さ
い。
以上





変収

興起

錦秋の候となりました。一年中で一番爽かな筈の気候ですが近頃では余り期待できなくなりました。一年前の今頃のことでした……回覧式同人誌から思いついて市販誌にしようではないかと提案し、その実現化に向けて始動したしたのは。「小説SMセレクト」誌で、回覧式の方は触れてあったのですが、反響は皆無。「SMばやりだ」というけれど、本当の仲間を求める実

践家はいないもんだ」という感慨が誰彼の口からもつぶやかれていたのです。

しかし今では恐らく何処の雑誌社より、かくれた実践家たちの親和が寄せられているのが感じられます。正直に、嬉しいことだと思っています。

今号では、突然湧いた玉木夫妻の取材が巻頭を飾り、ようやく弊誌ならではの自負めいたことを云っても過言にはならない実証を果しました。その結果耽美座談会は外され、「スツキリしたなあ」と感想を洩らす読者もおいでになると思います。だとすると、ささやかながら天候に代って「秋の爽かさ」をお伝えしたことになります。

一方、久し振りに特写に専念できたのが「北島タエコ」夫人の上京記事——「雁のように北から来た夫人」——でした。視姦愉悦を味わった私は、もう何もする気になれず、文字綴りは

立会人であった邑内氏に一任、これで六号のメインも決ったと「変収」に興起している所です。

秋になって、「病葉一枚」の安否を気遣うような思いでおられた「独悦」の紳士森山氏は、一身上のご都合で続編のご執筆叶わず、ご自身も無念を表明されておられました。ご了解下さい。しかしその分だけ意欲増倍して次号にご寄稿下さるそうです。

弊誌の「限定三千部」という冊数が、斯界のスペシャリストを相手にした数であるとか、それらの人々に知れ渡っている物であるなら、反響も参格も多くなり誌上収録の記事すべてが、「知識の宝庫」の観を呈すでしょう。しかし、愛好・同好の士の総人口を想定しても極く極く僅かな一部の方の目に留っているのに過ぎません。それにしても新旧こもごもご声援下さる方が、それぞれの立場目標を弊社

に託しての登場で賑わい始めました。

この予想を遙かに上回った共鳴が活気となって、「サン・アンド・ムーン」を支えて下さる限り、年内に月刊化も可能となることでしょう。

「まちの中のエコー」はお断りを記しておきましたように、編集子宛にご親書賜ったうちから採り上げさせていただいたもので、今回は二回目です。タイミングよく電話交信ができ、これから「書簡送付します」と告げられた方が続々ご意見を述べて下さる筈で、提供資料の取扱いについてご納得いただけると、ロマン派生氏のように玉稿を弊誌に的を絞ってお寄せ下さるようになられると思われまします。

四号から体裁が変わったとの印象が各位にあるようですが、これは手弁当提げの積極的仲間入りをした下さった浦戸氏の尽力反映です。

(世田)